

神明遺跡

(第1次・第2次調査)

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集

1998年

土浦市教育委員会

土浦市遺跡調査会

神明遺跡

(第1次・第2次調査)

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集

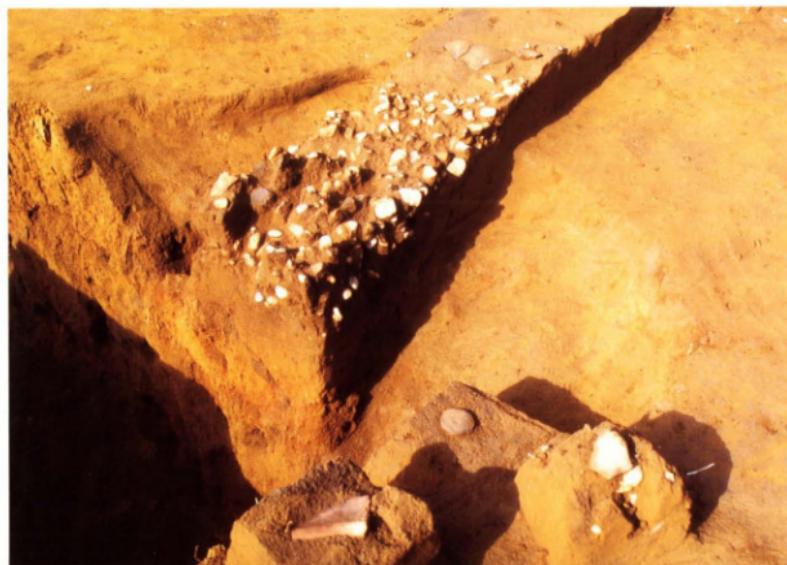
1998年

土浦市教育委員会

土浦市遺跡調査会



遺跡遠景（北から）



3号住居炉址検出状況

序

土浦市は現在、第5次総合計画の一つとして、総合運動公園を常名地区に建設することを計画しています。これは、現在ある川口運動公園の機能を拡充・移転することで、より一層のスポーツ行政の振興を図る目的によるものであります。

移転先となる常名地区は、市指定史跡の常名天神山古墳や市指定文化財の金山寺五輪塔など、貴重な文化財が少なくない地域です。建設予定地内には、埋蔵文化財の遺跡が4か所含まれています。運動公園の建設に際しては、記録による保存処置を講じる必要があります。

そのため、土浦市では平成5年度から埋蔵文化財の発掘調査を継続して行っています。この結果、平成9年度は、縄文時代の家のあとなどの貴重な文化財が発掘されました。この報告書が郷土の歴史の解明に役立ち、今後の文化財行政の発展につながることを祈念するものであります。

最後になりますが、調査に際して御協力をいただいた関係諸氏、諸機関に厚く御礼申し上げます。

土浦市教育委員会
教育長 尾見彰一

例　言

- 1、当報告書は、土浦市常名地内に建設を予定している上浦市総合運動公園建設事業に伴ない、実施された埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2、当報告書は、上浦市大字常名2774番地ほかに所在する、神明遺跡(県遺跡番号 5332、市遺跡番号 C-57)の第1次及び第2次調査に関するもので、調査面積は各々3062m²と3916m²である。
- 3、発掘調査は、上浦市都市計画部新運動公園課(現 公園緑地課新運動公園建設室)から委託を受けた、上浦市遺跡調査会が実施した。調査担当は橋場君男があたり、調査員 本田信之と鶴町明子がこれを補った。
- 4、発掘調査は、平成9年7月8日から平成9年9月18日まで行なった。整理作業は、平成9年10月から平成10年3月まで行なった。
- 5、本書の編集は、橋場君男が行った。造構についての執筆は、本田信之、鶴町明子、橋場君男が、遺物についての執筆は、石器を窪田恵一、繩文土器を福田礼子、その他の遺物を橋場が担当した。写真撮影は、造構を本田、鶴町、橋場が、遺物を橋場が行なった。
- 6、当調査については、以下の方々や機関に、御協力と御厚意を頂きました。記して感謝申し上げます。(敬称略、50音順)

海老沢 稔、株式会社国土測量、小玉秀成、財団法人茨城県教育財団、清水 薫、仙波 亨、
土浦市都市計画部新運動公園課、土浦市文化財保護審議会、根本達夫、萩野谷 悟
- 7、当調査の出土遺物や記録類は、上浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。

凡 例

- 1、遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真ともに一致する。
- 2、挿図版中の縮尺は、遺物は、基本的に1/3または1/6、小型のものは原寸で表現した。遺構は、基本的に1/60、遺構内の付属施設と全体図は掲載されたスケールによる。
- 3、挿図中の遺構の表現方法は、以下に従う。
 - 1) 方位はすべて北を示し、数値は海拔高度を示す。
 - 2) 遺構の推定方向は、破線で示す。
 - 3) 焼土・被熱赤化範囲 硬化面 土器・土製品 ● 石製品 ▲ 骨粉 △
 - 4) 略称 竪穴住居：S I 土坑：S K 構：S D 古墳：T M 掘乱：K
ピット：P
- 4、挿図中の遺物の表現方法は、以下に従う。
 - 1) 回転復元実測を行なった遺物は、中心線を一点鎖線とする。
 - 2) 実測図上の矢印は、ナデやケズリなどの調整方向を示す。
 - 3) 法量欄 A：口径 B：底径 C：器高
〔推定値〕 ……回転復元などによって、推定して得られた数値
〔現存値〕 ……現状で遺存する部分のみの数値
 - 4) 土器 繊維土器 須恵器：断面黒色 黒色処理 炭化物付着
陶磁器 灰釉 鉄釉 青磁
6) 石器・石製品 研磨面 素材時の剥離面 敲打痕
- 5、遺構の番号のうち欠番となっているものは、発掘・整理中に検討を加えた結果、遺構ではないと判断して削除したものである。
- 6、遺構の覆土・遺物の色調判定は、『新版 標準土色帖』(編 小山政忠・竹原秀雄 1990) を用いた。
- 7、挿図4では、2万5千分の1地形図「常陸藤沢」を用いた。

平成9年度土浦市遺跡調査会組織

会長	須田直之	土浦市文化財保護審議会長
副会長	尾見彰一	土浦市教育委員会教育長
理事	大塚博	土浦市文化財保護審議会委員
	五頭英明	土浦市企画調整課長
	出地隆治	土浦市区画整理課長
	坂入勇	土浦市建築指導課長
	石神進一	土浦市都市計画課長
	細田俊雄	土浦市耕地課長
	内海崎保生	土浦市土木課長
監事	中川茂男	土浦市教育委員会教育次長
	小野政夫	土浦市監査事務局長
幹事長	宮本昭	土浦市教育委員会文化課長
幹事	矢口俊則	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館副館長
	萩島優	土浦市教育委員会文化課課長補佐
	小貫俊男	土浦市教育委員会文化課主査兼文化財係長
	桜陽介	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館主幹
	塩谷修	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館係長
	石川功	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館主幹
	黒澤春彦	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館主幹
	中澤達也	上浦市立博物館主幹
	関口満	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館主事
	橋場君男	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館主事
	宮本礼子	土浦市教育委員会文化課文化財係主事

調査者名簿 (敬称略50音順)

調査担当 橋場君男 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員)

調査員 窪田恵一 黒田友紀 鶴町明子 福田礼子 本田信之

調査補助員 野原大輔(茨城大学) 山内初子(奈良大学)

事務担当 鈴木ひと美

事務局 土浦市教育委員会文化課

発掘参加者 (10日以上)

赤根茂也 新 清 石浜敏子 市村光子 大久保敦子 岡田さだ子 岡田次男 小野 豊
鏡原美和子 菊田眞代 坂 みよ 佐藤英夫 烏田初男 関野喜久代 高野敏江 田畠保子
土屋和馬 戸崎生子 戸崎由三郎 富島 繁 中野富美子 沼尻幸子 沼尻久子 沼尻文子
平井孝子 藤崎雅世 松浦澄子 松浦博子 丸岡公子 宮本 操 矢口なか 梁田淑子

整理参加者 (10日以上)

天谷瑛子 新井栄子 石浜敏子 石山春美 大久保由紀子 大坪美知子 大野美津子 川田亮子
小松崎廣子 富田シズエ 長嶺道子 浜田久美子 横田整子 松川さち子

目 次

序
例言
凡例
土浦市遺跡調査会組織
調査者名簿
目次

第1章 調査経過	1
第2章 環境	2
第3章 造構と遺物	
第1節 第1次調査区の造構と遺物	9～53
第2節 第2次調査区の造構と遺物	54～69
第3節 造構外出土遺物	69～81
第4章 結語	82
報告書抄録	83
参考文献	
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 調査区全体図	3	第29図 2号溝遺物出土状況	41
第2図 第1次調査区全体図	4	第30図 3号溝検出状況・出土遺物	42
第3図 第2次調査区全体図	5	第31図 4号溝検出状況・出土遺物	44
第4図 周辺の遺跡	7	第32図 5号溝検出状況・出土遺物	45
第5図 基本層序	8	第33図 6号溝検出状況・出土遺物	47
第6図 1号住居址検出状況	10	第34図 7号溝検出状況・出土遺物	48
第7図 1号住居址遺物出土状況	11	第35図 8号溝検出状況・出土遺物	49
第8図 1号住居址出土遺物①	12	第36図 1号据立柱建物址検出状況	51
第9図 1号住居址出土遺物②	14	第37図 9号溝検出状況	53
第10図 1号住居址出土遺物③	15	第38図 10号・11号土坑検出状況	55

第11図	2号住居址検出状況	16	第39図	12号・13号土坑検出状況	57
第12図	3号住居址検出状況	19	第40図	15号土坑出土遺物	58
第13図	3号住居址炉址検出状況	20	第41図	14号・15号土坑検出状況	59
第14図	3号住居址出土遺物	21	第42図	10号溝検出状況	60
第15図	4号住居址検出状況	22	第43図	10号溝遺物出土状況	61
第16図	1号・2号土坑検出状況	24	第44図	10号溝出土遺物	62
第17図	3号土坑検出状況	25	第45図	11号溝出土遺物	63
第18図	3号土坑出土遺物①	27	第46図	11号溝検出状況	64
第19図	3号土坑出土遺物②	28	第47図	13号溝検出状況	65
第20図	4号・5号土坑検出状況	29	第48図	2号墳検出状況	67
第21図	7号土坑出土遺物	30	第49図	2号墳出土遺物	69
第22図	6号・7号土坑検出状況	31	第50図	第1次調査造構外出土遺物①	71
第23図	8号・9号土坑検出状況	33	第51図	第1次調査造構外出土遺物②	72
第24図	1号溝検出状況	35	第52図	第1次調査造構外出土遺物③	73
第25図	1号溝遺物出土状況	37	第53図	第1次調査造構外出土遺物④	75
第26図	1号溝出土遺物	38	第54図	第2次調査造構外出土遺物①	78
第27図	2号溝出土遺物	39	第55図	第2次調査造構外出土遺物②	79
第28図	2号溝検出状況	40	第56図	第2次調査造構外出土遺物③	80

写 真 目 次

P L 1	空撮・調査風景	P L10	1号住居址出土遺物②
P L 2	1号・2号住居址	P L11	3号住居址出土遺物・石器
P L 3	3号・4号住居址	P L12	3号土坑出土遺物
P L 4	1号～5号土坑	P L13	土坑・溝・古墳出土遺物
P L 5	7号～9号土坑、1号掘立柱建物址	P L14	1・2・10号溝出土遺物
P L 6	1号～4号溝	P L15	第1次調査区出土遺物①
P L 7	10号～14号土坑	P L16	第1次調査区出土遺物②
P L 8	10・11・13号溝、2号墳	P L17	第2次調査区出土遺物
P L 9	1号住居址出土遺物①	P L18	造構外出土陶磁器

第1章 調査経過

平成2年3月、「土浦市総合運動公園基本計画報告書」が発表された。これにより土浦市のスポーツ施設の課題の解決と川口運動公園の機能更新を目的として、土浦市西端の常名地内に新しい運動公園を建設するビジョンが提示された。この建設予定地内には、昭和55～57年度の分布調査で見つかった弁才天遺跡・神明遺跡・北西原遺跡・山川古墳群の四つの周知の遺跡が含まれている。これらの分布と遺構密度を把握するために、平成3年3月に土浦市遺跡調査会によって確認調査が行われた。

この確認調査によって、常名地区の台地の90%以上にわたって埋蔵文化財が包摂される可能性が、極めて高いことが予想されたために、発掘調査区は台地全体を対象に設定されることとなった。

平成5年度から、常名地区の発掘調査は開始され、毎年継続した調査を行なっている。本年度の調査に至る経緯と発掘の経過を以下に記す。

平成9年4月18日 土浦市都市計画部新運動公園課から土浦市教育委員会文化課にあて、埋蔵文化財発掘調査についての依頼がある。

5月中旬 本年度の調査区について打合せを行い、字檜本地内を神明遺跡として調査することを協議する。また、もし遺構密度が薄い場合には調査区を拡大する可能性もあることを協議する。

6月4日 文化課が新運動公園課にあて、埋蔵文化財の発掘調査について回答を行い、土浦市遺跡調査会を調査機関として紹介する。また新運動公園課が、文化課に発掘調査承諾書を提出する。文化課が文化庁・県教育庁あてに、埋蔵文化財発掘調査報告書を提出する。

6月10日 発掘調査委託契約を締結する。

6月中旬 表土除去、現地作業員雇用の説明会を行う。

7月8日 発掘調査開始。約1週間で精査及び全体図作成。遺構の密度が薄いため、第2次調査区を設定し、本年度調査区を拡充することを新運動公園課と協議する。

7月15日 遺構の検出を開始する。(1・2号溝)

7月24日 1・2・3号住居址の検出に着手する。

8月9日 5・7・8号上坑の記録が終了(第1次調査区の遺構検出終了)。

8月19日 第2次調査区の精査開始。全体図作成とグリッド設定。遺構の検出に入る。

9月2日 13号溝、10～14号土坑を検出する。以後、確認調査を並行して行う。

9月6日 2号塙を検出・記録する。以後、空撮向けの精査を行う。

9月18日 セスナ機による航空撮影。調査終了。

9月19日 資材撤収。

発掘調査は、以下の方法で行った。まず、調査区内に4m間隔の方眼軸を設定し、縦軸を算用数字、横軸をアルファベットで表記する。この方眼軸が、遺構の位置を示す基準となり、国土座標上の調査区の範囲をも明示する。軸は、前年(平成8年度)の北西原遺跡第5次調査の延長線上にあり、呼称を準拠している。

そして、表土をバックホーによって約40cm除去した後に、人力でショレンによる表面精査を行った。

この際、所在が確認された遺構や表面採取された遺物は、グリット線上の位置により把握した。全面の精査と遺構の把握を済ませてから、各個別の遺構の検出に入った。遺構の掘り下げにあたっては、移植ゴテを用い、上の堆積状況を知るために1又は2方向の畦を残した。出土した重要遺物はその出土位置を記録するために、現位置に留めた。遺構の底面まで掘り下げるからは、畦を取り除き、遺物出土状況・検出状況を撮影・記録した。(橋場君男)

第2章 環境

土浦市は、県南地区のはば中央に位置する人口約13万人の市である。市の東側は霞ヶ浦を望み、市街地中央を桜川が西から東へ流れている。桜川低地(古鬼怒川起源の沖積地)の南北は、洪積台地の筑波・稲敷台地と新治台地に挟まれる。市の北側には大の川・南側には花室川が流れる。

神明遺跡は、桜川左岸の標高約26~28mの新治台地上に位置する。遺跡の周辺は、桜川低地からT字状にのびる谷に東と北を囲まれる。遺跡の範囲は、縁辺部を中心に台地のはば中央に至る。

新治台地の地層は、下総層群を基盤としている。層序は、下層から載層、上泉層、上岩橋層、木下層、常総層、新期火山灰層(いわゆる関東ローム層)と続く。いずれも第IV期更新世(洪積世)の堆積層である。このうち、常総層は上下二層に分層され、下層は砂・砂礫を、上層は粘土・シルトを主な堆積物とする層である。また、台地斜面の露頭には木下層が確認されることがある。木下層は、砂及び泥混じりの砂から構成される堆積層である。谷戸部分の地質は、後背湿地性堆積物が主体を占める。新期火山灰層(いわゆる関東ローム層)は、富士・箱根起源の火山灰が風化したものである。(通商産業省工業技術院地質調査所 1988)今回の調査では、ローム層中の堆積状況を探るために深さ約2~3mの縦型トレッソを掘り、断面観察を行なった。層位の観察所見を第5図に記す。

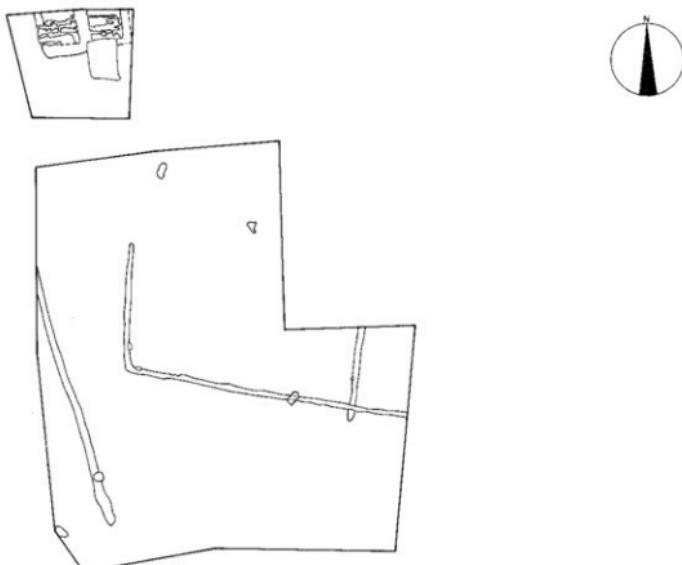
遺跡のある常名地区は、古地名麓をはしる東西道沿いに旧家が密集する。新興の宅地は台地上に多い。第1次調査区南辺の道は、道標によるといわゆる筑波道(藤沢街道)である。

昭和55(1980)年度から同57(1982)年度に行われた分布調査によると、神明遺跡は绳文時代中期(加曾利E式期)と古墳時代前期にかけての遺跡である。古墳時代前期の遺物には、東海地方系の特徴をもつS字状口縁の壺の破片が表採されている。(茂木 1984)

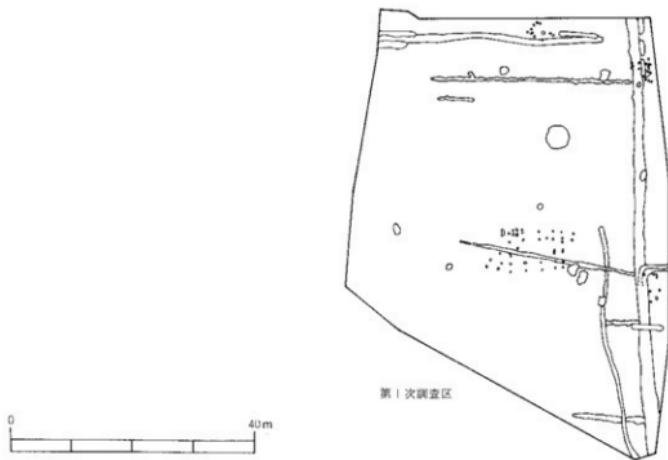
常名地区的指定文化財は3件ある。市指定史跡常名天神山古墳、市指定文化財石造五輪塔、同石造宝篋印塔である。このうち常名天神山古墳は、4世紀末から5世紀前半にかけての前方後円墳で、台地上の山川古墳群との関連性が指摘されている。石造五輪塔は花崗岩製で、総高約205cmである。金山寺境内に所在し、室町時代中期のものと推定されている。石造宝篋印塔は花崗岩製で、総高約137cmである。天神山古墳墳頂に在り、安土桃山時代頃の作と推定される。(土浦市文化財保護審議会 1978)

付近の発掘調査例は、平成元(1989)年に土浦市遺跡調査会(担当黒澤春彦・中澤達也)によって、常名地区的八幡下遺跡が調査された。台地斜面にある古墳時代後期の堅穴住居址8軒と土坑1基、奈良・平安時代の堅穴住居址8軒と土坑2基が調査された。(黒澤 1991)

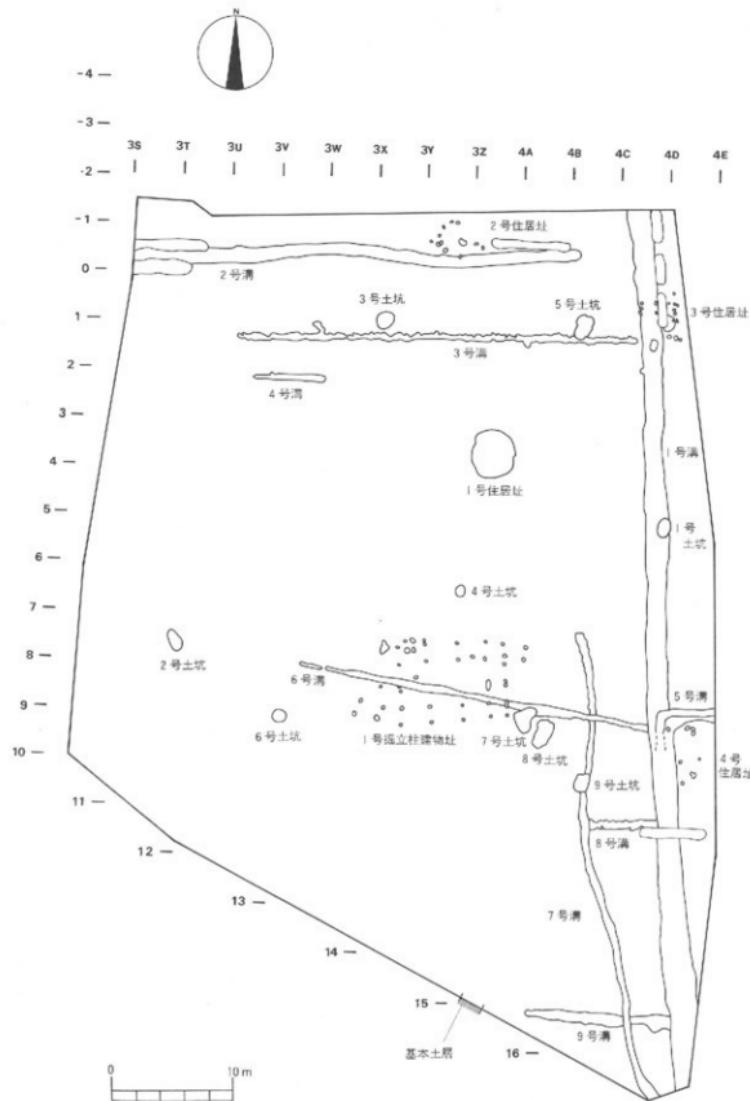
神明遺跡以外の周辺の遺跡を、第4図に示す。(橋場君男)



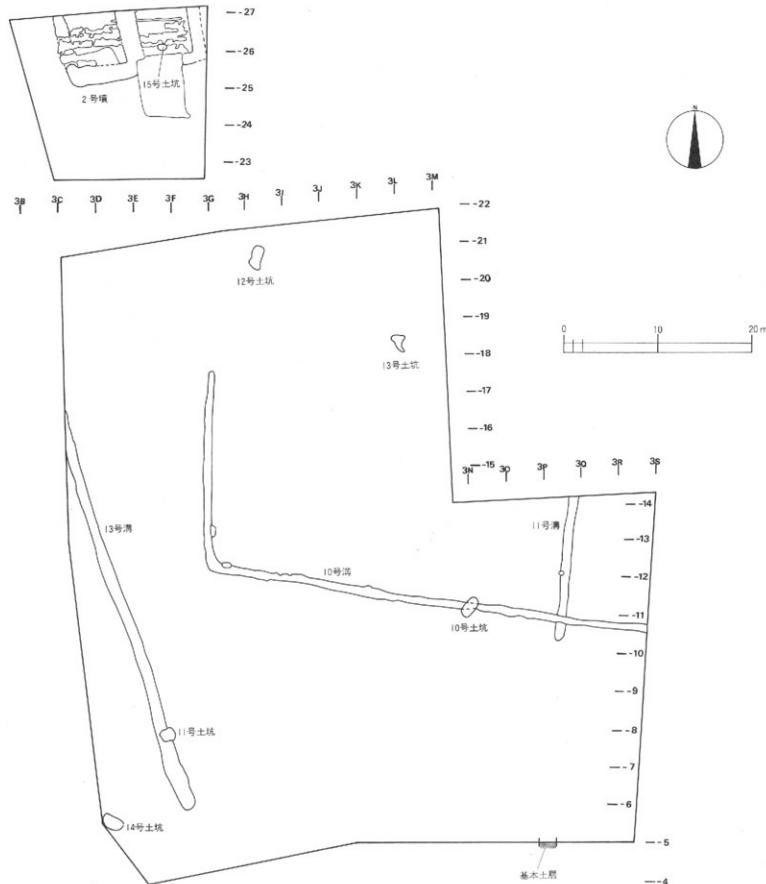
第2次調査区



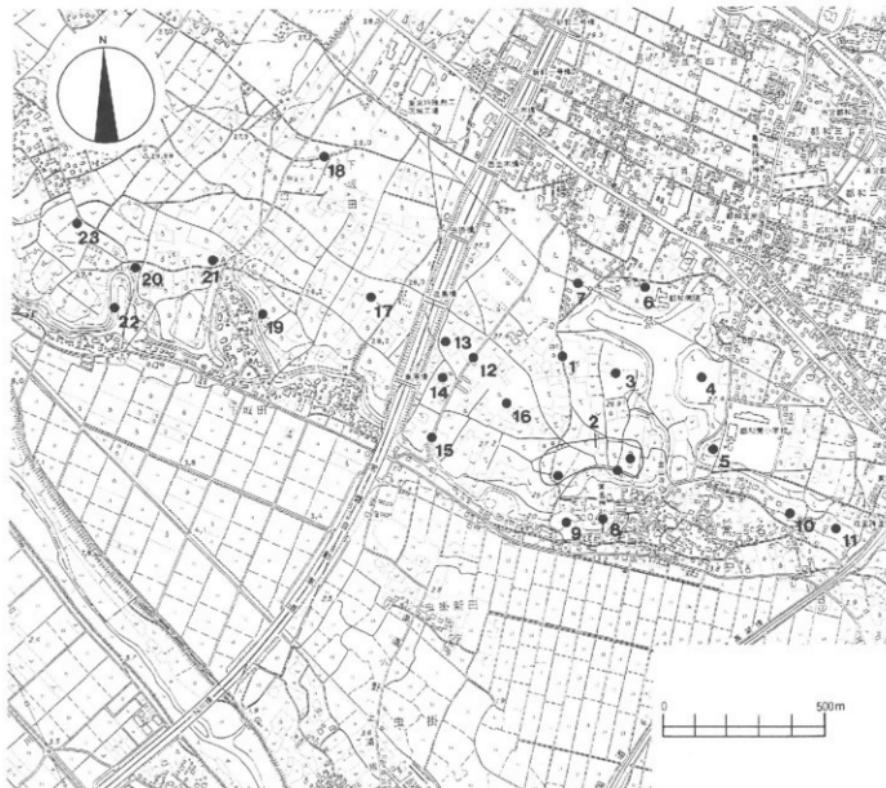
第1図 調査区全体図



第2図 第1次調査区全体図



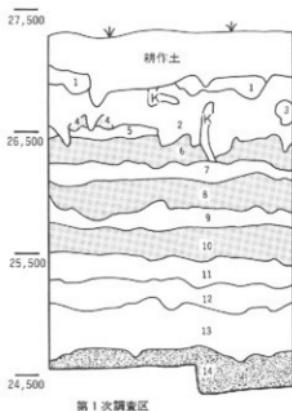
第3図 第2次調査区全体図



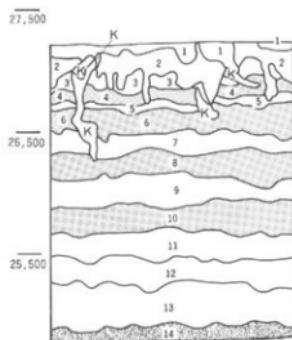
第4図 周辺の遺跡

周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	北西原遺跡	縄文中、古墳前	13	中畠遺跡	縄文前
2	山川古墳群	古墳、奈良・平安	14	小坂の上遺跡	縄文中
3	神明遺跡	縄文中、古墳前	15	坂の上遺跡	縄文前
4	弁才天遺跡	古墳、奈良・平安	16	羽黒後遺跡	縄文前
5	天神橋遺跡	縄文、古墳、平安	17	下坂田鹿島前貝塚	縄文
6	西谷津遺跡	古墳前・後	18	坂田鶴巣山古墳群	古墳
7	西谷津西遺跡	縄文前、古墳前	19	下坂田香取神社前道路	縄文、弥生、古墳
8	常名天神山古墳	古墳	20	下坂田沿シ山遺跡	弥生、古墳、平安
9	瓢箪塚(飛鳥塚)古墳跡(消滅)	古墳	21	下坂田貝塚	縄文、弥生
10	八幡坂下遺跡	古墳	22	坂田古墳群	古墳
11	八幡下遺跡	古墳、奈良・平安	23	武者塚古墳	古墳
12	アラク遺跡	縄文前			



第1次調査区



第2次調査区

神明遺跡 基本層序

- 1 暗色 7.5YR4/4 褐色土とコーム粒子が斑状に混在する。
〔ローム層移層〕
- 2 暗色 7.5YR4/6 1層との層理面付近に白色粒子（径～0.2mm）が多く認められ、鉛鉄鉱時に砂質感が強い。UGの可能性が高い。〔欽賀ローム層〕
- 3 明褐色 7.5YR5/6 赤色スコリア（径～0.2mm）が多く、青色スコリア（径～0.2mm）・黒色粒子（径～0.2mm）を僅かに含む。〔硬質ローム層〕
- 4 暗色 7.5YR4/6 黒色粒子（径～0.2mm）・白色粒子（径～0.2mm）・炭化物粒子（径～0.3mm）を僅かに含む。立川ローム第1黒色帯に相当するとと思われる。炭化粒少。〔硬質ローム層〕
- 5 明褐色 7.5YR5/8 青色スコリア（径～0.2mm）・赤色スコリア（径～0.2mm）・白色粒子（径～0.3mm）を含む。始良丹波バミ＝AT崩壊相当層と思われる。炭化粒強。〔硬質ローム層〕
- 6 暗色 7.5YR4/4 青色スコリア（径～0.2mm）・黑色粒子（径～0.2mm）を多く含む。立川ローム第2黒色帯に相当するとと思われる。〔欽賀ローム層〕
- 7 暗色 7.5YR4/6 塗色スコリア（径～0.3mm）を多く、黒色粒子（径～0.2mm）・白色粒子（径～0.3mm）を僅かに含む。8層との層理面が立川ローム層と武蔵野ローム層の境界と思われる。炭化粒少。〔欽賀ローム層〕
- 8 暗色 7.5YR4/4 青色スコリア（径～0.2mm）を多く、白色粒子（径～0.3mm）を僅かに含む。武蔵野ローム層の第1黒色帯と思われる。〔硬質ローム層〕
- 9 暗色 7.5YR4/6 青色スコリア（径～0.5mm）を多く、赤色スコリア（径～0.2mm）を僅かに含む。8層より硬質で、B C V Aに相当するとと思われる。〔硬質ローム層〕
- 10 暗色 7.5YR4/4 青色スコリア（径～0.2mm）・赤色スコリア（径～0.2mm）が9層より少ない。白色粒子（径～0.3mm）・赤色スコリア（径～0.3mm）が多く、欽賀ロームではあるが2層よりは欽賀で、武蔵野ローム第2黒色帯と思われる。HK-T P層次層準と思われる。〔欽賀ローム層〕
- 11 暗色 7.5YR4/4 白色粒子（径～0.2mm）を僅かに、青色スコリア（径～0.2mm）を多く含む。〔硬質ローム層〕
- 12 暗色 7.5YR4/4 青色スコリア（径～0.2mm）を多量に含む。11層より軟質。〔硬質ローム層〕
- 13 明褐色 7.5YR5/8 白色粒子（径～0.5mm）を多く、青色スコリア・赤色スコリア・黒色粒子を僅かに含む。9層よりも硬質、砂質感が強い。〔硬質ローム層〕
- 14 明黃褐色 10YR7/6 黒色粒子（径～0.3mm）・赤褐色粒子（径～0.3mm）が多く含まれる。〔常緑粘土層〕

第5図 基本層序

第3章 遺構と遺物

第1節 第1次調査区の遺構と遺物

第1次調査区内では、竪穴住居址が4軒、土坑が9基、溝が9条、掘立柱住居址が1棟発見された。以下、遺構ごとに所見を加える。

1号住居址 【第6～10図】

位置 調査区中央 3Z-3区を中心とする。

長軸方向 N-34°-W

規模と形状 長軸4.0m、短径3.5mの楕円形を呈する。

壁面 壁高は、10～34cmで、外傾気味に立ち上がる。

床面 平坦かつ明瞭に確認でき、いわゆる貼り床を呈する。

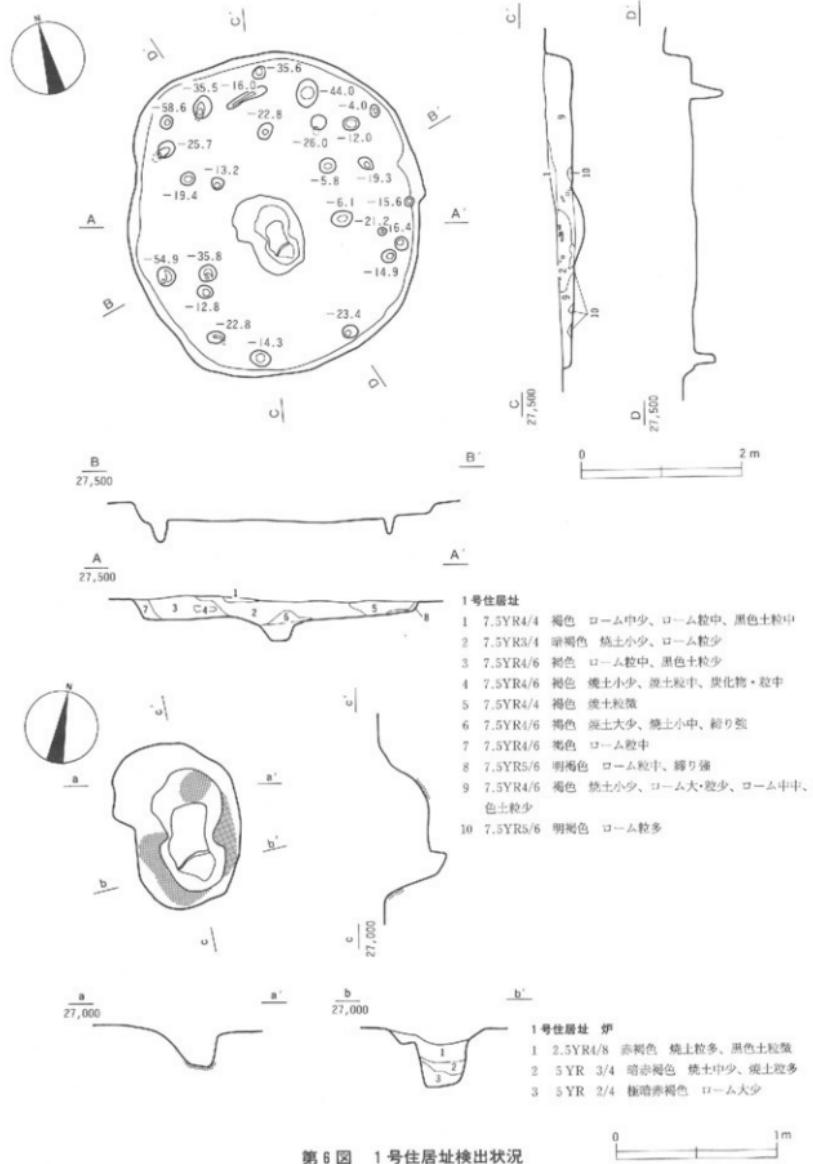
炉 中央よりやや南側に付設される。規模・形状は、長径103cm、短径64cmの不整楕円形で、約37cm掘り込んで構築した地床炉である。炉の上面は3ヶ所被熱して赤色硬化する。底面は焼けておらず、土器・礫などは残されていなかった。

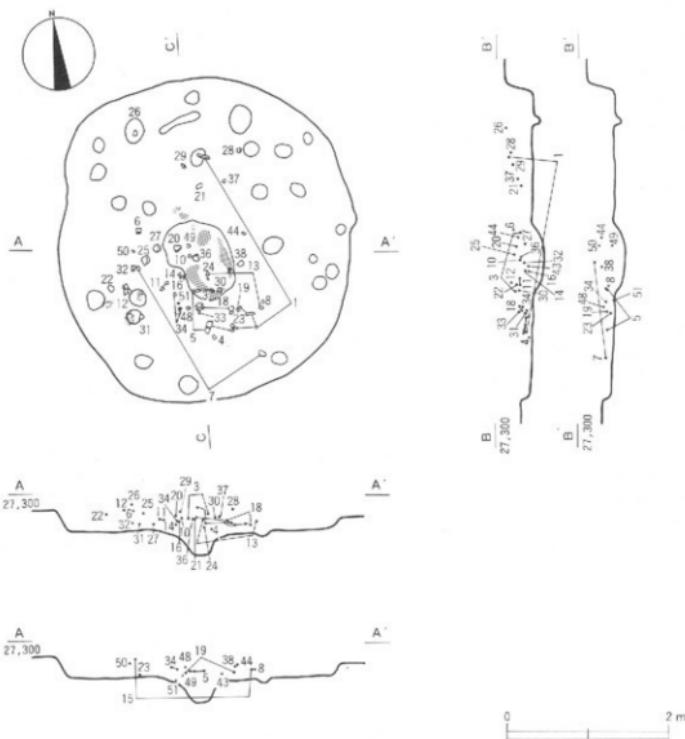
ピット 約25ヶ所検出され、周回する傾向が強いことから、かなりのピットが柱穴と考えられる。形状は直径9～32cm、深さ7～59cmで円形・楕円形を呈している。

覆土 烧土・遺物の多寡から考えて、西側から始めに埋まり、次いで遺物・焼土を含んだ上で埋められたものと解される。

遺物出土状況 住居址中央を中心に、遺物がまとまって出土した。床面直上ではなく浮いた状態であるため、廐棄遺物であろう。

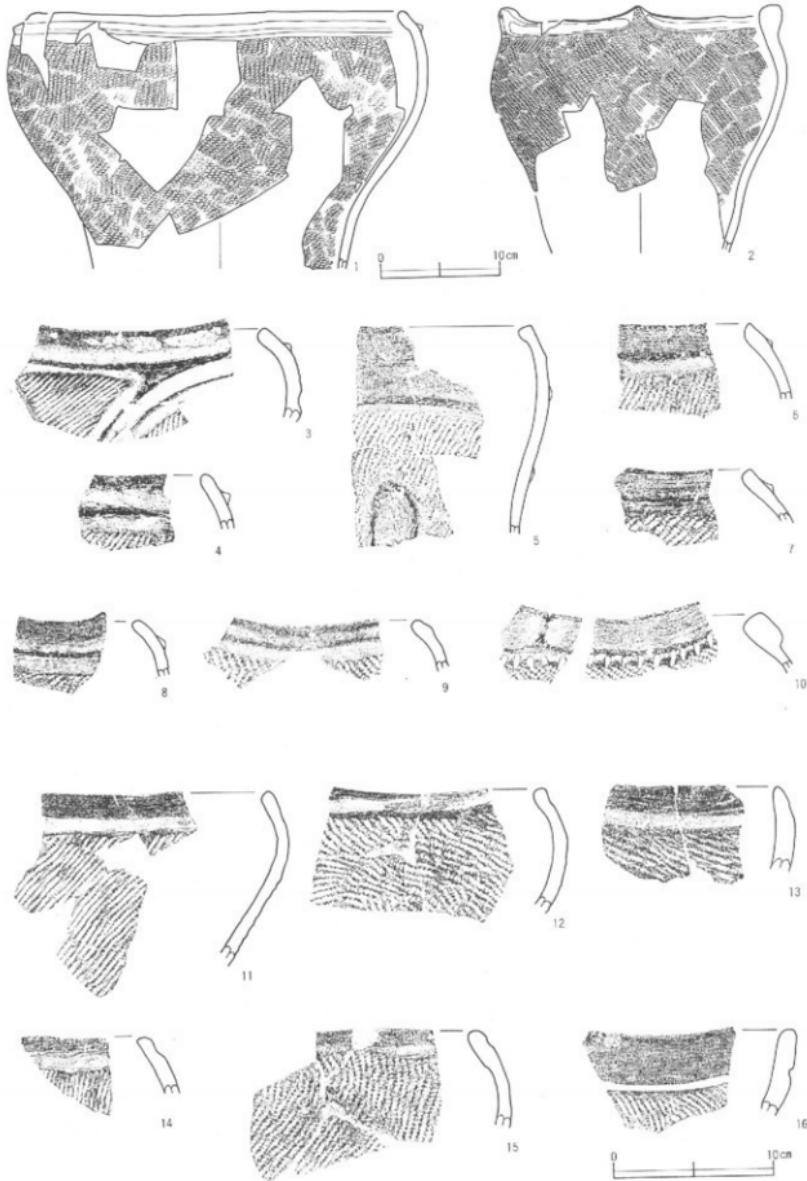
遺物 覆土中から出土している。土器は全て深鉢であった。1は推定径30.8cm、口縁部は内側に口縁下に最大径を有する。口縁に沿い両側がなでられる微隆起線文が1条巡り、下半は単節RLが施文される。2は径23.5cmの波状縁で4単位の把手を有する。把手部で一度くびれ、この直下が最大径となる。把手下は舌状突起となり、把手間は口縁を凹ませ微隆起線文により囲まれる無文の楕円形区画となる。舌状突起部と区画下は0段多条LR施文。外面に炭化物が付着していた。3は微隆起線文による区画文で無文帯は口縁部に見られる。区画内は0段多条LRが施文されていた。4は両側がなでられる微隆起線文が1条巡り、下半は単節Rしが施文されている。外面に炭化物が付着し、二次焼成による赤変が認められた。5は両側がなでられる微隆起線文が1条巡り、口縁部に幅の広い無文帯を作出している。下半は曲線的な微隆起線文で区画内は無文、他は単節RLが施文されている。6～8は波状縁で口縁に沿い微隆起線文が1条巡る。6・8は単節RL、7は0段多条RLしが施文されていた。9は平縁で口縁に沿い貼付ではなく、なでにより作成した微隆起線文が1条巡り、下半は0段多条RLである。10は波状縁で口縁に沿い微隆起線文が1条巡る。口縁部無文帯には幅の狭い舌状突起を付している。下半は単節LR施文後、微隆起線文沿いに半截竹管状工具による下方からの楕円形剥突を加えている。外面には炭化物が付着していた。11～15は平縁で口縁下に幅が広く浅い沈線が1条巡る。下半は11・12・15が0段多条RL、13は無節LR、14は無節RLであった。13は外面に炭化物が付着し、15は内面の一部が沈線状に凹んでいた。16は波状縁で口縁に沿い沈線が1条巡り、下端に





第7図 1号住居址遺物出土状況

曲線的な沈線文が見られた。0段多条RL。17~24は胴部片である。17は数条の沈線文が垂下し、沈線間は単節RLと無文帶が交互に施文されている。断面に炭化物が付着していた。18は微隆起線文による区画文で、区画内は全て0段多条LRで充填される。幅の広い隆起上に円形の盲孔が1孔穿たれていた。19・20は微隆起線文による曲線文で、区画内は共に単節RL。19は玉抱き文となろう。どちらも外面に炭化物が付着していた。21は曲線的な沈線文で区画内は0段多条RL、無文部は良好に磨かれていた。16と同一個体と思われる。22は3条1単位の条線文が垂下し、下半は無文となる。上半は単節RLが施文される。23は単節RLを地文とし、後に半截竹管状工具を条線状に連ねて垂下させている。24は0段多条RL。17・18が加曾利E III式となる他は加曾利E IV式に相当しよう。25~37は底部である。25は推定径7.4cmで上半に単節RLが施文され、底面と底部直上は良好に磨かれる。26は推定径7.6cmで上半単節LR、下半と底面は良好に磨かれる。断面に炭化物が付着していた。27は径5.2cm、底面下半繩文か。判然とせず。底面やや凸レンズ状を呈し、磨かれていた。28~37は無文である。28は推定径6.2cm、外面縦磨きされ輪積痕が良好に観察された。底面に炭化物が付着している。29は推定径6.6cm、外面は縱磨き、内面横磨きされる。30は推定径6.6cm、31は推定径5.8cmでともに底面



第8図 1号住居址出土遺物①

磨き良好、底部直上は横磨きされる。32は径6.2cm、底面・内面磨き良好。33は推定径4.6cm、底面と底部直上が磨かれ、割れ口に炭化物が付着していた。34は推定径5.6cm、やや上げ底状を呈し、底面・内外面ともに磨かれる。35は推定径4.8cm、底面は良好に磨かれていた。36は径5.8cm、37は推定径6.2cmで、ともに底面凸レンズ状を呈する。36は外縁横磨きされ、底面に炭化物が付着していた。37は断面に炭化物が見られた。38~47は上製品で全て土鍤である。完形品が多く、口縁部片を利用するものもあった(44)。42は本来左右対称となる形をしていたものが、欠損後も使用され不整形になったと思われる。

48~50は石器、51は石製品である。48・49は磨石類、48は両面の大半が研磨面で、部分的に集中的な敲打により凹みが生じている。49は全体が滑らかな研磨面で覆われている。折損面は一方向からの加熱によりネガティップバルブが生じ、この中央付近は節理面の影響を受け段差となっている。全体は被熱により赤化し、一部火バネによる剥落が認められる。50は縦長の石匙である。両面に残る素材剥離面（トーン部分）から見ると、幅6cm以上の横長剥片を素材としていることが観察される。両面に押圧剝離による調整加工を施している。両側縁の一部に抉り加工を施している。図示していないが他に6点の閃綠岩製剥片が出土している。うち2点は打点からの縱割れを生じたものが接合した。51は重飾品である。一端に両側からの穿孔を施しているが、端部を折損している。全体を滑らかに研磨している。

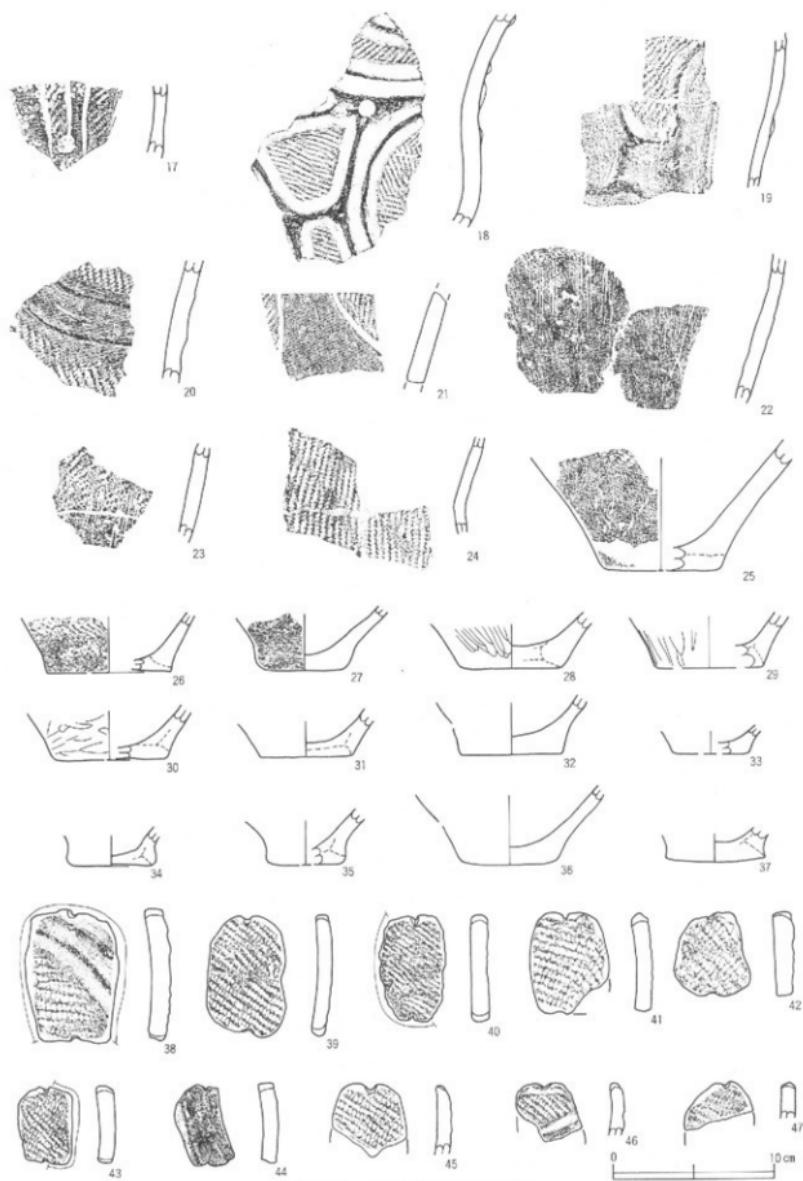
1号住居址出土土製品観察表

No.	名称	残存	大きさ(cm)	重量(g)	整形	文様・その他	時期
38	土鍤	完形	8.2×5.8	82.6	一部磨り	微隆起線文、0段多条RL、切り目1対、方形	加曾利E IV式
39	土鍤	完形	7.4×4.9	42.0	全周磨り	0段多条RL、切り目1対	不明
40	土鍤	完形	6.5×4.1	36.3	一部磨り	無筋RL、切り目1対、外面炭化物	不明
41	土鍤	一部欠	6.2×4.9	(35.0)	全周磨り	0段多条RL、切り目1ヶ	不明
42	土鍤	完形	5.1×4.6	38.0	全周磨り	0段多条RL、切り目1対	不明
43	土鍤	完形	4.8×3.4	23.9	一部磨り	单縫RL、切り目1対、方形	不明
44	土鍤	完形	5.0×3.0	20.5	全周磨り	口縫部、隆起線文、切り目1対、外面炭化物	加曾利E IV式
45	土鍤	2/3	(4.5)×(4.6)	(19.8)	全周磨り	丁寧な磨り、0段多条RL、切り目1ヶ	不明
46	土鍤	2/3	(3.5)×(4.1)	(14.0)	全周磨り	丁寧な磨り、0段多条RL、浅線文、切り目1ヶ	加曾利E IV式
47	土鍤	1/3	(2.9)×(4.2)	(10.7)	全周磨り	丁寧な磨り、单縫RL、切り目1ヶ	不明

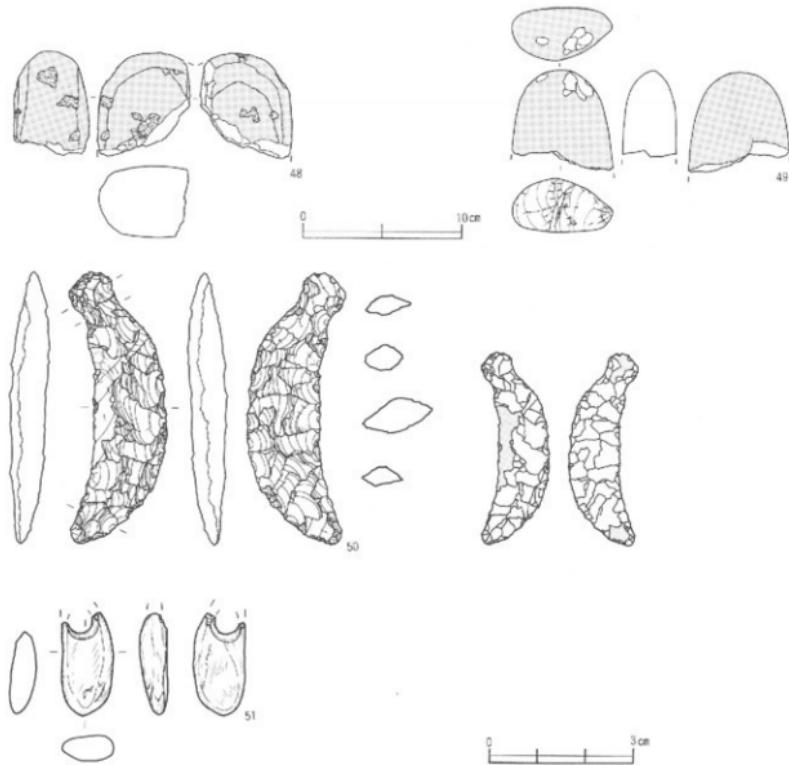
1号住居址出土石器・石製品観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
48	磨石類	(6.44)	(5.66)	(4.52)	(213.0)	輝石安山岩	削錐部全体に敲打痕、内面にも集中的な敲打による凹みあり。
49	磨石類	(5.9)	(6.13)	(3.23)	(154.0)	輝石安山岩	全面を使用、端部に剥落痕。
50	石匙	5.56	1.54	0.72	6.3	閃綠石	「ノ」の字状、つまみ紐の厚さ0.5cm。漆黒の閃綠石。
51	重飾	(2.09)	(1.09)	0.54	(1.8)	蛇紋岩	両側から穿孔。孔部で折損。

所見 本址は、縄文時代中期後半の堅穴住居址である。住居廃絶後、余り時間をおかずにくほんだ状態であったところへ焼土や土器を廃棄したものと考えられる。



第9図 1号住居址出土遺物②



第10図 1号住居址出土遺物③

2号住居址 [第11図]

位置 調査区北端中央 3Y-(-1)・(-2)、3Z-(-1)区

長軸方向 不明

重複関係 2号溝と切り合うが、溝中の出土遺物と比較すると本址の方が古い。

規模と形状 掘り込みが浅いため、ピットとかののみの検出である。

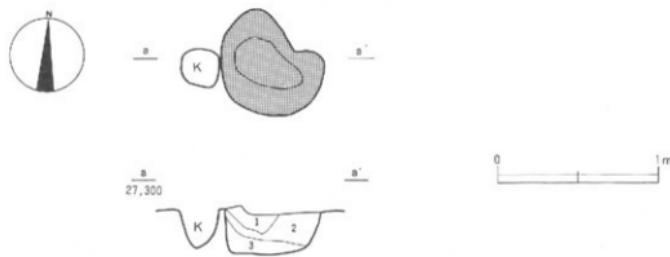
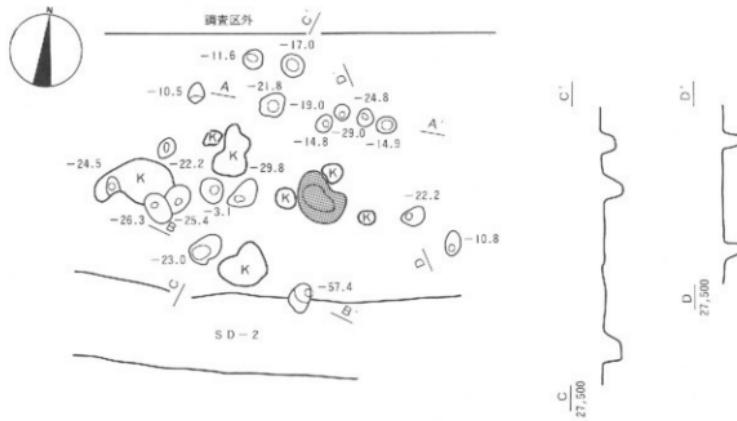
壁面・床面 確認されなかった。

炉 中央北寄りに検出され、平面形は長径64cm、短径50cmの楕円形を呈し、床面を約26cm掘り深めた地床炉である。炉床は焼けていないが、焼土を含むことから判断した。

ピット 作物痕もあるが、かげ址を周回する傾向が見られることから柱穴を多数含むと思われる。

遺物 固化していないが、閃緑岩製の台石が1点出土している。風化が著しい。また、縄文土器小片も炉址覆土中から出土した。

所見 本址は、掘り込みが浅い縄文時代の竪穴住居址と考えられる。床面・壁は確認されなかったが、炉と柱穴は検出された。



- 2号住居址 炉
- 1 5YR4/8 赤褐色 焙土中・小中・燒土較多
 - 2 5YR3/4 暗赤褐色 焙土小・粒少、ローム小少、繰り強
 - 3 5YR3/3 暗赤褐色 焙土大・中少、ローム少、粘性強、繰り強

第11図 2号住居址検出状況

3号住居址〔第12~14図〕

位置 調査区北東 4C-0区を中心に確認できる。

長軸方向 不明

重複関係 1号溝と本址では、出土遺物から判断して本址の方が古い。

規模と形状 掘り込みが浅かったため、ピットと炉のみ検出した。

壁面・床面 確認されなかった。

炉 長径138cm、短径44cmの楕円形で、床面を約36cm程掘り込んで構築された地床炉である。炉床面には、被熱して赤色硬化した焼土層が堆積する。

ピット 直径92~14cm、深さ31~11cmで、形状は円形・楕円形を呈する。1号溝内のものは、溝に伴う落ち込みかもしれない。それ以外のピットは、本址に伴う可能性は否定できない。

覆土 5~7層の焼土は、炉として機能していた時の堆積層と考えられる。その上の3・4層は機能喪失以降の堆積土で、8~10cm程の厚さをもつ。礫を多量に含む2層と最下層の間には、ある程度の時間差を想定できるかもしれない。

遺物出土状況 炉址の覆土中~上層(2層)にかけて、多量の礫と土器が出土した。礫は、集め得た分で1409点あり、21,538kgを計る(別表参照)。最も多い種類は流紋岩(48.6%)で、砂岩(20.8%)・チャートがそれに次ぐ。礫は被熱赤化したものと赤化していないもの二者がある。層位の確認のためには帶状に残したが、本来は炉址全体を覆うように分布していた。

遺物 ピット間内側の覆土中位より出土している。16・17を除き全て深鉢である。1は推定径24.4cmで口縁部は内側に凹み、口縁下に最大径を有する。口縁部は沈線が1条巡り、下半は0段多条RLを地文とする。口縁部沈線よりほぼ等間隔で沈線文が垂下し、沈線間に磨消は見られない。胎土に雲母を多量に混入するが、風化せず黒色を残していた。2~4は波状縁で口縁に沿い2は隆帯文、3・4は微降起線文が巡っている。2・3は両側がなでられており4は沈線状に凹んでいる。2・4は下半0段多条RL、3は単節RLで、2は内外面に炭化物が付着していた。5は波状縁、6は平縁でともにも口縁に沿った沈線が1条巡る。5は0段多条RL、6は無節RLである。7は平縁で口唇部下より0段多条RLが施文される。8はゆるやかな波状縁で口縁に沿い稜部までを無文帯とし、下半に襷文を施文している。呉節か。9~17は胴部片である。9は沈線文が数条垂下し単節RLと無文帯を交互に施文している。10は両側がなでられる幅広の隆帯文が1条巡り、この上下方は0段多条RLが施文されていた。11・12は両側がなでられる微降起線文で、11は曲線文、単節RLが施文され断面に炭化物が付着していた。12は0段多条RL。13は曲線的な沈線文で単節RL施文。14・15は垂下沈線文で単節RL施文、磨消が見られる。16・17は最もしくは鉢形土器。16は上端に沈線が1条巡り、下半は垂下沈線文。17は微降起線文による曲線文。1・9・10が加曾利E III式となる他は加曾利E IV式に相当しよう。18・19は無文底部である。18は推定径6.0cm。19は径5.6cmで底面はやや凸レンズ状を呈している。外面は縦磨き、底面も磨かれていた。20~24は土製品である。20~22は土鍾で22は横長を呈している。23・24は土製円盤で24は楕円形を呈していた。

25は磨石類で礫集中域より出土した。全面を研磨に使用、裏面に面取り状の使用痕が生じている。被熱による赤化が認められた。図示はしなかったが他に流紋岩製の剝片が2点出土している。

3号住居址出土土製品観察表

No.	名称	残存	大きさ(cm)	重量(g)	整形	文様・その他	時期
20	土鍤	完形	6.7×5.0	21.5	一部磨り	2条の曲線的隆起線、切り目1対、方形	加賀利EIV式
21	土鍤	2/3	(4.1)×(3.6)	(15.9)	全周磨り	単鋸RL、切り目1ヶ	不明
22	土鍤	完形	5.1×5.8	40.0	- 部磨り	曲線的隆起線2対、0段多角RL、切り目1ヶ、横長	加賀利EIV式
23	土製円盤	完形	5.2×4.9	34.3	全周磨り	単鋸LR	不明
24	土製円盤	一部欠	(4.1)×3.7	(15.9)	一部磨り	0段多角RL、稍円形	不明

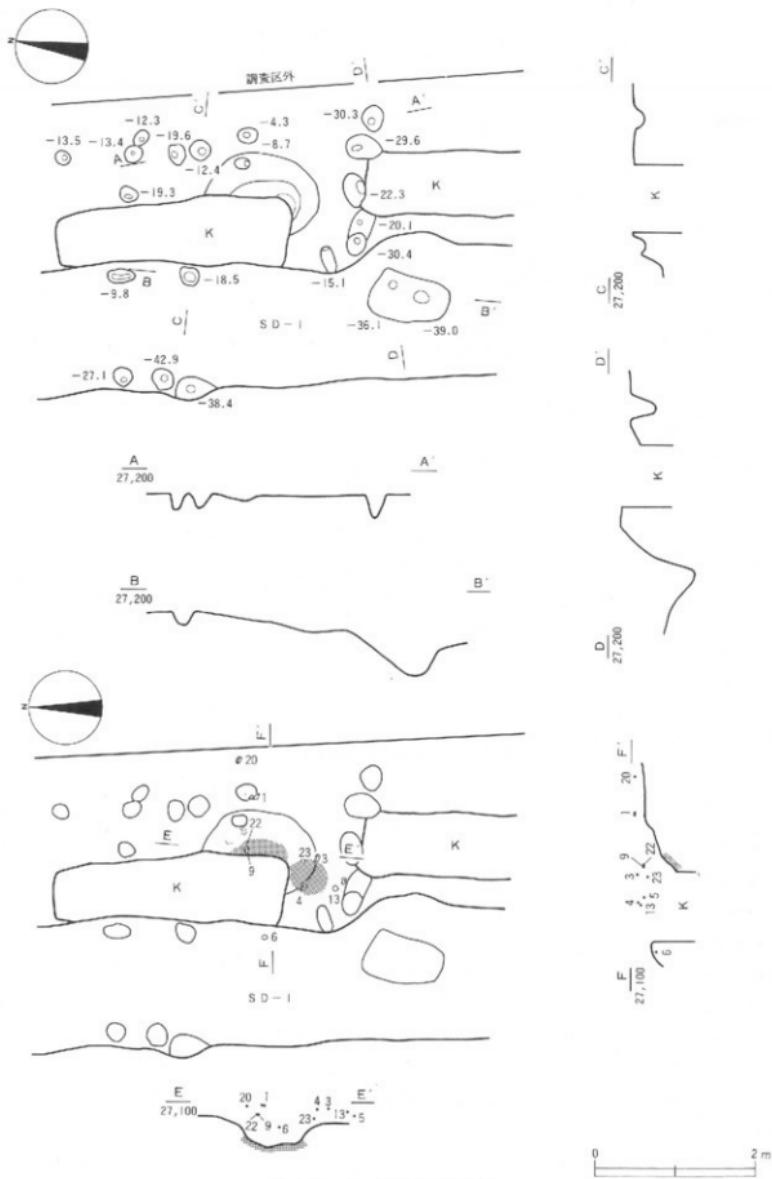
3号住居址出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
25	磨石類	5.68	4.68	2.78	87.0	角閃石安山岩	全面研磨。被熱によりやや赤化。表面使用により面取り状。

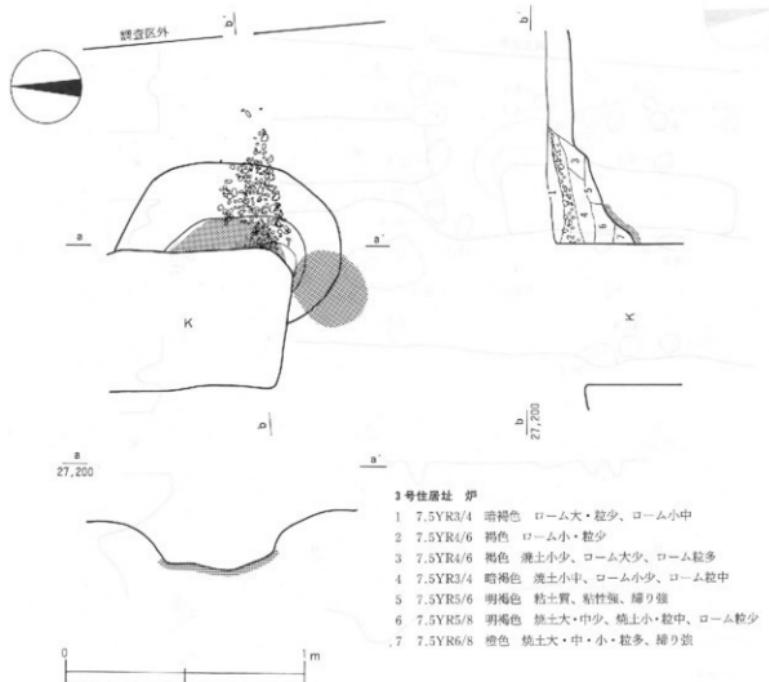
所見 本址は、縄文時代中期後半の造構で、炉とピットが見られることから掘り込みの浅い竪穴住居址と解した。炉上の礫群は、住居址の廃絶に伴い、炉に対しても何らかの処理行為が行われたものと解釈される。

3号住居址炉 出土砾石材構成表(合計 1409点 21.538kg)

点数	砂岩	頁岩		チャート		ホルンフェルス		安山岩		流紋岩		石英		閃緑岩	
		点数	重量(kg)	点数	重量(kg)	点数	重量(kg)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(kg)	点数	重量(kg)
293	4750	22	152	267	4316	2	52	135	2986	685	9123	4	156	1	3



第12図 3号住居址検出状況



第13図 3号住居址炉検出状況

4号住居址 [第15図]

位置 調査区域中央部東端 4D-9・10区を中心に確認できる。

長軸方向 不明

重複関係 本址は、1号溝に掘り込まれていたので、本址の方が古い。

規模と形状 掘り込みが浅かったため、柱穴、炉のみ検出した。

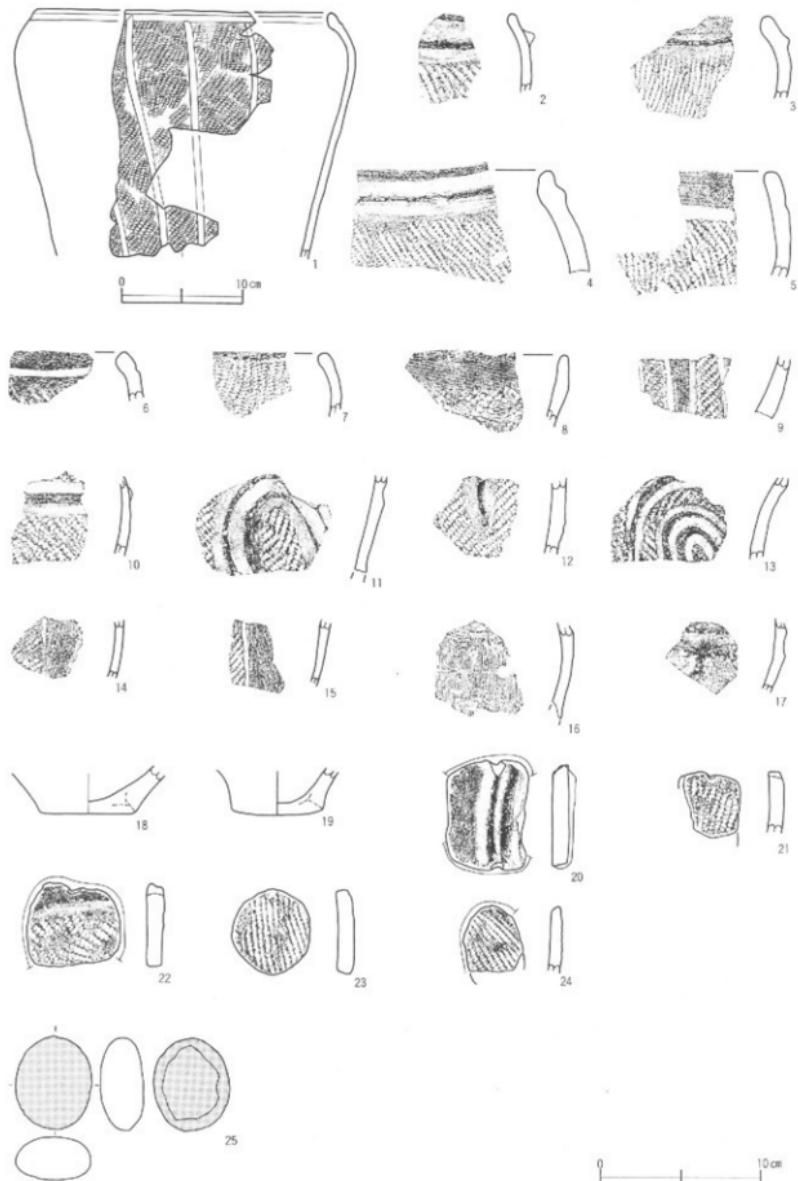
壁面・床面 確認されなかった。

炉 長径32cm、短径26cmの楕円形で、床面を36cm掘り込んで構築された地床炉である。焼土を含むことから炉址と判断した。

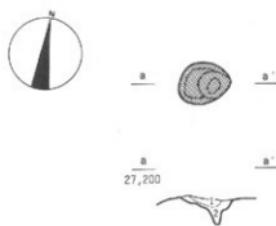
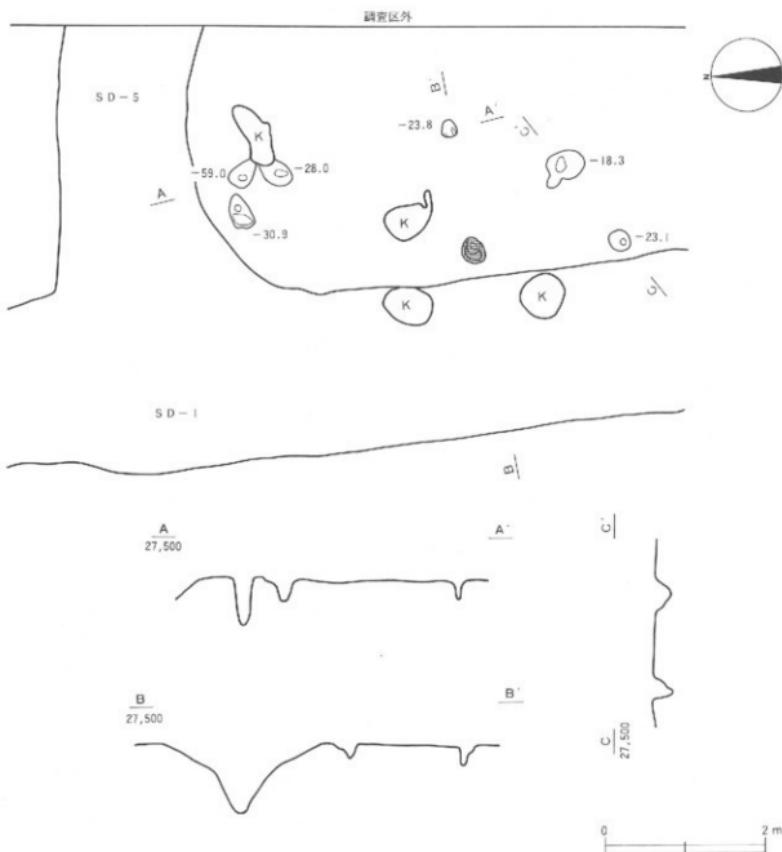
ピット 直径56~22cm、深さ63~15cmの円形、楕円形、不整楕円形を呈し、柱穴の可能性がある。

遺物 発見されなかった。

所見 本址は、炉とピットの存在から掘り込みが浅い竪穴住居址と判断した。正確な時期は不明であるが、2・3号住居址と傾向を同じくすることから縄文時代の可能性がある。



第14図 3号住居址出土遺物



4号住居址 炉

1 2.5YR4/6 赤褐色 漆土大多、ローム中中、ローム粒少
2 7.5YR5/6 明褐色 漆土较少、炭化物少

第15図 4号住居址検出状況

1号土坑　【第16図】

位置 調査区東側で、1号溝の東壁沿いに確認できる。4D-5区

長軸方向 N-23°-E

重複関係 確認面の状態では重複関係は見られなかつたが、土層断面から1号溝を本跡が掘り込んでいると判断されるため、本跡の方が新しい。

規模と形状 長径166cm、短径106cm、深さ6~54cmの楕円形である。

壁面 東側においてはほぼ垂直に立ち上がるが、西壁は1号溝と切り合い関係にあり、僅かに立ち上がるだけである。

底面 楕円形を呈し、平坦である。

遺物 小型の馬が土坑の底面に、横位に埋葬されていた。肋骨は見られなかつたが、全身に近い部位の骨が発見された。副葬品はない。

所見 本跡は馬の埋葬土壙墓である。骨の遺存状況が良好であったため、時期的には遡及し得ても100~200年前程度であろう。

2号土坑　【第16図】

位置 調査区西側 3S・3T-7区

長軸方向 N-28°-E

規模と形状 長径1.8m、短径1.0mの長方形を呈し、深さ47~56cmである。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 ほぼ長方形を呈し、平坦である。

覆土 下層はローム含度が高く、人為的埋土の可能性がある。上層で焼土粒が散見されるが本跡に伴うものではない。

遺物 出土していない。

所見 本跡の正確な時代や、具体的な機能については不明である。

3号土坑　【第17~19図】

位置 調査区北側中央 3X-0・1区を中心とする。

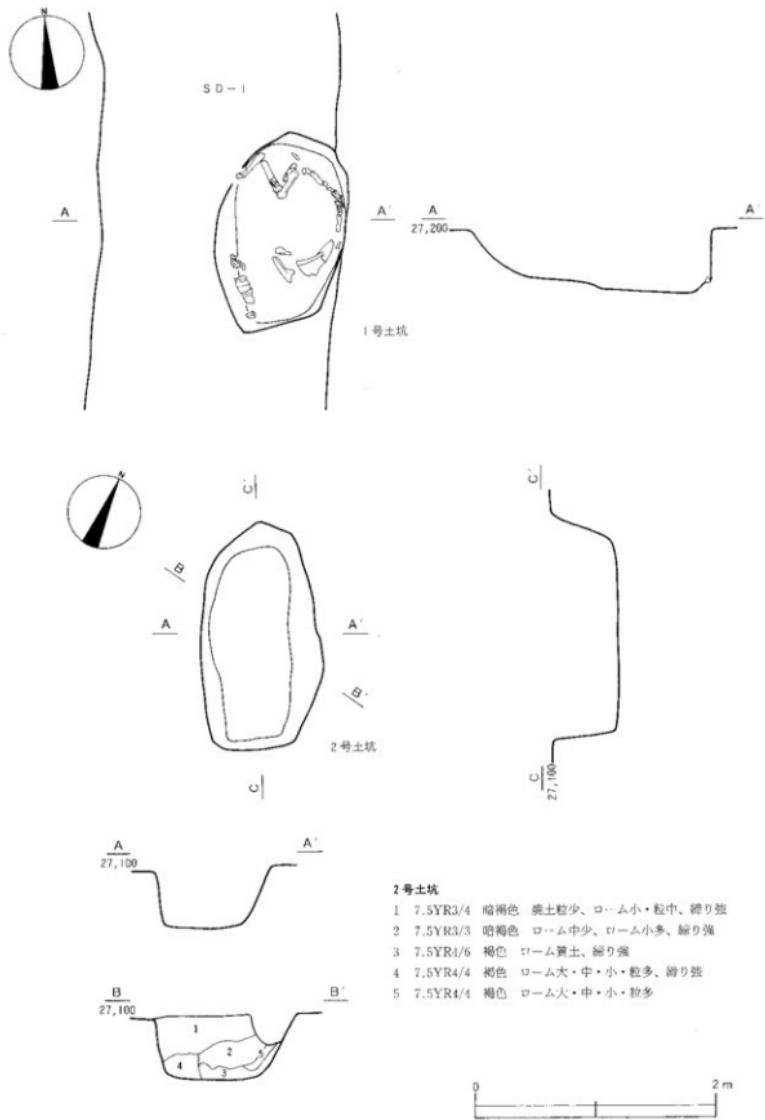
規模と形状 平面形は径1.4mの円形を呈し、深さ120~129cmの円筒形の土坑である。

壁面 やや斜位に向いて直立する。

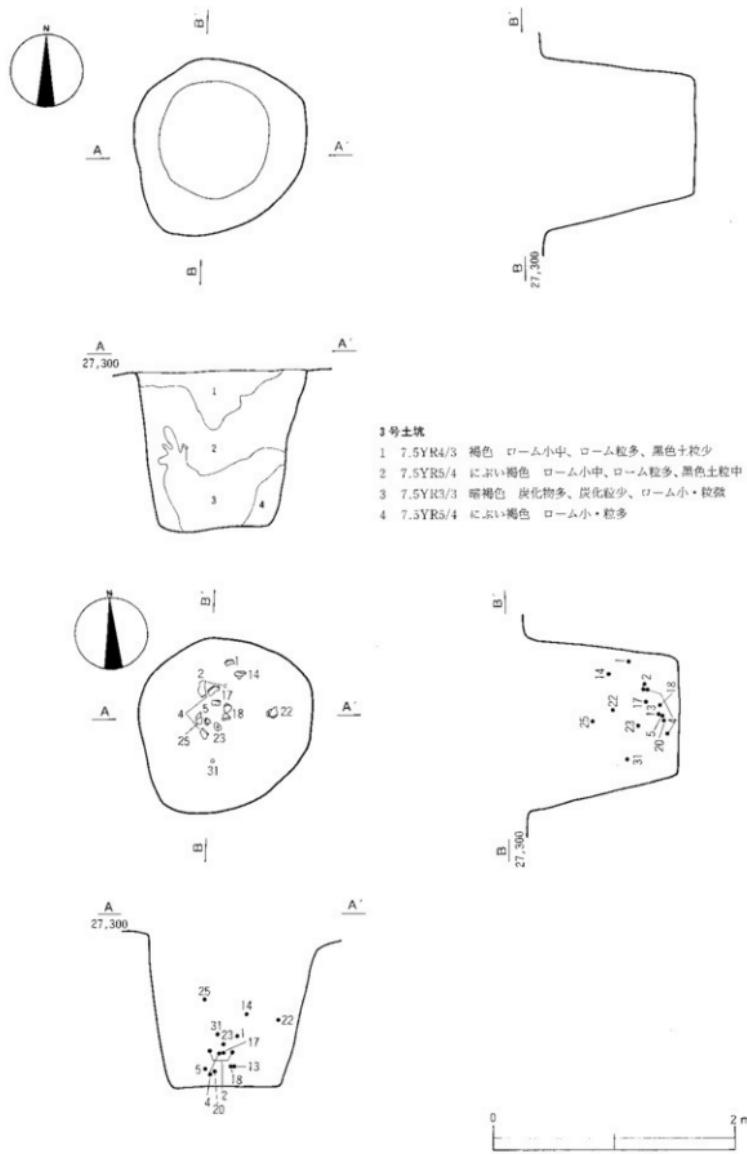
底面 円形を呈し、平坦である。

覆土 4層に分層され、遺物の含まれる2~4層までは一気に埋め戻されたものと思われる。特に遺物の集中する3層では炭化物の量が多い。

遺物 覆土中~下位より多数出土している。土器は18を除き全て深鉢である。1は推定径18.8cmで口縁部下に両側がなでられる微隆起線文が1条巡り、下半は0段多条RL。外面に炭化物が付着していた。2は推定径20.6cmの波状縁で、口縁に沿って両側がなでられる降唇文が1条巡る。下半は単節RLで内面に炭化物が付着していた。3は推定径29.4cmで口縁下に幅広で浅い沈線が1条巡る。下半は0段多条LRで外面に炭化物が付着していた。4は推定径21.0cmで口縁下に左→右へと施文される沈



第16図 1号・2号土坑検出状況



第17図 3号土坑検出状況

線が1条巡る。下半は単節RLである。5は推定径18.4cmで、口縁部は磨きにより稜が作られ、幅の狭い無文帯となる。下半は附加条2種無節Lr+Lrである。6・7は波状縁で、口縁に沿う微隆起線文が1条巡り、下半は曲線文となる。6は単節RL。7は原体不明の縄文で外面に炭化物が付着していた。8は波状縁で口縁に沿い両側がなでられる微隆起線文が1条巡り、下半は曲線文が描かれている。曲線文の両側に単節RLが施文され、外面に炭化物が付着していた。9は波状縁で2条の沈線が水平に巡り、この間に円形刺突が連続して加えられる。沈線間は無文で、口縁部は単節LRである。10・11は波状縁で、口縁に沿い沈線が1条巡る。11の沈線は幅が広い。下半はともに0段多条LRである。12~19は脛部片である。12は脛曲部が隆帯状に高まりこの直上に沈線が1条巡っている。上下方は単節RLである。13は垂下沈線文で0段多条RLと無文帯が交互に施文されている。14は垂下する微隆起線文で文様間と隆起線沿いはなでられて無文となる。0段多条RL。15は両側がなでられる曲線的な微隆起線文で、無文帯を介さず0段多条RLが施文されている。16~17は曲線的な沈線文で、0段多条RLが施文されていた。18は壺もしくは鉢形土器である。器壁は薄く微隆起線文により曲線文が描かれている。外面に炭化物が付着していた。12・13が加曾利E III式となる他は加曾利E IV式に相当しよう。19~22は底部で、全て無文である。19は推定径7.2cmで底部直上は横なで、20は径4.8cmで底面やや上げ底気味、磨かれていた。21は推定径5.2cmで底面磨き、22は径6.2cmで底面が凸レンズ状である。23~32は上製品である。23は有孔円盤で全周丁寧に磨られている。穿孔は両側より行なわれ、内面の孔の方が径が大きい。孔径1.9cmで周縁の幅とほぼ同じである。25~29は上鍤で、全て欠損している。28・29は方形である。30~32は上製円盤である。全て周縁を丁寧に磨っていた。

33は磨石類である。表裏両面に研磨痕が認められ平坦化している。流紋岩質軽石。

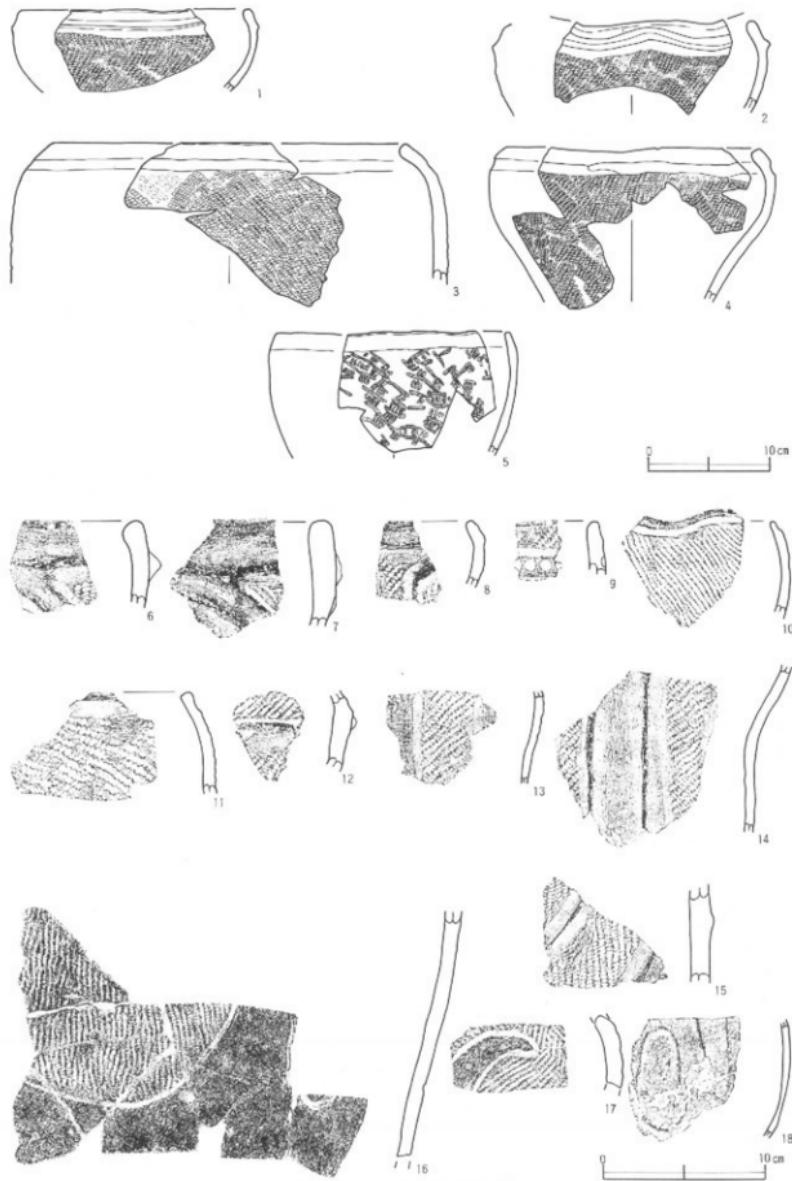
3号土坑出土土器観察表

No.	名称	残存	大きさ(cm)	重量(g)	整形	文様・その他	時期
23	有孔円盤	完形	5.2×5.3	38.2	全周磨り	丁寧な磨り、沈線文、0段多条RL、両側より穿孔	中期後半
24	土鍤	2/3	(5.6)×6.4	(49.5)	一部削り	0段多条LR、切り目1ヶ	不明
25	土鍤	2/3	(5.1)×6.4	(43.0)	打ち欠き	0段多条RL、沈線文、切り目1ヶ、内面炭化物	加曾利E IV式
26	土鍤	1/2	(3.4)×(4.0)	(10.3)	一部削り	0段多条LR、切り目1ヶ	不明
27	土鍤	一部	(2.2)×(2.3)	(3.5)	全周磨り	無文、切り目1ヶ	不明
28	土鍤	2/3	(3.7)×1.3	(14.9)	一部磨り	0段多条RL、切り目1ヶ、方形	不明
29	土鍤	一部	(3.1)×(2.8)	(5.5)	全周磨り	0段多条RL、切り目1ヶ、方形	不明
30	上製円盤	完形	6.6×6.3	37.1	全周磨り	丁寧な磨り、単節RL、表面炭化物	不明
31	上製円盤	完形	4.5×4.2	20.5	全周磨り	丁寧な磨り(光沢)、単節LR、表面炭化物	不明
32	土製円盤	1/2	(2.9)×(4.0)	(7.9)	全周磨り	丁寧な磨り、単節RL	不明

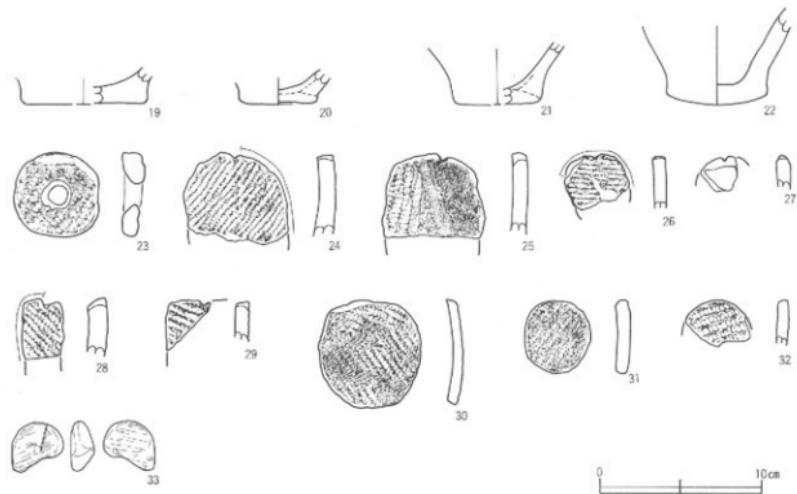
3号土坑出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
33	磨石類	3.61	2.77	1.39	1.6	流紋岩質軽石	片側に断面「U」状の深い溝。

所見 本跡は、縄文時代中期後半の土坑である。出土土器に1号住居址と接合したものがあり(16)、遺物の廃棄された時期を等しくする。



第18図 3号土坑出土遺物①



第19図 3号土坑出土遺物②

4号土坑 【第20図】

位置 3V-9区を中心とする。

規模と形状 径1.1mの円形を呈し、深さ32~34cmである。

壁面 西壁は外傾して立ち上がる。東壁は緩やかに外傾して立ち上がり、中位で段をなす。

底面 不整円形を呈し、平坦である。

覆土 上層を中心に焼土が散見するが、本跡に伴うものではない。

遺物 出土していない。

所見 本跡は造構に伴う出土遺物がなく、時期・性格は不明である。

5号土坑 【第20図】

位置 4B-0+1区

長軸方向 N-7°-E

重複関係 南側を3号溝に浅く掘り込まれているので、本跡の方が古い。

規模と形状 長径2.0m、短径1.4mの不整楕円形を呈し、深さ108~115cmである。

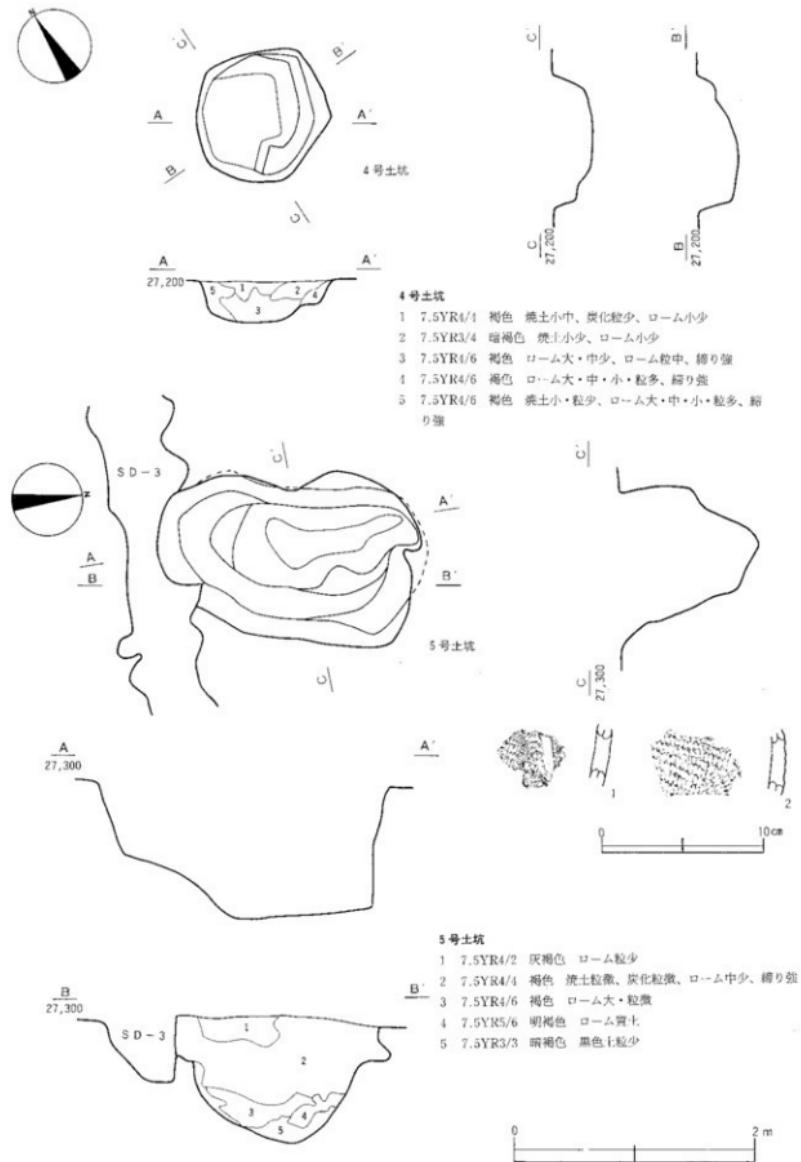
壁面 緩やかに外傾して立ち上がり、中位で段をなす個所もある。

底面 不定形を呈し、平坦である。

覆土 ローム質土の流れ込み（4層）もみられるが、基本的に自然堆積である。

遺物 覆土中から2点、縄文土器が出土している。1は地文0段多条LRで沈線文が垂下し、沈線右側は無文である。断面に炭化物が付着していた。加曾利E III式に相当しよう。2は0段多条RLの羽状縄文である。

所見 本跡は縄文時代中期後半の土坑である。具体的な役割は不明である。



第20図 4号・5号土坑検出状況

6号土坑　〔第22図〕

位置 調査区域中央部 3 Y - 6 区

長軸方向 N - 38° - E

規模と形状 平面形は長径98cm、短径88cm、深さは56cmの楕円形を呈する。断面形は円筒形である。

壁面 やや外傾して立ち上がる。

底面 円形を呈し、平坦である。

覆土 褐色相を主体とし、自然堆積である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の営まれた時代と役割は不明である。

7号土坑　〔第21・22図〕

位置 4 A - 9 区を中心とする。8号土坑の西側。

長軸方向 N - 28° - W

重複関係 北側部分を6号溝に掘り込まれているので、本跡の方が古い。

規模と形状 長径2.3m、短径1.5mの不整楕円形を呈し、深さ105~111cmである。

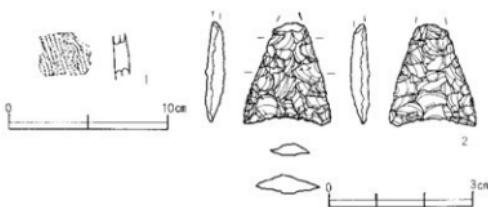
壁面 西壁は緩やかに外傾して立ち上がり、中位に段をなしている。東壁はやや垂直に立ち上がり、緩やかに内傾する。

底面 方形状を呈し、東側はえぐられている。

覆土 自然堆積である。

遺物 覆土中より無節L型の縄文土器(1)と無茎石錐(2)が各1点出土している。石錐は流紋岩製で脚内側の抉り加工が浅く、先端部は折損している。

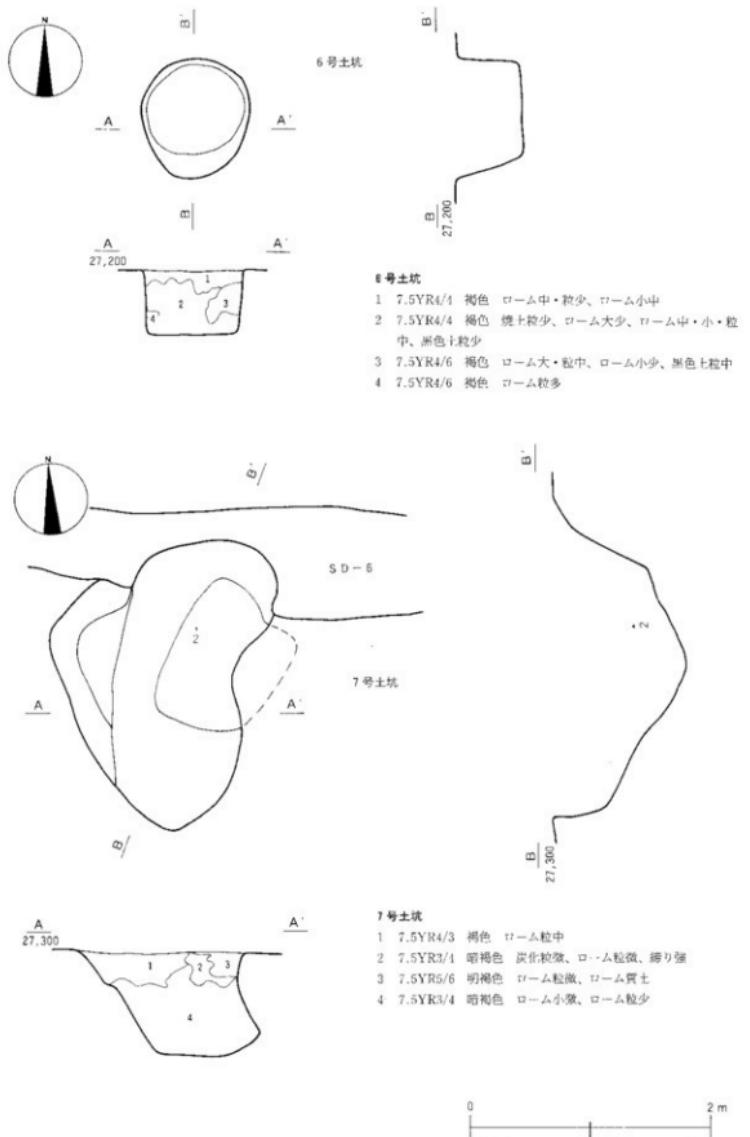
所見 本跡は、縄文時代の土坑である。性格は不明である。



第21図 7号土坑出土遺物

7号土坑出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
2	石錐	0.12	1.80	0.36	(1.0)	流紋岩	無茎、抉り込み浅い。



第22図 6号・7号土坑検出状況

8号土坑　〔第23図〕

位置　7号土坑の東側。4 A - 9区

長軸方向　N-28°-W

規模と形状　長径2.3m、短径1.2mの不整楕円形を呈し、深さ44~46cmである。南側部分に径24~28cm、深さ42cmのほぼ円形のピットがある。

壁面　外傾して立ち上がっている。南西壁は中位に段をなしている。

底面　不定形を呈し、平坦である。

覆土　ピットの埋没に続き、3・5層のローム質土が堆積し、1・2層の褐色土が時間を経て堆積していくものと考えられる。

遺物　出土していない。

所見　本跡に伴う出土遺物がなく、時期・性格は不明である。

9号土坑　〔第23図〕

位置　調査区域東側の7号溝東壁沿いに確認できる。4 B - 9区

長軸方向　N-38°-E

重複関係　確認面の状態では重複関係は見られなかったが、上層断面から7号溝を本跡が掘り込んでいる。

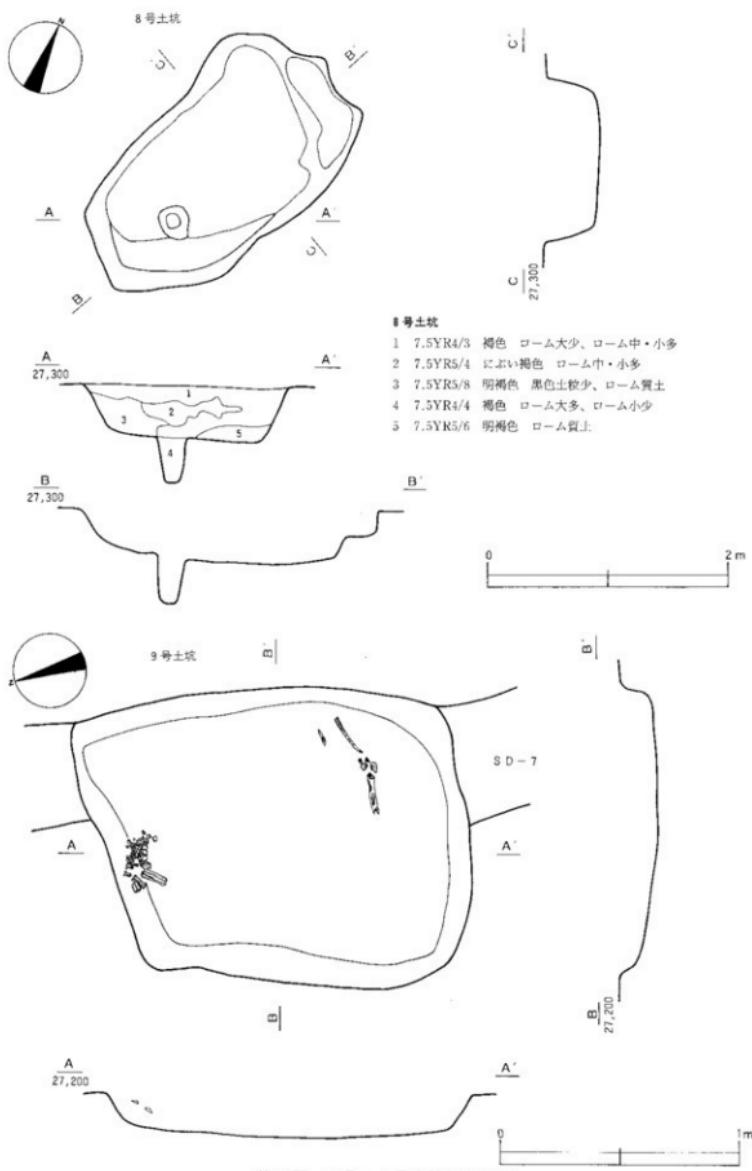
規模と形状　長径180cm、短径122cm、深さ18cmの不整楕円形を呈している。

壁面　外傾して緩やかに立ち上がる。

底面　不整長方形を呈し、平坦である。

遺物　馬と覚しき頭骨片、歯、四肢骨の一部が底面に散見された。

所見　骨の遺存状況が良好であるため、本跡は遡及しても、100~200年前の馬の埋葬墓塚と考える。



第23図 8号・9号土坑検出状況

1号溝 [第24~26図]

位置 調査区東端 4 C - (- 2) - 12区、4 D - 4 ~ 16区

方向 4 D - 16区から北方向へ直線的に延びる。

重複関係 5号溝と1号溝の上層断面を比較観察したところ、まず5号溝がカギの手状に掘られ、その後に本跡が掘られたと考えられる。また本跡は、6・8・9号溝の東端と切り合う。中央部分では、1号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 全長約72mで、掘り方は上幅154~228cm、下幅9~85cm、深さ38~102cmである。断面図は、北側が逆台形・南側がV字形を呈する。溝の南側東壁沿いには、厚さ10~15cmの硬化面が途切れながらも存在する。

覆土 横位に累層する自然堆積で、下層に従い硬度が増す傾向がある。

遺物 土師器(古墳・奈良・平安)、陶器(中世)などが出土した。しかし、いずれも浮いた状態で出土しており、本跡に確實に伴うものではない。

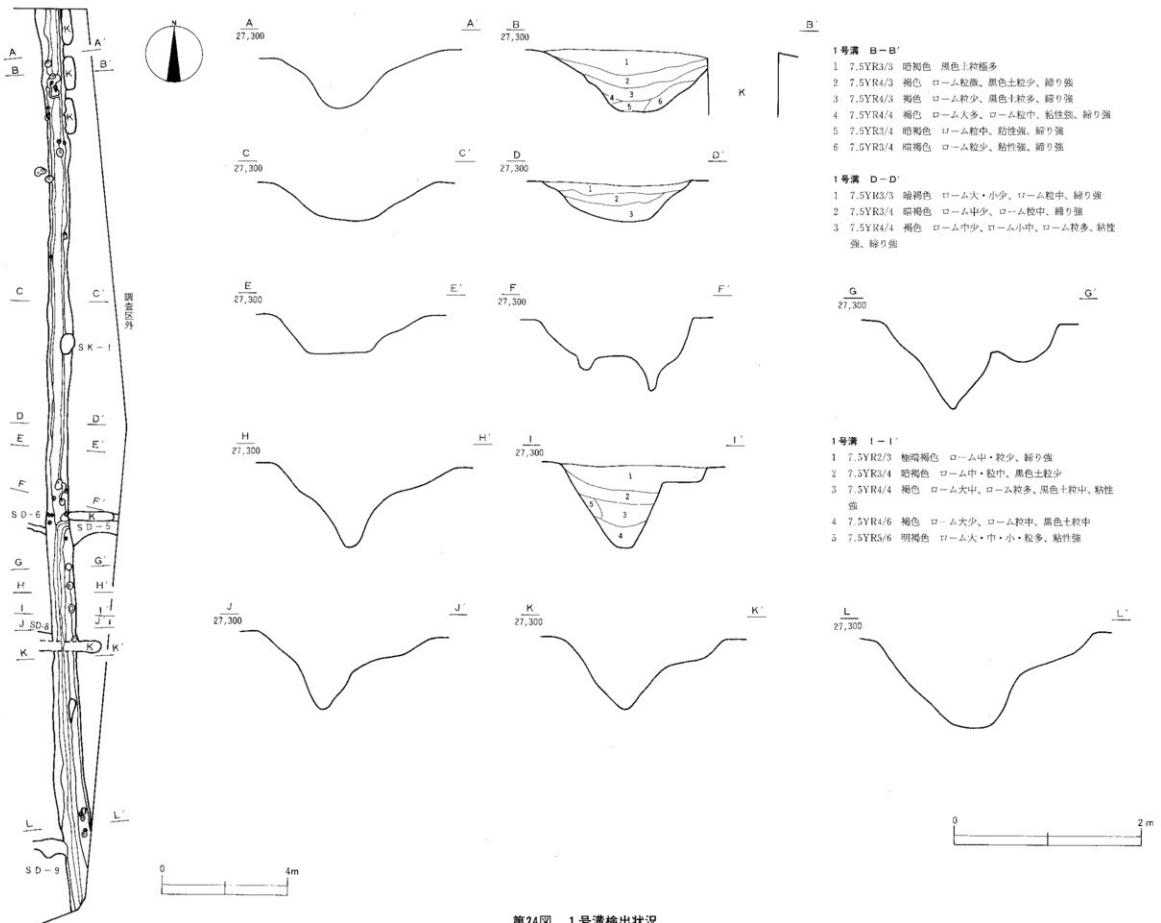
所見 本跡は6・8・9号溝の東端を吸收した形を示すが、6・8・9号溝自体は本跡の東側に延長していないため、本跡とこれらの溝が共存した可能性も考えられる。また本跡の絶対高は、北側で52cm、南側で102cmと比高差をもっている。硬化面については、溝の機能が低下・喪失してから道路的な用途として構築されたものと考える。本跡の正確な時期、具体的な役割については不明である。溝は、更に南北方向に延進するものと思われる。

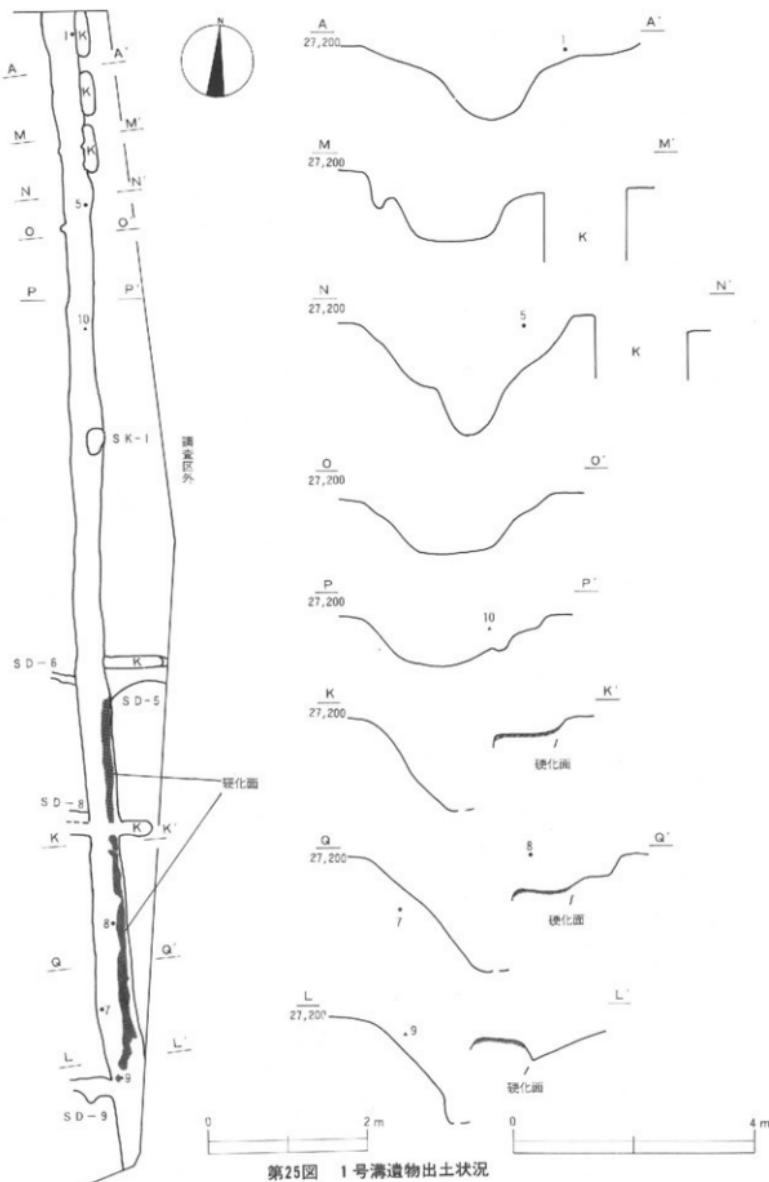
1号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土供 献存率	地成 土質	胎 土	色 調	器形・技法の特徴	備 考
1	土師器 壺	A (16.0) C (3.8)	覆土上層 5%	普通	長石少量・ 石英微量	に深い褐色	帯状粘土を馳り合わせた複合目録。頸部 寄りにハケ。内面被付ヘラミガキ。	古墳時代
2	土師器 杯	A (12.8) C (2.1)	覆土中 10%	普通	長石微量	に深い褐色	内面・口縁外面はヨコナデ。底部はナデ。	古墳時代
3	土師器 杯	A (15.8) C (3.1)	覆土中 10%	普通	長石・石英 微量	明赤褐色	口縁部ヨコナデ。内面ナデ。底部は指彫による調整。	
4	土師器 壺	C (1.8)	覆土中 5%	普通	長石少量・ 石英微量	に深い赤褐色	口縫部は鶴の上方につまみ上げられ、S 字状に開拓する。ナデ調整。	奈良・平安時代
5	土製品 土瓦	長さ 2.3 幅 2.6 孔径0.7	覆土上層 完形	普通	長石微量	に深い赤褐色	全体に不均一なミガキ調整。被熱して、 黒褐色化する個所あり。	重さ13.7kg
6	土師器 内墨高台 付杼	C (1.3)	覆土中 5%	普通	長石少量	内面黑色 外面黄褐色	内面黑色処理の上、ヘラミガキ。底面は 回転ヘラ切り。	平安時代
7	陶器 甕	C (8.1)	覆土中層 5%	良好	長石少量	助土・褐灰色 釉調改変色	外面に淡緑～灰色の釉が付着する胴部 肩。花弁状の押印文を施す。内面擦痕斑。	常滑窯 中世
8	陶器 こね鉢	C (3.6)	覆土上層 5%	良好	長石少量	灰白色	内面に淡緑色の釉が付着。口縁部外面は 微降起する。	山茶窯 中世

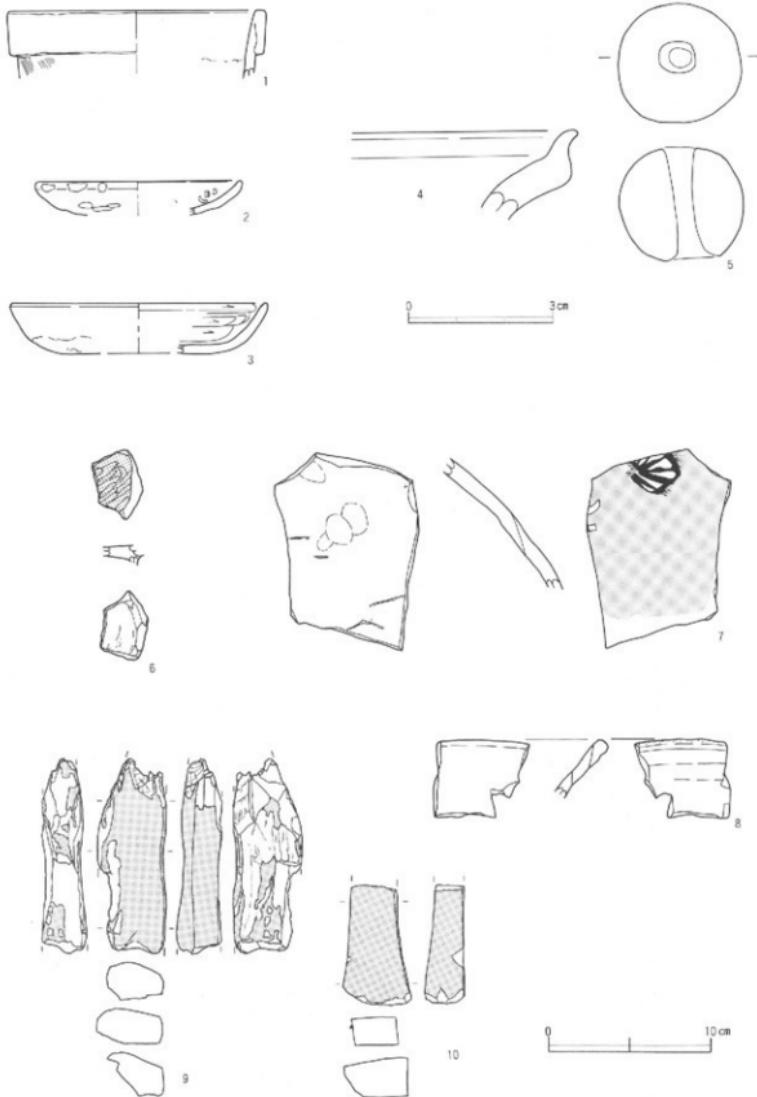
1号溝出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備 考
9	砥石	(11.89)	(4.07)	(2.66)	(178.0)	結晶片岩	表面・側面が凹んでいる。
10	砥石	(7.01)	(4.18)	(2.35)	(97.0)	凝灰岩	4面砥面。折損。裏面に刀傷。





第25図 1号溝遺物出土状況



第26図 1号溝出土遺物

2号溝〔第27~29図〕

位置 調査区北端 3S・3Z・4A・4B-(-1) 区

方向 3S-(-1) 区から真東へ、ほぼ直線的に延びる。

重複関係 2号住居址と切れ合ひ関係にあるが、出土遺物を考慮すると明らかに本跡が新しい。

規模と形状 全長約37mで、掘り方は上幅90~118cm、下幅30~50cm、深さ41~69cmを計る。断面観は、逆台形である。

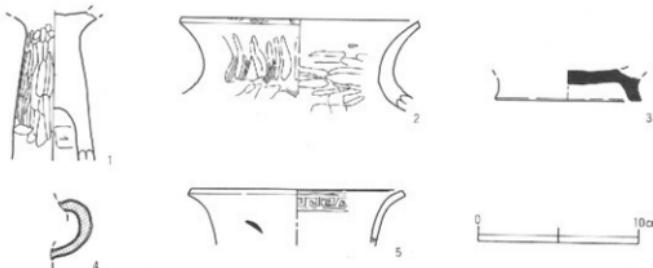
覆土 ロームの含度が高く、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物 土師器(古墳)、須恵器(奈良・平安)、磁器(中近世)などが出土した。いずれも時代が不均一な遺物群であり、本跡に確実に伴うものではない。

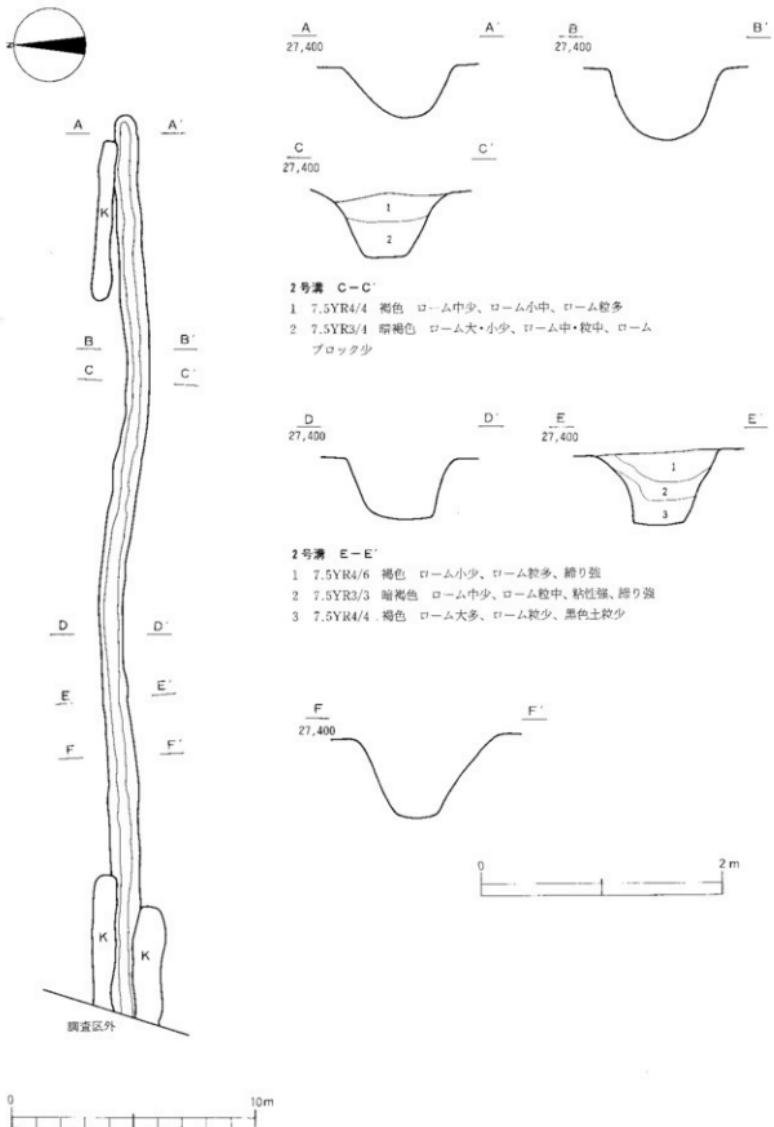
所見 本跡は底面幅も広く、台形状に掘り込まれており、しっかりした形の溝である。時期・性格は不明である。

2号溝出土遺物観察表

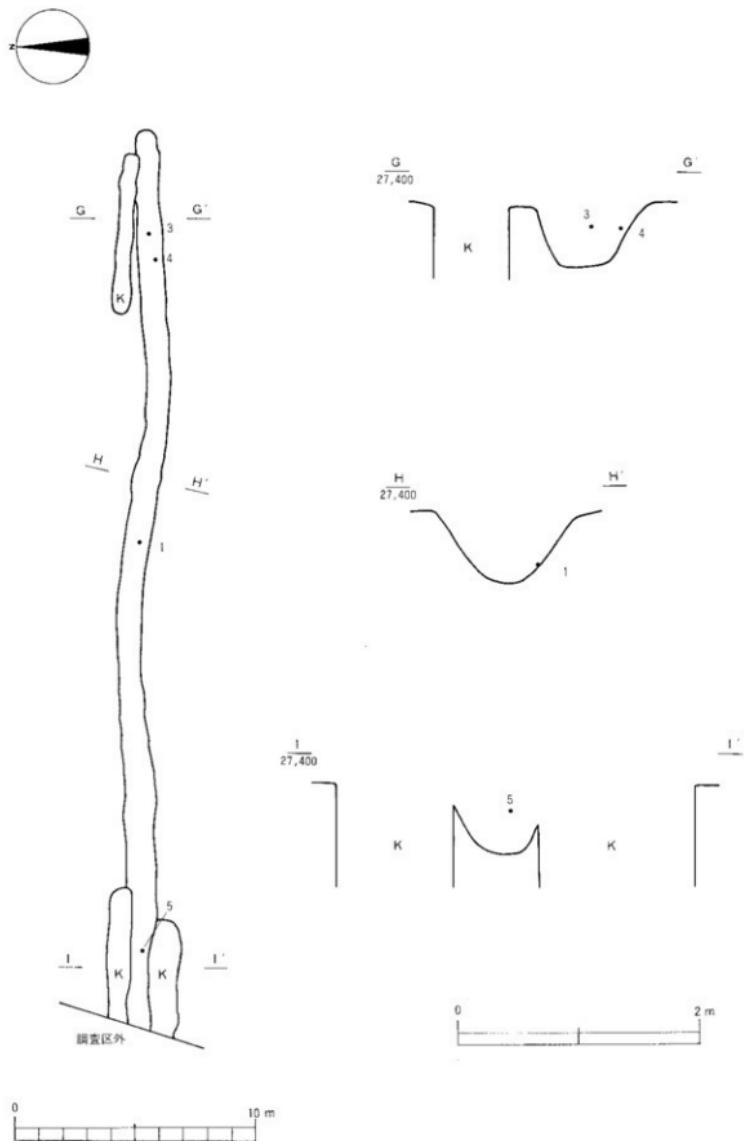
No	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	地 質	黏 土	色 調	器形・技法の特徴	備 考
1	土師器 高杯	C (8.3)	覆土下層 60%	普通 粗粒微景	長石・石英 粒微景	にほい黄橙 色	体部へと徐々にすさまる脚部片。外表面 のヘラミガキ。内面ヘナテ。	古墳時代
2	土師器 壺	A (14.7) C (4.7)	覆土中 25%	良好 微粒	長石・石英 粒微景	にほい橙色	鏡やかに外反する口縁部片。外表面ケメ の上ナデ。内面横径のヘラミガキ。	古墳時代
3	須恵器 高台付杯	B (9.0) C (2.1)	覆土上層 50%	良好	石英少量 橙色	灰色 橙色	高台内底面は被熱し、赤色变成する。底 部回転ヘラ切り。	奈良・平安時代
4	青磁 香炉 または蓋	C (3.7)	覆土上層 90%	良好 精良	オリーブ灰 色 灰白色	青部。外表面に0.5mm大の気泡が生じ る。釉は厚い。		中近世
5	染付 碗	A (13.0) C (3.4)	覆土上層 15%	良好 精良	明青白色 灰白色	外表面に蒂旗と文様(不明)。内面には雷文 が口縁部に配される。ラッパ状に開く口 縁部片。		肥前系 近世



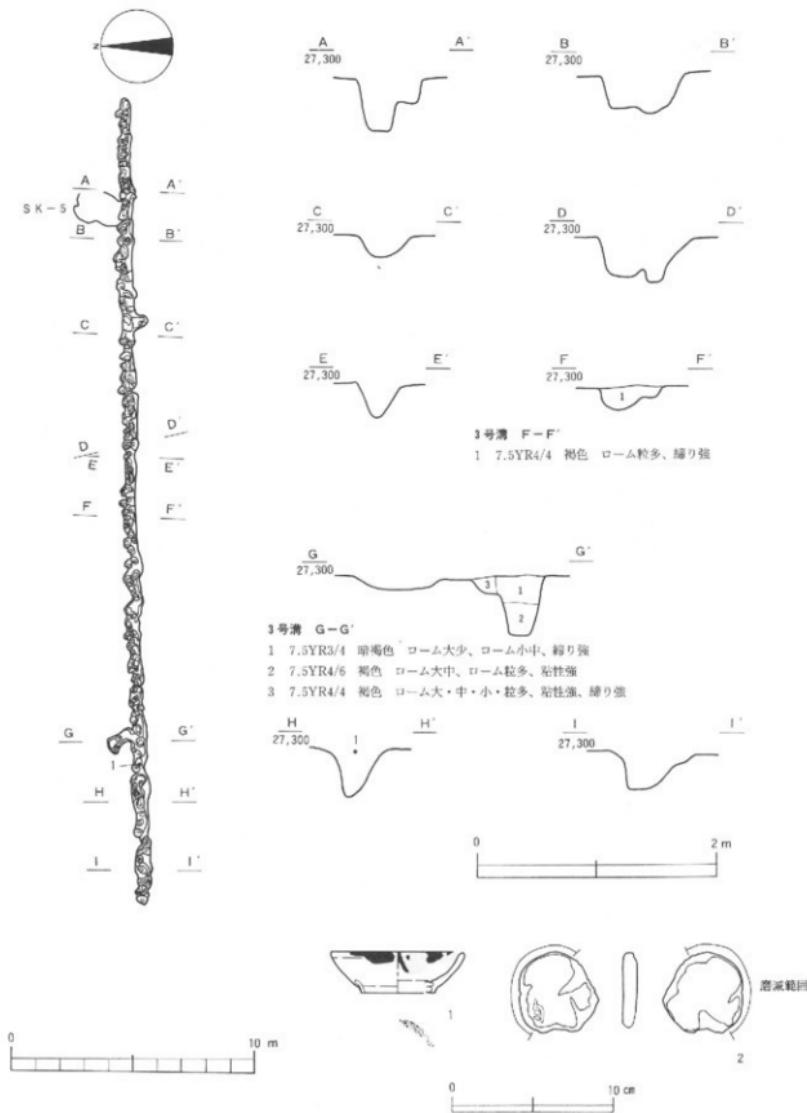
第27図 2号溝出土遺物



第28図 2号溝検出状況



第29図 2号溝遺物出土状況



第30図 3号溝検出状況・出土遺物

3号溝〔第30図〕

位置 調査区北側 3 U ~ 3 Z + 4 A ~ 4 C - 1 区

方向 3 U - 1 区から真東方向へ、直線的に延びている。

重複関係 4 B - 1 区で 5 号土坑を掘り込んでおり、本跡の方が新しい。

規模と形状 全長約33m。全体が擾乱されており、溝の形状はほとんど残っていない。

覆土 摰乱部・溝覆土ともにロームを多く含むことから、人為的な埋土であろう。

遺物 土師質土器小皿(1)、円形に磨られた土製品(2)が出土している。上層または覆土中からの出土のため、本跡に伴うものとは言えない。

所見 作物痕と覺しき擾乱が重複し、遺存状況が劣悪である。遺構の性格や時代は不明。

3号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎・土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師質 土器 小皿	A (8.2) B (4.6) C 2.5	覆土上層 15%	普通	赤色粒少量	にほい褐色	模やかに立ち上がる口縁部片。底部同様 赤切り底。内外面ナデ。口縁部に墨色物 (油煙?) が多量に付着する。	灯明窯として利 用
2	土製品	最大幅5.0 厚さ 0.9	覆土中	普通	長石・雲母・ 赤色粒・ 石英微量	褐灰色 にほい褐色	両面に数ヶ所削痕あり。側面が円周状に 磨滅する。	土師質土器の転 用か

4号溝〔第31図〕

位置 2・3号溝と並列する。3 U + 3 V - 2 区

方向 3 U - 2 区から真東へ直線的に延びている。

規模と形状 全長約6mで、掘り方断面は上幅52~62cm、下幅20~25cm、深さ4~14cmで浅い箱掘形である。東端に長径20~34cm、短径14~22cm、深さ28~38cmの楕円形の落ち込みが2ヶ所ある。

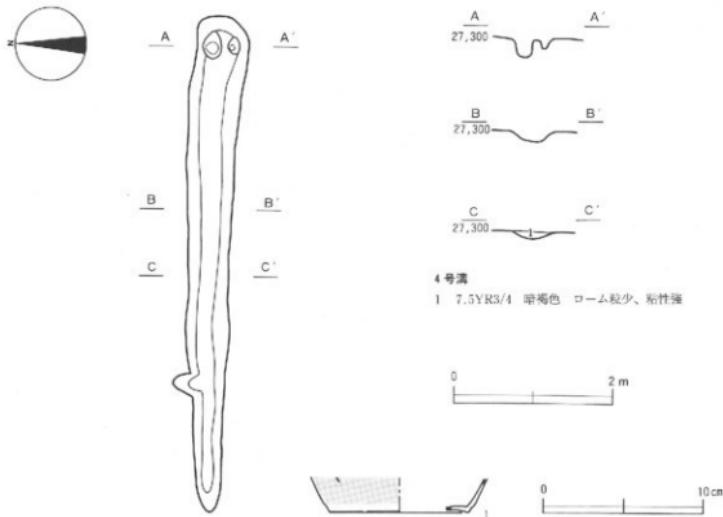
覆土 1層のみの單一層で、自然堆積と思われる。

遺物 覆土中から近現代と覺しき磁器片(1)が出土した。

所見 時期的には近現代以降の遺構と考えられるが、性格は不明である。

4号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎・土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	磁器 瓶類?	B (4.3) C 2.1	覆土中 10%	良好	精良	灰白色 にほい黄色	底面は四側に突出し、体部は外傾して立 ち上がる。内面と底部寄り側面は無釉。	近現代か



第31図 4号溝検出状況・出土遺物

5号溝 [第32図]

位置 4D-8・9区を中心とする。

方向 4D-8区東壁から西へ延び、4D-9区で南へL字状に曲がり1号溝に含まれる。

重複関係 上層断面の観察からまず本跡が掘られ、その後1号溝に掘り込まれたと考えられる。

規模と形状 掘り方の上幅は擾乱のため不明。下幅24cm、深さ31~33cmで断面視はU字形である。

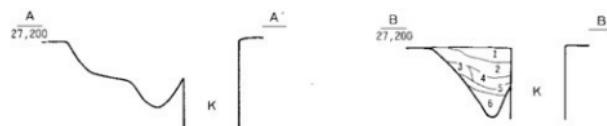
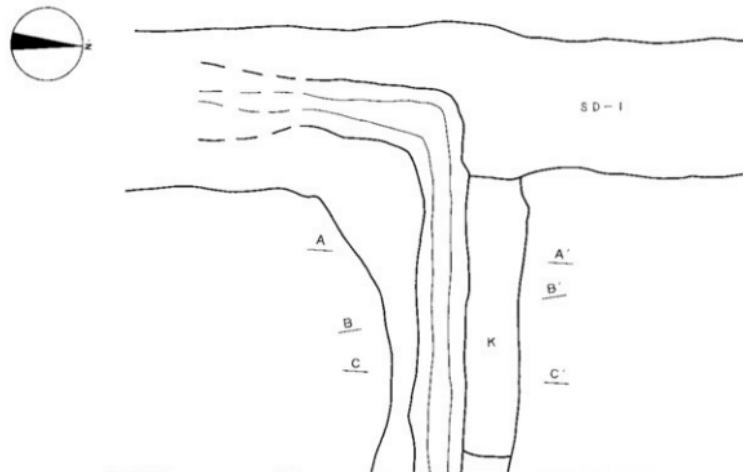
覆土 始めにロームの多い5・6層が人为的に埋め戻され、以後上面まで褐色相の土が堆積していくものと思われる。

遺物 須恵器片(1)が覆土中から出土しているが、出土高からみて当造構と関連性は乏しい。

所見 本跡は、更に東方に延長するものと思われる。溝の時代や性格は不明である。

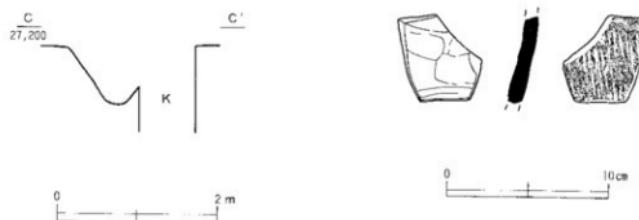
5号溝出土遺物観察表

Na	器種 器形	法量(cm)	出土位置 段 有 无	焼成	胎 土	色 調	器形・技法の特徴	備 考
1	須恵器 壺類	C (5.2)	覆土中 5%	普通	雲母微量	にぼい黄褐 色 暗灰黄色	外面に条痕群からなる叩き目底。内面ナ デ。	奈良・平安時代



5号溝

- 1 7.5YR3/4 にぼい褐色 ローム大粒、ローム小中、ローム粒少、黒色土粒中、締り強
- 2 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒強、黒色土粒少、締り強
- 3 7.5YR5/6 明褐色 ローム中・小中、黒色土粒少、締り強
- 4 7.5YR5/4 にぼい褐色 ローム大粒、ローム小粒中、黒色土粒多、締り強
- 5 7.5YR6/8 橙色 ローム大・中・小・粒多
- 6 7.5YR4/6 褐色 ローム大・中多、ローム小少、ローム粒微、黒色土粒多



第32図 5号溝検出状況・出土遺物

6号溝 [第33図]

位置 調査区中央部 3 V ~ 4 B - 8, 4 A ~ 4 C - 9 区

方向 ほぼ東西に延びる。

重複関係 精査時の観察所見からは、7号溝と7号土坑よりも本跡の方が新しいが、東端で交わる1号溝との新旧関係は不明である。

規模と形状 全長29.2m、上幅90~25cm、下幅50~10cm、深さ15~6cmである。底面は後世の搅乱による複数のビットがあり、断面形は皿形である。西端で溝が切れているのは、溝の深度が浅く、表上除去時に溝の下面まで削り取られたためと考えられる。

覆土 水平方向に主として堆積することから自然堆積と思われる。

遺物 覆土中から近世の肥前系染付（1）が1点出土した。

所見 本跡の営まれた時期と役割は不明である。

6号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	染付 皿	A (18.0) C (1.7)	覆土中 10%	良好	精良	明緑灰色 灰白色	板やかに立ち上がる口縁部片。外側に1 条の沈線、内面に文様（花？）が描かれ る。	肥前系 近世

7号溝 [第34図]

位置 調査区東南 4 B - 7 ~ 4 C - 16, 4 D - 16 区 1号溝に並行する。

方向 調査区東南からゆるやかにS字状に南に向かい、調査区外に延びる。

重複関係 本跡と、6・9号溝との切り合い関係は、6号溝より本跡の方が古く、9号溝よりは新しい。

規模と形状 全長40m、上幅100~45cm、下幅80~25cm、深さ20~2cmである。断面形は、北側では皿形で、南側においては逆台形を呈する。6号溝と交差する辺りから北側は、深度は浅くなり端部で途切れれる。

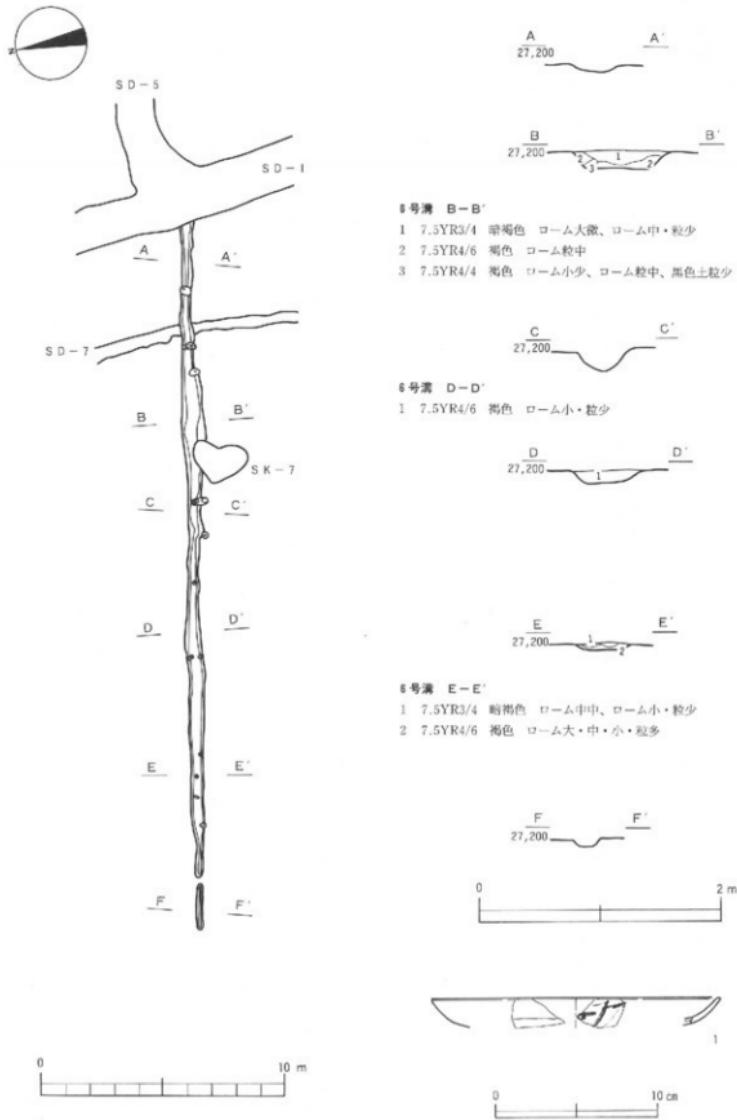
覆土 暗褐色相を主体とし、單一相が多い。自然堆積と思われる。

遺物 覆土中から、土師器片（1）、陶器片（2）が出土しているが、本跡に確実に伴うものではない。

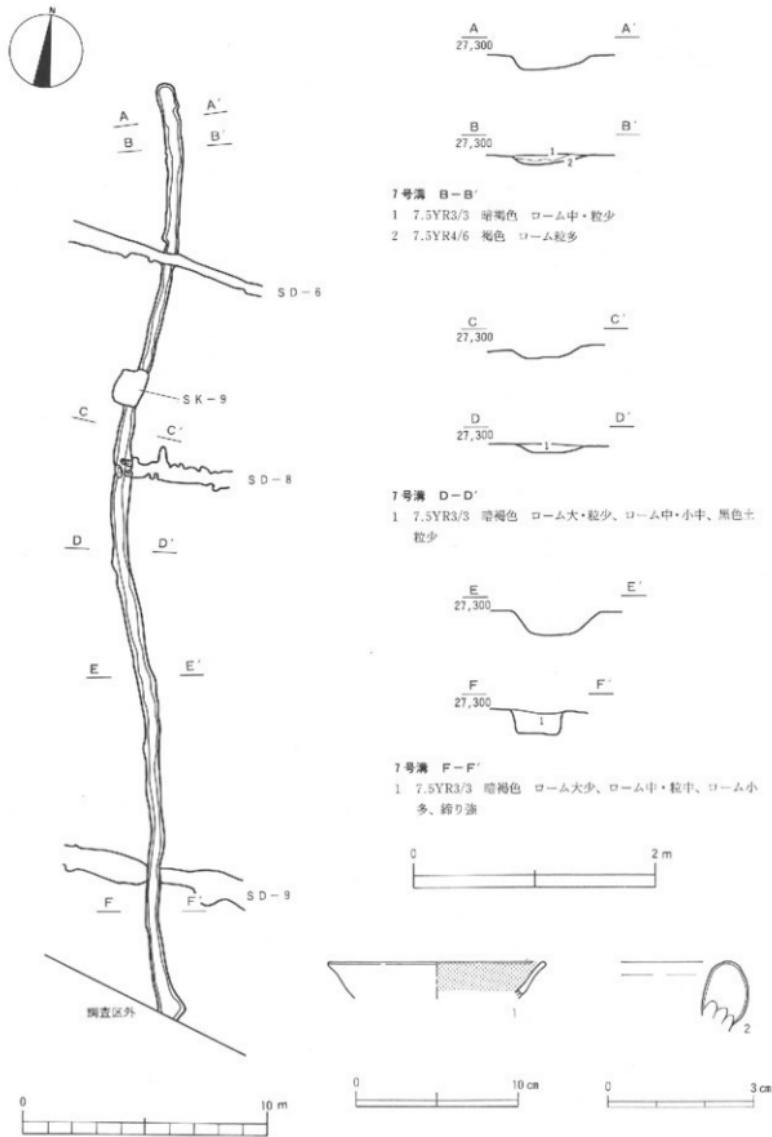
所見 本跡の時期・役割は不明である。

7号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 内黒杯	A (13.5) C (2.2)	覆土中 5%	普通	長石微混 黒色	にぶい黄褐色 黒色	外反する口縁部片。外面ナデ。内面黒色 処理の上、横位ヘラミガキ。	奈良・平安時代
2	陶器 碗皿類	C (1.4)	覆土中 3%	良好	良土	暗赤褐色 にぶい黄褐色	肥厚し、丸みを帯びる口縁部片。種は厚 い。	瀬戸美濃系 近世



第33図 6号溝検出状況・出土遺物



第34図 7号溝検出状況・出土遺物

8号溝 [第35図]

位置 調査区北東側に確認でき、6・9号溝と並行する。4B・4C-11区

方向 ほぼ東西に延びる。

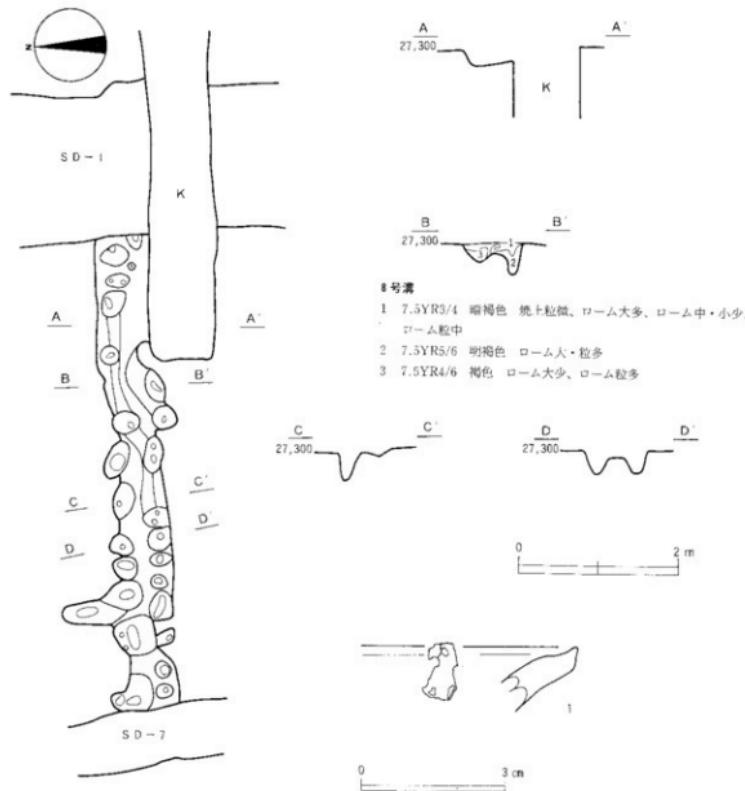
重複関係 本跡は、1号溝と7号溝と切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。

規模と形状 全長5.8m、上幅60cm、下幅8~4cmである。溝全体に後世の擾乱と思われる複数のビットがあり、旧状を留めていない。

覆土 摆乱が多く、正確に層位を把握できなかった。

遺物 覆土中から常滑細片(1)が1点出土しているが、本跡に確実に伴うものではない。

所見 本跡の時期・機能は不明である。



第35図 8号溝検出状況・出土遺物

8号溝出土遺物観察表

No	器種 器形	法身(cm)	当土作落 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	陶器 壺類	C(1.0)	覆土中 5%	良好	黒色と微量 灰黄色	オリーブ黃 色	外反し、面取られた口縁部片。外縁には 焼成時の付着物(自然降灰?)あり。	常滑窯産 中型

9号溝　〔第37図〕

位置　調査区域南端　4A-15区

方向　ほぼ東西に延びる。

重複関係　本跡は、1・7号溝と切り合い関係にある。7号溝は本跡より新しいが、1号溝との関係は不明である。

規模と形状　全長11.6m、上幅48~116cm、下幅16~28cm、深さ16~28cmである。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈している。溝の西端に擾乱があり、不明確なまま途切れる。

覆土　始めにロームを主体とした土が堆積し、以後ロームを含む褐色土が均一に堆積する。

遺物　出土していない。

所見　本跡の時期・機能は不明である。

1号掘立柱建物址　〔第36図〕

位置　調査区中央部　3W-8・9、3X-3Z-7・9、4A-7区

主軸方位　N-5°-W

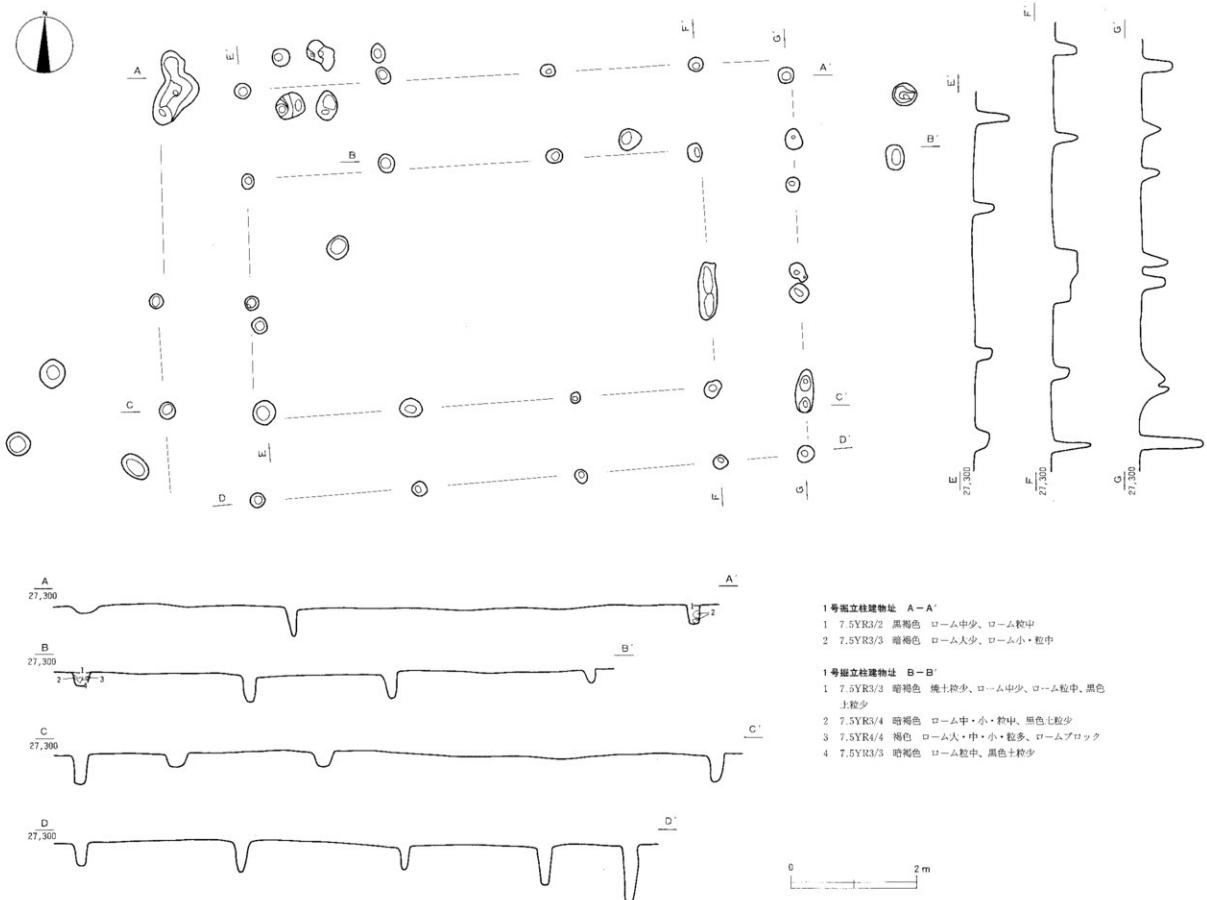
規模と形状　柱穴数は、約27ヶ所を数え、東西5間(約10.1m)、南北4間(約6.4m)の建物である。

柱穴の掘り方は径20~36cmの円形で、深さは9~64cmである。その他の柱穴は径20~36cmの楕円形で、深さは8~38cmで本跡に伴う可能性がある。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

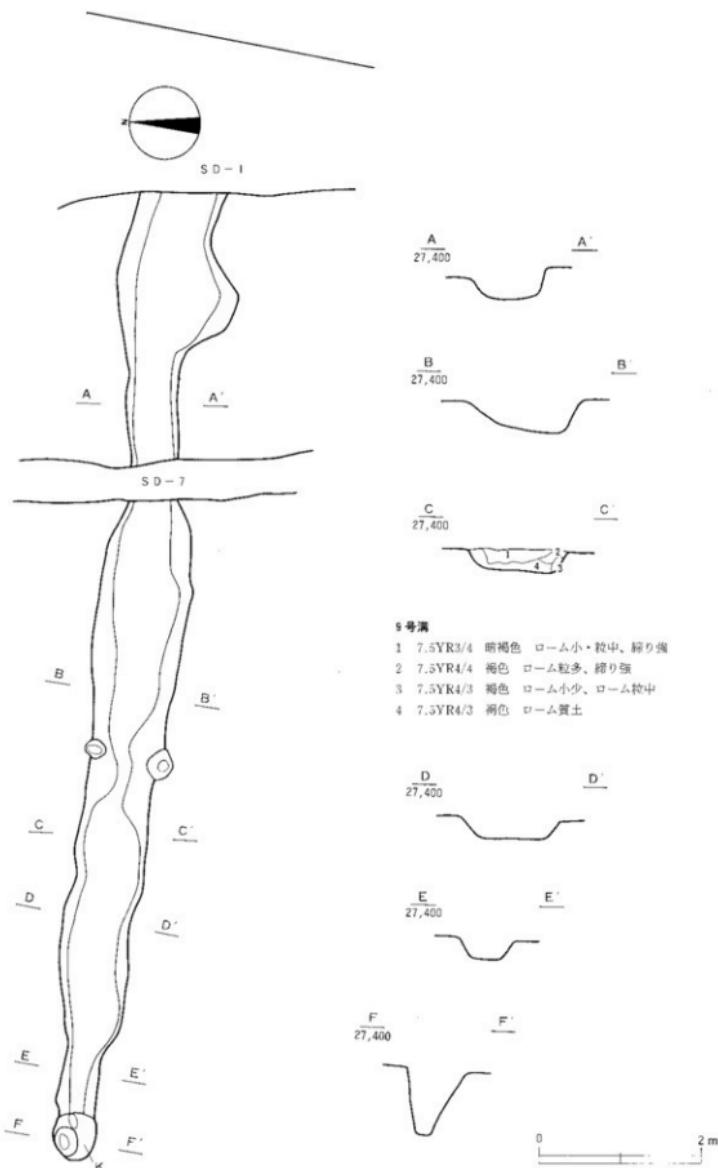
覆土　褐色を基調とする土でロームを含む。柱痕や抜き取り痕は確認できない。

遺物　柱穴内からは出土していない。

所見　柱穴内の出土遺物が無いため、造構の正確な帰属時期は不明である。表探遺物の中に近世以降の陶磁器が散見されることから、消極的な根拠だが近世・近代の建物の可能性が指摘できる。



第36図 1号掘立柱建物址検出状況



第37図 9号溝検出状況

第2節 第2次調査区の造構と遺物

第2次調査区では、土坑6基、溝3条、古墳1基が発見された。以下造構ごとに所見を述べる。

10号土坑 【第38図】

位置 3 N - (-11) 区を中心とする。

長軸方向 N - 38° - W

重複関係 造構確認面からは重複関係はみられなかつたが、上層断面から本跡の覆土を10号溝が掘り込んでいるため、本跡の方が占い。

規模と形状 長径2.3m、短径1.1mの長方形を呈し、深さ72~87cmである。

壁面 継やかに外傾して立ち上がっている。西壁はやや内傾して立ち上がり、やや外反する。

底面 不定形を呈し、ほぼ平坦である。

覆土 自然堆積である。

遺物 土師器片(1)が1点、覆土中から出土した。

所見 本坑は、古墳時代以降の土坑であるが、具体的な時期・性格は不明である。

10号土坑出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 壺腹類	C(4.3)	覆土中 5%	普通	石英微量	明赤褐色	体部片。外面はハケメをナテ消す。内部 はヘラナデ。	古墳時代

11号土坑 【第38図】

位置 調査区西側 3 E + 3 F - (-8) 区

長軸方向 N - 71° - W

重複関係 造構確認時には13号溝と重複関係は不明だったが、出土遺物から本跡の方が占い。

規模と形状 平面形は長径1.5m、短径1.1mの梢円形を呈し、深さ75~77cmの円筒形の土坑である。

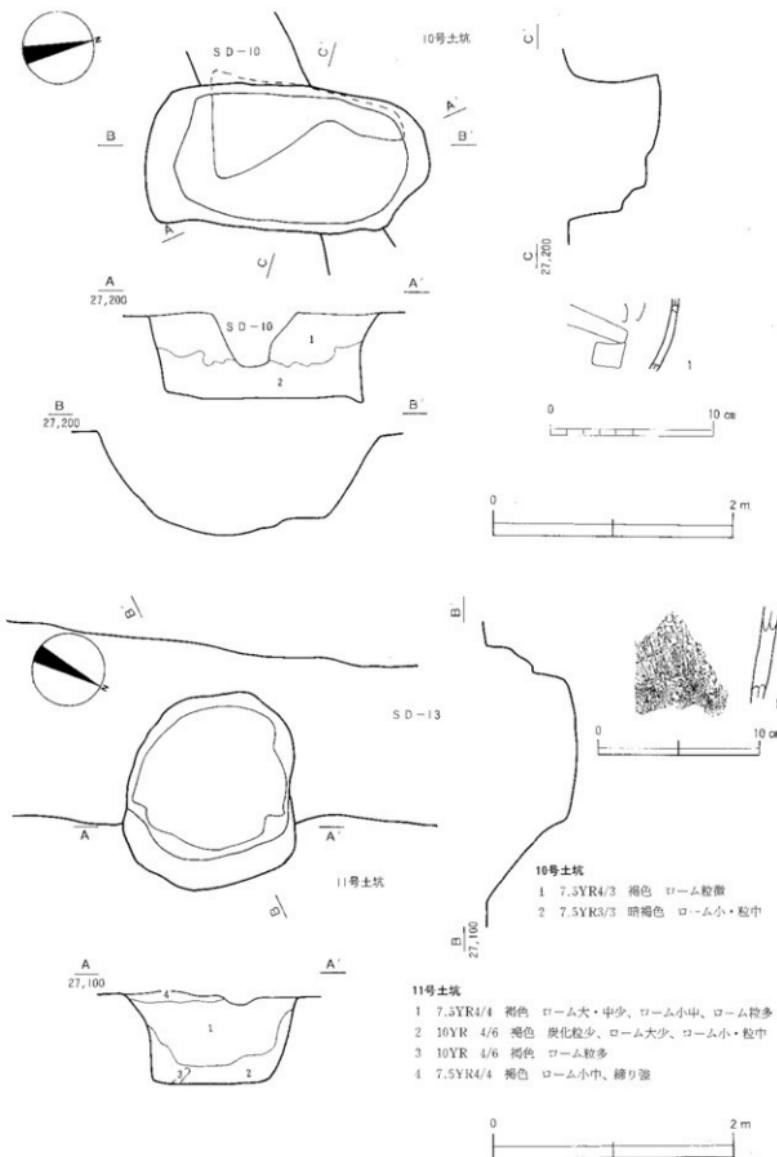
壁面 西壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、13号溝に掘り込まれているため、本来の壁面が失われている。東壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位で段をなしている。

底面 梢円形を呈し、平坦である。

覆土 褐色相の自然堆積である。

遺物 覆土中から縄文土器(1)が1点出土している。器面が荒れており判然としないが地文單節R Lで、数条の沈線が垂下し、下半は無文となる。内面に炭化物が付着していた。加曾利E田式に相当しよう。

所見 本坑は、縄文時代中期後半の可能性がある。性格は不明。



第38図 10号・11号土坑検出状況

12号土坑 〔第39図〕

位置 調査区北端 3 H - (-21) 区

長軸方向 N-23°-W

重複関係 造構確認面からは重複関係はみられなかつたが、土層断面から2層を主体とする穴と、焼土（1層）が散つて、水平堆積（3層）を含む穴の2つに分かれる可能性がある。

規模と形状 長径2.5m、短径1.3mで、深さは66~90cmである。底面は2ヶ所の落ち込みをもつ。

壁面 西壁は外傾して、東壁は垂直に立ち上がっている。

底面 2ヶ所とも楕円形を呈する。

覆土 上層で焼土（1層）がみられるが、本跡に直接伴うものではない。

遺物 出土していない。

所見 本跡に伴う出土遺物がなく、時期・性格は不明である。

13号土坑 〔第39図〕

位置 調査区東端 3 L - (-19) 区を中心とする。

規模と形状 長径1.5m、短径1.3mの不定形を呈し、深さ77~94cmである。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり、中位で段をなしている。

底面 やや傾斜をもち、不定形である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は造構に伴う出土遺物がなく、時期・性格は不明である。

14号土坑 〔第41図〕

位置 調査区南端 3 D - (-6) 区

長軸方向 N-61°-E

規模と形状 長径2.3m、短径1.4mの長楕円形で、深さ1.16~1.23cmである。

壁面 垂直に立ち上がり、中位で大きく外傾する。

底面 長楕円形を呈し、ほぼ平坦である。

遺物 出土していない。

所見 本跡に伴う出土遺物がなく、確実な時期は不明である。土坑の形態から類推して、縄文時代の陥し穴の可能性がある。

15号土坑 〔第40・41図〕

位置 2号墳の内区に掘り込まれる。 3 E - (-26)・(-27) 区

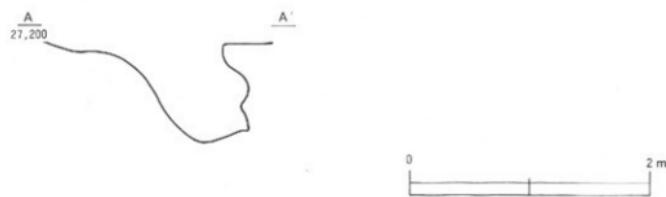
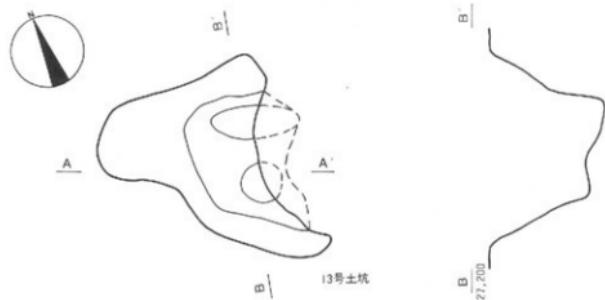
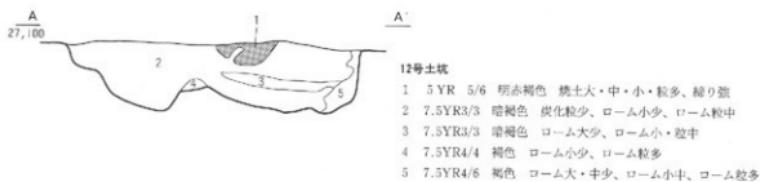
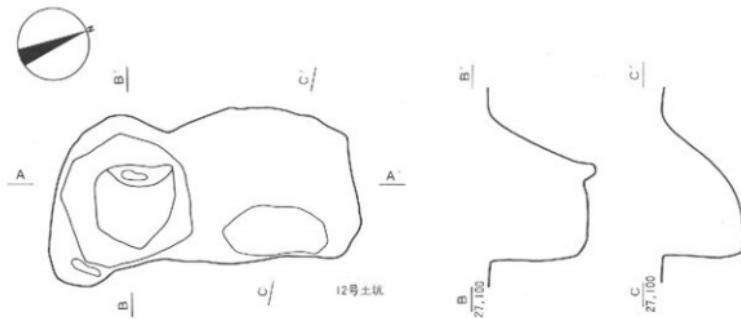
長軸方向 N-96.5°-E

規模と形状 長径98cm、短径74cm、深さ44~20cmの楕円形を呈している。

壁面 壁の上面は北壁を除いて後世の擾乱を受ける。やや外傾して立ち上がる。

底面 楕円形を呈し、平坦である。

遺物 墓上中から1~4の寛永通宝が4枚出土した。1・3・4はいわゆる新寛永で、1697~1747年



第39図 12号・13号土坑検出状況

と1767～1781年の間鋳造された。2は「賀」の字体から古寛永と判ぜられる。1636～1659年の間鋳造された。この他に骨粉などはみられなかった。

所見 寛永通宝は、恐らく六道銭として供えられたものと思われる。土坑の形状が円筒形で、銭貨が複数枚出土したことから、当構造は近世の墓壙と考えられる。時期的には、17世紀末～18世紀代に當まれたものだろう。

15号土坑出土遺物観察表

No	銘文	分類	外径(cm)	内径(cm)	量目(g)	備考
1	寛永通寶	新寛永	2.45	0.6	2.9	鋳造期間1697～1747、1767～1781年
2	寛永通寶	古寛永	2.42	0.61	3.5	鋳造期間1636～1659年
3	寛永通寶	新寛永	2.28	0.63	2.2	鋳造期間1697～1747、1767～1781年
4	寛永通寶	新寛永	2.29	0.6	3.7	鋳造期間1697～1747、1767～1781年



第40図 15号土坑出土遺物

10号溝 [第42～44図]

位置 調査区中央 3 F・3 G - (-13) ~ (-18)、3 H ~ 3 P - (-12)、3 H + 3 I - (-13)、3 O - 3 R - (-11) 区

方向 調査区東側からほぼ西方向に進み、3 G - (-13) 区で北へ直角に曲がり直線的に延びる。

重複関係 遺構確認面からは重複関係はみられなかったが、土層断面から10号土坑の覆土を振り込んで構築されているため、本跡の方が新しい。3 P - (-11) 区で11号溝を掘り込んでいる。

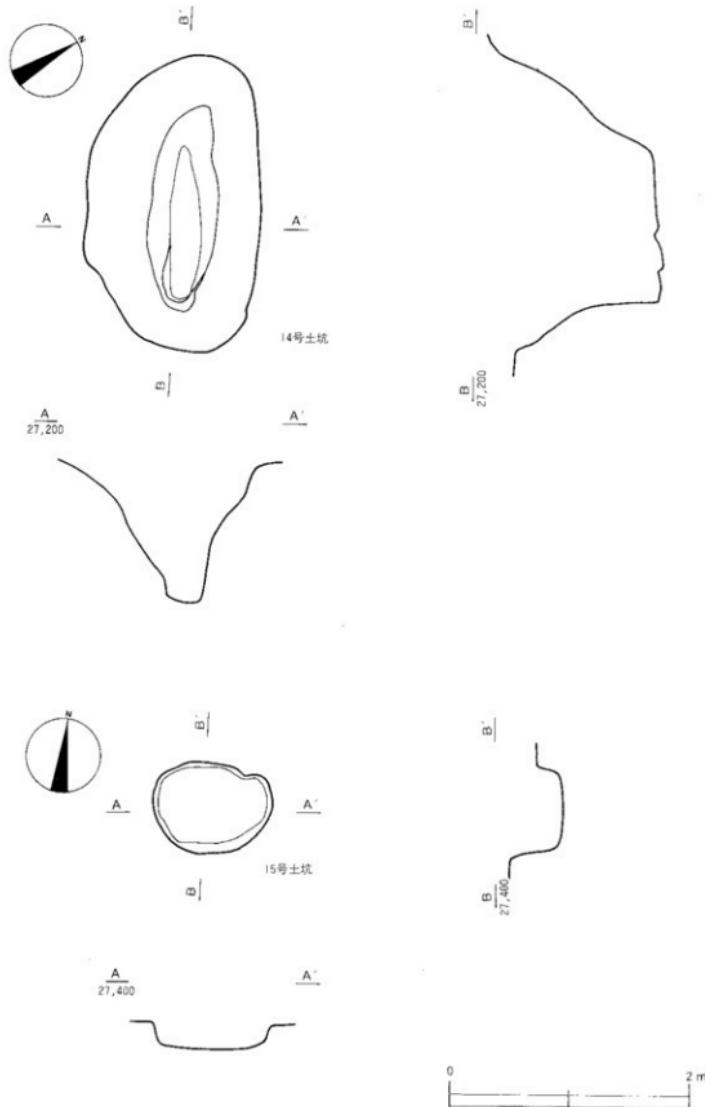
規模と形状 全長約67mでL字状を呈している。掘り方は上幅60～120cm、下幅16～46cm、深さ8～49cmで、断面観は東側でU字形、西側で箱型を示す。

覆土 下層はロームを多く含んでおり、人為的な埋土の可能性があるが、黒・暗褐色を主体とする上層は自然堆積であろう。

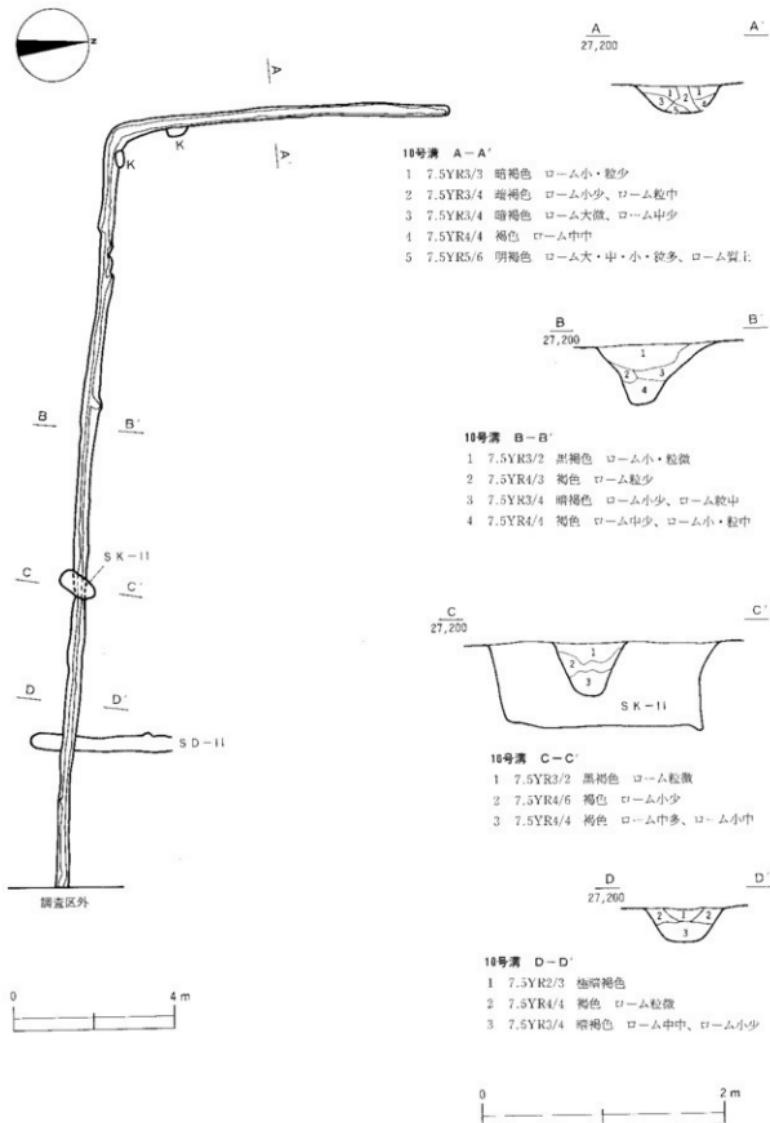
遺物 土師器（古墳時代）から、染付（近世）までの土器、陶磁器が出土したが、細片で中～上層からの出土であり、本跡と直接の関わりをもたない。また、溝の東側では馬の臼歯が数点出土した。

また、覆土中からは砥石片2点が出土した。14は流紋岩質軽石を使用したもので、一端に穿孔を施している。表面側は凸面状で、裏面は平坦になり、更に橢状砥面が3条連続している。下端面にも凸面状砥面と橢状砥面1条が複合している。穿孔部分で折損している。15は棹状砥石で、4面を砥面として使用している。両端は折損している。

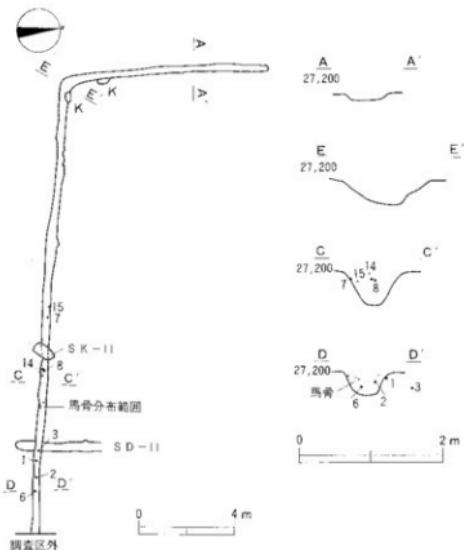
所見 本跡の正確な時期は不明だが、少なくとも近世・近代以降のものであろう。馬の臼歯の残り具合から遡っても100～200年程度と考える。溝の具体的な機能については不明である。



第41図 14号・15号土坑検出状況



第42図 10号溝検出状況

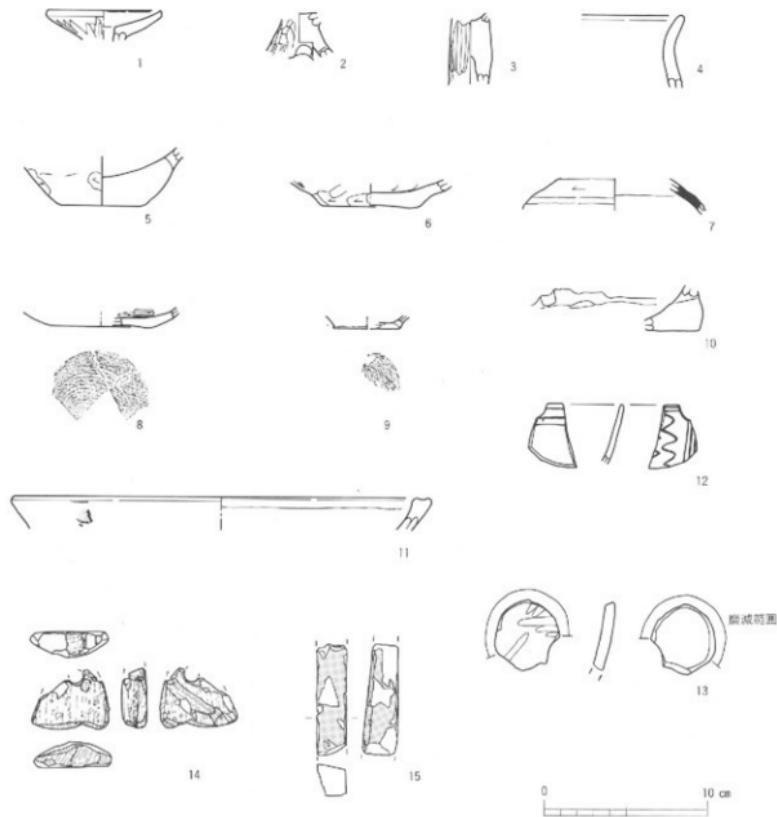


第43図 10号溝遺物出土状況

10号溝出土遺物観察表

No	器種 器形	法量(cm)	出土位置 存 在 線	焼成	胎 土	色 調	器形・技法の特徴	備 考
1	土師器 蓋合	A (7.1) C (1.8)	覆土上層 50%	良好	長石・石英 微量	橙色	内底面中央に穿孔された受部片。縁やか に立上り、基部は直立。内外面ヘラミガ キ。	古墳時代
2	土師器 高杯	C (1.8)	覆土上層 80%	普通	石英少量	に赤い褐色	椎部片。3ヶ所穿孔。外側は瓶底のヘラ ミガキ。	古墳時代
3	土師器 高杯	C (4.2)	覆土上層 80%	普通	石英少量	に赤い褐色	直立する瓶底片。外側は瓶底のヘラミガ キ。	古墳時代
4	土師器 蓋突瓶	C (3.0)	覆土中 5%	普通	長石・雲母 微量	に赤い褐色	「く」字に外反する口縁部片。外側赤色。 内側面ナデ調整。	古墳時代
5	土師器 蓋突瓶	B 3.8 C (2.0)	覆土中 80%	普通	長石少量 雲母微量	に赤い褐色	斜径に立ち上がる手底の底部片。内底面 ヘラナデ。体部ナデ。	古墳時代
6	土師器 蓋突瓶	B (5.0) C (1.4)	覆土中層 50%	普通	長石微量	橙色	平底の底部片。内外底面はヘラナデ調整。 体部底面よりは横位のナデが施設する。	古墳時代
7	須恵器 蓋	C (1.85)	覆土上層 10%	良好	長石少量	黄灰色	クロコ成形の体部。体部外側はヘラケズ リ。内面はナデ。	
8	土師器 内里杯	B (6.2) C (1.3)	覆土上層 60%	良好	良土	に赤い褐色	底部は圓錐系切り後に軽微なナデ。内底 面はヘラミガキの上。黒色処理。	奈良・平安時代
9	土師質土 器 小皿	B (4.1) C (0.75)	覆土中 10%	普通	雲母少量 赤色微量	に赤い褐色	底部回転糰切り痕。	中近世
10	土師質 上器 火鉢?	C (1.6)	覆土中 5%	普通	長石・青 色微量	に赤い褐色	平底で直立気味に立ち上がる底部片。体 部に1ヶ所穿孔あり。	中近世
11	土師質 土器 内耳鍋	A (26.0) C (2.95)	覆土中 5%	普通	長石・石英 微量	に赤い褐色	口唇部上端面に1条沈線をもつ口縁部 片。外側に攝付者。体部側は内側にすば まる。	中世

12	染付 縫	C (3.7)	質土中 5%	良好	精良	灰白色	外面は条痕の区画内に縱位の波状文、 内面は口唇部寄りに3条の条痕を配す。 る。	肥前系 近世
13	土製品	長さ4.0 幅3.8 厚さ0.6	質土中	普通	石英多量 長石少量	にふい黃棕 色	片面にヘラミガキ痕あり。破面が円周状 に磨滅し、内盤状を呈する。	土師器の転用か



第44図 10号溝出土遺物

10号溝出土石器観察表

No	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	備 考
14	砥 石	3.76	4.65	1.53	(3.7)	流紋岩質 砾石	穿孔痕1ヶ所、表面U字状溝3ヶ所が残る。
15	砥 石	(6.72)	1.87	2.09	(42.0)	凝灰岩	使用面4ヶ所。両端を折損。一面に刀傷あ り。

11号溝 [第45・46図]

位置 調査区東側 3 P - (-11) ~ (-15) 区

方向 3 P - (-11) 区から北に延び、調査区外に続く。

重複関係 3 P - (-11) 区で10号溝に掘り込まれていて、本跡の方が古い。

規模と形状 全長約15mで、掘り方は上幅88~108cm、下幅60~70cm、深さ16~20cmで箱掘形である。

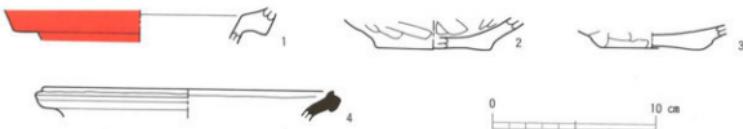
覆土 褐色または暗褐色相の土だが、ロームの含度が南北で異なり自然堆積とは断じえない。

遺物 土師器(古墳) や須恵器(奈良・平安)が下層から出土しているが、少量で細片であり、確実に本跡と伴うかは不明である。

所見 本跡の時代・機能については不明である。但しながら方向から判断して、本跡は北西原遺跡3次調査(平成7年度調査)の10号溝と連なるものである。

11号溝出土遺物観察表

No	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 壺	C (1.8)	覆土上層 15%	普通	長石・石英 多量	明赤褐色 に赤い褐色	段を生じ、斜め上方に開きながら減厚する口縁部片。内外面ナテ調整。外面赤褐色。	古墳時代
2	土師器 壺蓋類	B (7.0) C (1.7)	覆土下層 30%	普通	長石多量 石英微量	に赤い黄褐色	ヘラ調整の平底底部片。内底面・体部はヘラナデ。	古墳時代
3	土師器 壺蓋類	B (6.6) C (1.0)	覆土上層 15%	普通	長石多量 石英少量	に赤い赤褐色	ナテ調整の平底底部片。体部ヘラ調整。	古墳時代
4	須恵器 壺または 瓶	A (18.0) C (1.8)	覆土下層 5%	良好	長石少量 雲母・石英 微量	灰黄色 灰黃褐色	口唇部上端と下端に突起を有する口縁部片。ヨコナデ成形。	奈良・平安時代



第45図 11号溝出土遺物

13号溝 [第47図]

位置 調査区西側 3 F - (-6) ~ (-8)、3 D - (-11) ~ (-14)、3 C - (-14) ~ (-17)、3 E - (-7) ~ (-12) 区

方向 調査区南側の3 F - (-6) 区の落ち込みから北北西方向に直線的に延びている。

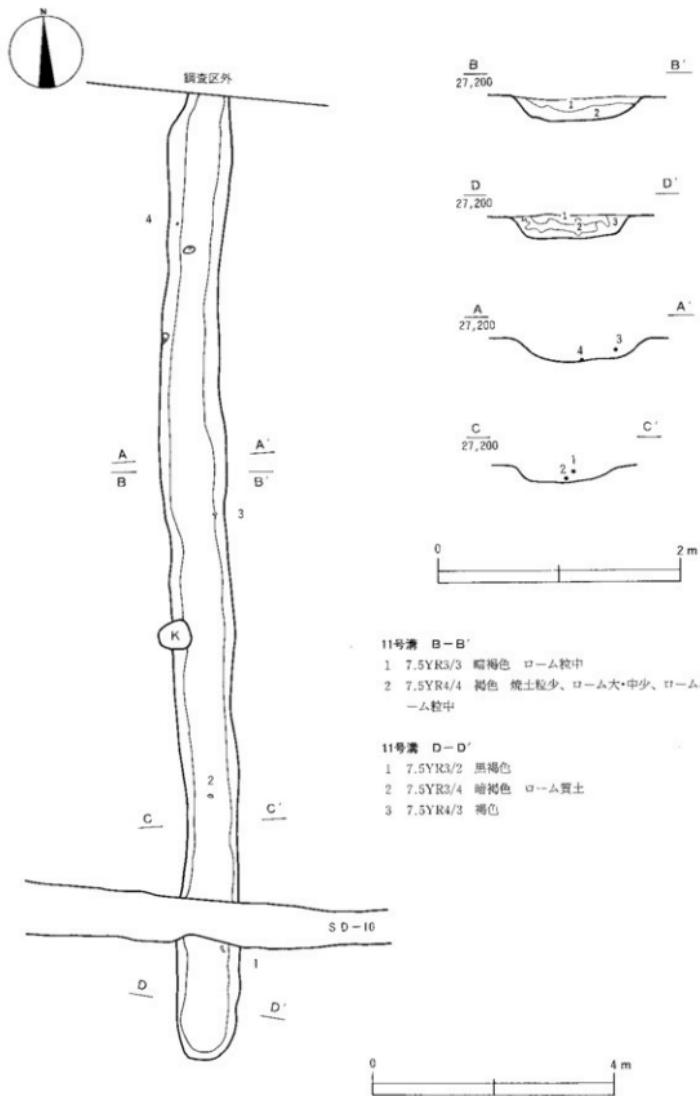
重複関係 造構確認面からは重複関係はみられなかったが、11号土坑の出土遺物との比較から本跡の方が新しい。

規模と形状 全長約44mで、掘り方断面は上幅101~120cm、下幅55~64cm、深さ18~33cmで逆台形である。南端に径1.2m、深さ45cmの円形の落ち込みがある。

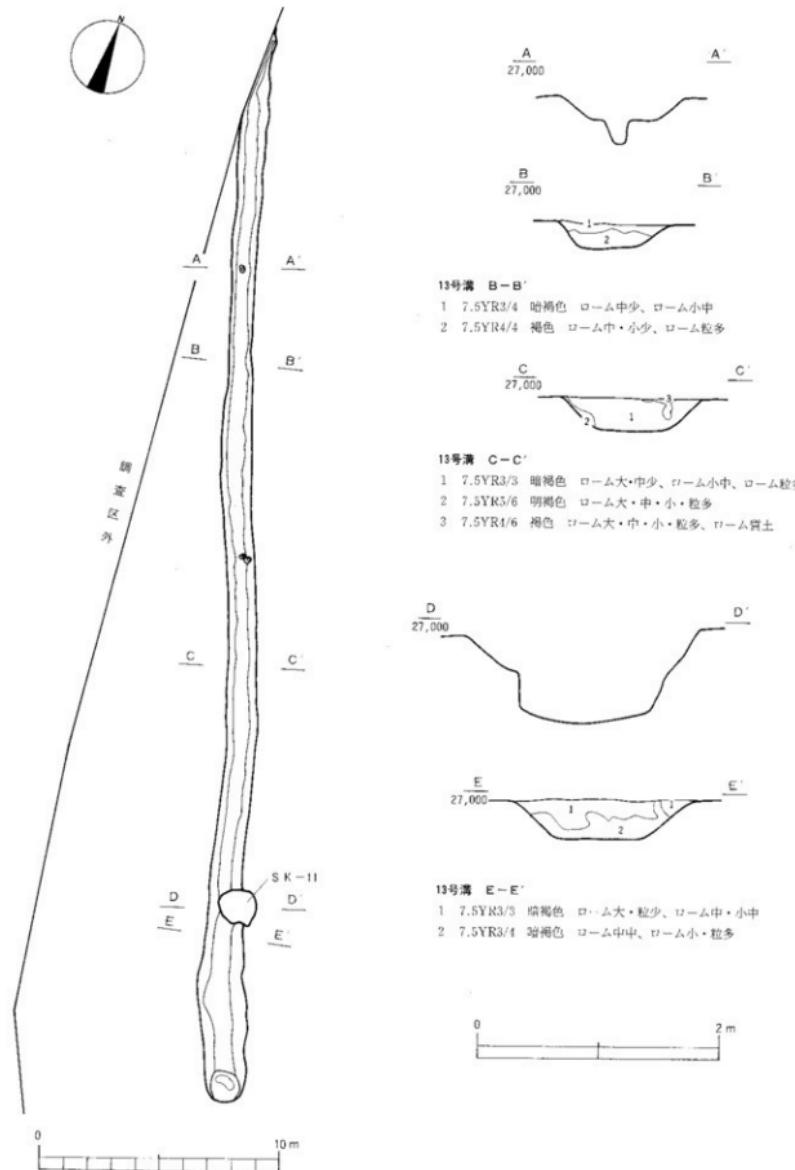
覆土 ローム粒を多く含む暗褐色相の埋土を中心とする自然堆積。

遺物 出土していない。

所見 溝の時期、具体的な役割は不明である。



第46図 11号溝検出状況



第47図 13号溝検出状況

2号墳 [第48・49図]

位置 本墳は、調査区域北側の3D-(-26)区を中心に確認された。その古地は、標高約27mの台地中央部に位置している。北側は北西原遺跡と接しており、本墳の北側は、北西原遺跡2次調査時の2号墳として既に調査済である。

主軸方位 N-18°-W

重複関係 15号土坑が本墳を掘り込んでおり、本墳の方が古い。

墳丘 調査時において当区域の現況は平坦な畑であり、墳丘は削平されていた。

周溝 重機による表土除去で遺構確認面が明らかになる過程で、本墳の周溝及び主体部の掘り方は、耕作と覺しき擾乱を受けていた。特に周溝の西側と東側は、底面まで擾乱を受けていたため、遺存状況は劣悪であった。

以上の状況のため一部推定値を含むが、周溝の形状は浅い隅丸の逆台形状であり、調査済の北側を含めると方形に廻っている。規模は外法で長辺(14.9)m、短辺(5.7)m~7.5m、下幅85cm、上幅175cm、深さ13cm~26cmである。断面形は周溝東側で皿形、南側では不明瞭な逆台形を呈している。周溝底面は、南側と西側は特に擾乱と思われる小孔が多く、凹凸している。

埋葬施設 埋葬施設も北側3分の1程の調査が既に終了している。規模は、周溝同様擾乱が著しいため推定だが、上端で長さ(5.7)m、幅2.05mである。なお、この数値は調査済の区域を含む。

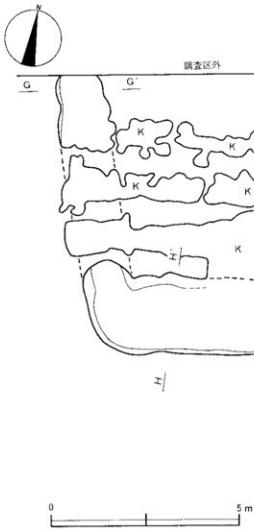
覆土 周溝・墓道とも、不均一な堆積状況で擾乱・破壊が著しい。

遺物 周溝・墓道内の覆土から若干の上師器・須恵器片が出土した。墓道の土師器(1・2)は底面寄りから出土しているが、古墳時代前期の遺物であり明らかに擾乱などによる混入遺物である。須恵器片(5・6)は奈良・平安期のものだが、墓に伴う可能性は低い。

所見 周溝・墓道の形状から、当遺構は終末期(7~8世紀代)の方墳であると判じられる。墓道・周溝は擾乱・破壊が著しい。

2号墳出土遺物観察表

No	器種 器形	法量	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 盤	A (18.7) C (2.65)	覆土下層 5%	普通	長石少量 石英微量	灰褐色	直立気味に立ち上がる口縁部片。外面は 縦條。内面は横稜のハケメ。口縁部ヨコ ナデ。	古墳時代前期
2	土師器 盤	C (2.4)	覆土中層 5%	普通	長石少量 石英微量	棕色	くの字形に彎曲する頸部片。外面の口縁 部寄りはハケメ、体部寄りはココナデ。 内面体部はハケメ。口縁部寄りはヨコナ デ。	古墳時代前期
3	土師器 盤	A (13.2) C (1.8)	覆土中層 5%	普通	真土	にぶい棕色	斜位から直立気味に立ち上がる口縁部 片。体部外側はミガキ。口縁部内面はヨ コナデ。	古墳時代
4	土師器 蓋置類	B 5.9 C (1.6)	覆土中層 90%	普通	長石・雲母・石英微量	にぶい棕色	中央がやや深む底の底部片。外側はヘ ラによるヨコナデ。内面はヘラミガキ。	
5	須恵器 蓋置類	C (3.6)	覆土中 5%	良好	長石・雲母 微量	暗灰黄色	外側に朱漆の叩き目をもつ胴部片。	奈良・平安時代
6	須恵器 杯	B (6.3) C 0.9	覆土中 5%	良好	雲母少量 石英・長石 微量	黄灰色	平底の底片。調整不明瞭。	奈良・平安時代

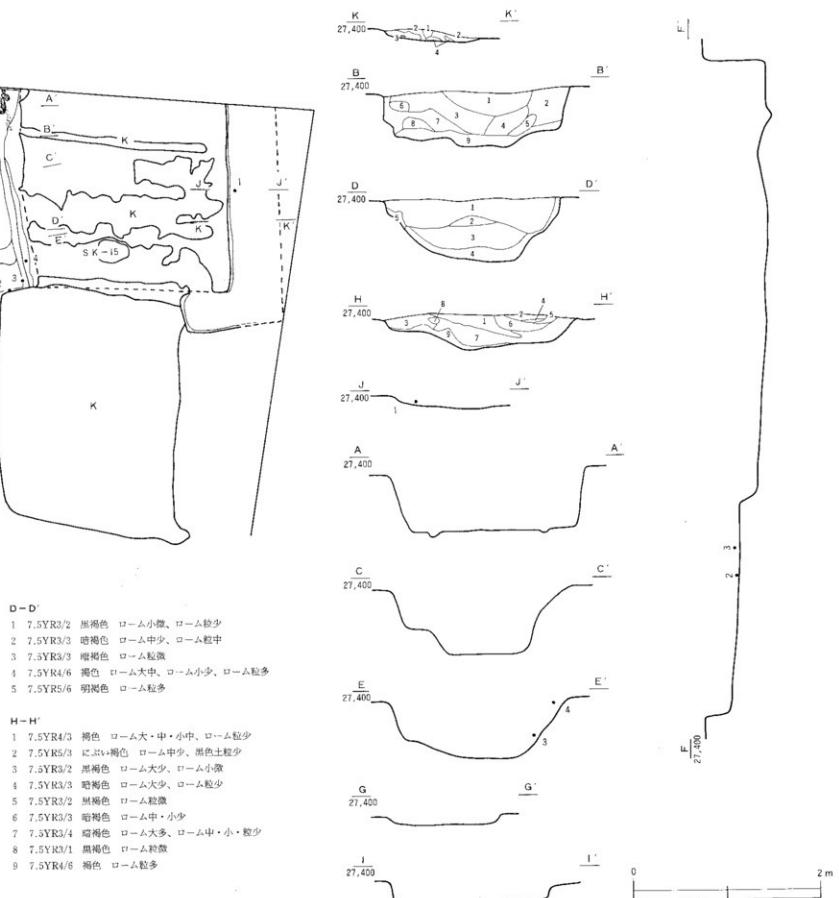


K-K'

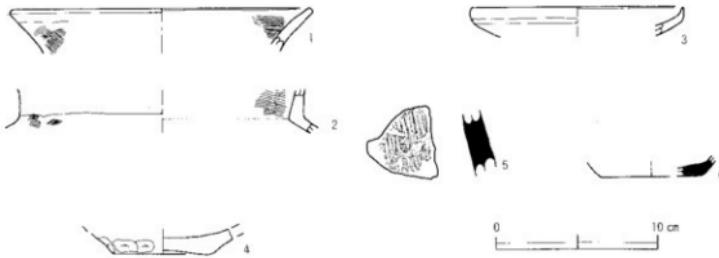
- 1 7.5YR2/2 黒褐色 ローム粒微
- 2 7.5YR3/2 暗褐色 ローム小、ローム粒少
- 3 7.5YR3/3 黒褐色 粒十粒少、ローム小微
- 4 7.5YR4/3 暗褐色 ローム粒中
- 5 7.5YR4/4 暗褐色 ローム粒中

B-B'

- 1 7.5YR4/3 暗褐色 ローム小、粒少
- 2 7.5YR2/3 暗褐色 ローム小、粒微
- 3 7.5YR3/2 黒褐色 粒十粒少、ローム小微
- 4 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小微
- 5 7.5YR4/6 暗褐色 ローム粒多
- 6 7.5YR2/3 暗褐色 ローム粒微
- 7 7.5YR4/4 暗褐色 ローム中・小少、ローム粒中
- 8 7.5YR3/2 黑褐色 ローム中・粒少
- 9 7.5YR5/6 明褐色 ローム大中、ローム小少、ローム粒多



第48図 2号墳検出状況



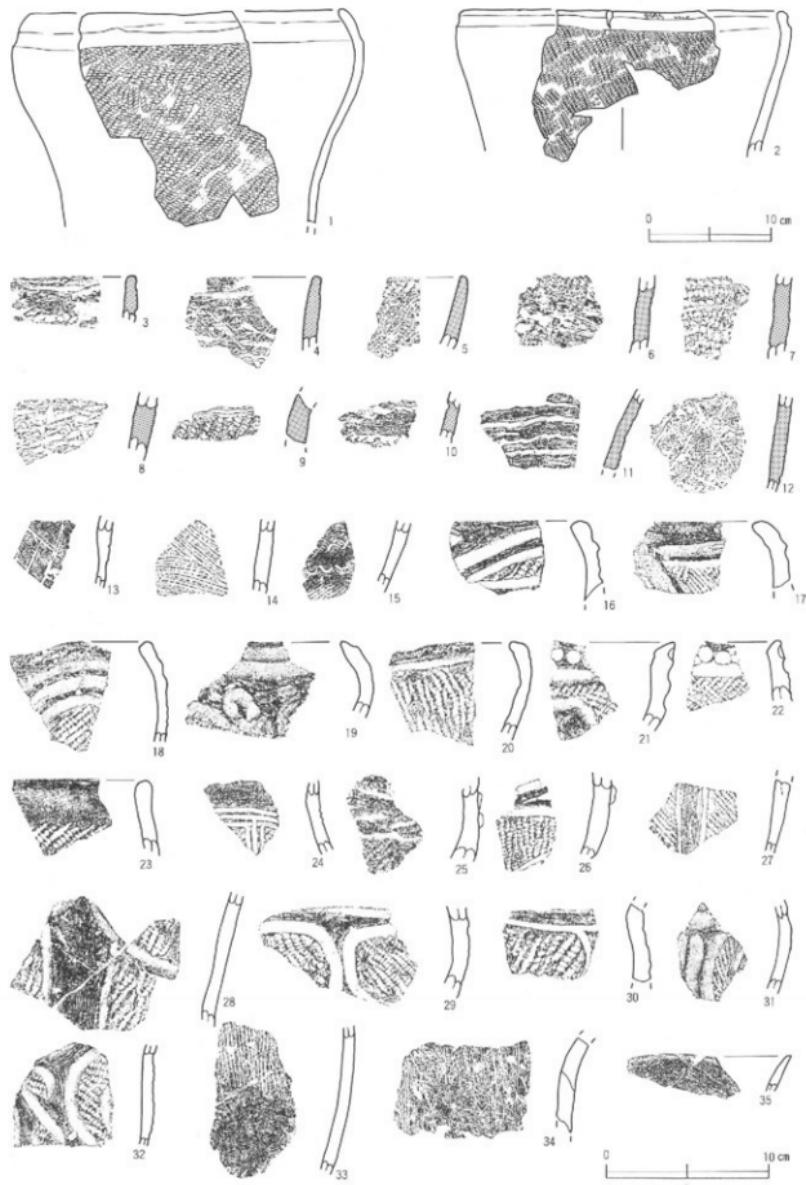
第49図 2号墳出土遺物

第3節 造構外出土遺物

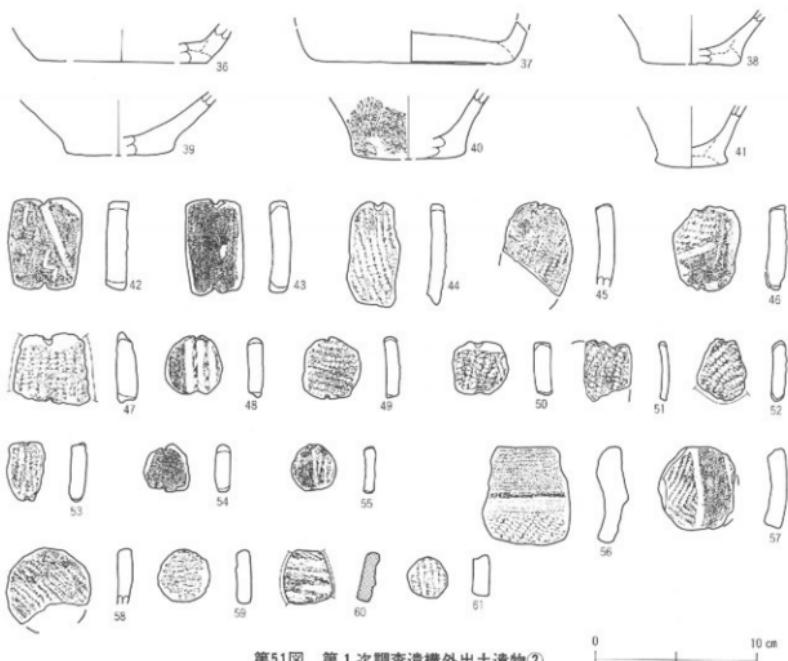
神明遺跡第1次・第2次の両調査では、プラスチック製コンテナ箱にして約23箱分の遺物が出土した。当節ではこのうち、造構に伴わない出土遺物を、調査区毎に、縄文土器・石器・その他の遺物に分けて報告する。

①第1次調査区出土の縄文土器 [第50・51図]

ここでは表採、グリッド中及び他時期の造構費土中より出土した縄文土器をまとめて造構外遺物として扱うこととする。29・30を除き全て深鉢である。1は平線で推定径26.0cm、口縁下に最大径を有する。口縁に沿って沈線状に浅く凹ませ微隆起線文を作り出している。下半は単節LRが施文されていた。2は平線で推定径26.4cm、あまりくびれない器形である。地文0段多条RL、口縁に沿って沈線が1条巡り、この上を磨いて狭い無文帯とするが、一部縄文が残っている。ともに中期後半加曾利EIV式に相当しよう。3~12は胎土に纖維の混入が見られる一群である。3・4は波状線で3は口縁に沿い一部途切れる沈線が巡り、下半は押引沈線が見られた。4は不規則な押引沈線・コンパス文が描かれる。5は平線で単節LRと異節縄文か。6は器面が荒れ判全としないが単節LRか。7は単節LR、8は無節RLが押圧されていた。9は0段多条LRで上方に弧のゆるいコンパス文、10は幅の狭いコンパス文が描かれている。11は地文無文、多段の押引沈線文が横位に巡り、一部弧状を呈している。12・13は斜沈線による格子目文でいずれも左上・右下→右上・左下方向へと施文される。これらは前期前半広義の黒浜式に相当しよう。14は地文単節LRか、この上から半截竹管状工具による曲線文が空白部なく描かれる。前期後半諸磽b式に相当しよう。15は単節LRの結節縄文が2段見られる。前期末葉から中期初頭に相当しよう。16は平線で隆帶文とこれに沿う沈線により区画文が描かれ、区画内は単節LRが充填される。外面に炭化物が付着していた。17は平線で両側が沈線状に凹む微隆起線文により曲線文が描かれる。縄文は単節LRと0段多条LRの二種が用いられていた。18は波状線で2条の微隆起線文による曲線文、曲線文内は0段多条RLである。19は平線で口縁に沿い両側がなでられる微隆起線文が1条巡っている。縄文ではなく、下半は「匂」状の単位文と曲線的沈線文が描かれていた。20は波状線で、水平に沈線が1条巡っている。下半は0段多条RLが施文されていた。



第50図 第1次調査遺構外出土遺物①



第51図 第1次調査遺構外出土遺物②

21・22は波状線である。ともに口縁部に水平に幅の広い沈線文が巡り、沈線上方には円形刺突が連続していた。0段多条LRが施文され、21は沈線による曲線文と無文部が見られた。23は平縁で口縁沿いをなでて無文帯とし、下半は0段多条LRが施文されていた。24は上半無文で下半は沈線による直線的な区画文が描かれる。地文は単節RLで内面に炭化物が付着していた。25・26は隆帯による区画文で25は下半單節RLか。26は地文単節RLで曲線的な沈線文が描かれている。27は垂下沈線文で単節LRと無文帯が交互に施文されている。28は沈線による連弧状文と垂下文が描かれ、0段多条RLと無文帯が交互に見られる。29・30は壺もしくは鉢形上器。29は上端に沈線が1条巡り、下半は0段多条LRが充填される楕円形区画文が描かれる。30は屈曲部に沈線が2条巡り、下半は区画文か、単節RL。31は両側が幅広くなだらかの微隆起線文による区画文で、0段多条LRが充填されていた。32は沈線による区画文で一部歓手状となる。0段多条LRが充填される。33・34は条線文である。33は4～5条1単位で垂下し、下半は無文となる。34は垂下させた後、一部横位に施文していた。16・24～26は加曾利E II式、27～30はIII式、その他はIV式に相当しよう。35は平縁で無文、斜方向に磨かれており、器壁は薄手である。後期と思われる。

36～41は底部である。40を除き全て無文であった。36は推定径10.5cm、37は径12.4cmで上げ底、底面と外面は磨かれていた。38は推定径6.2cm、底面と底部直上は磨かれている。39は径6.5cm、40は推定径7.0cm、41は径4.5cmでともに底面が凸レンズ状を呈している。39は外面横なで、40は4条1単位

の条線文が垂下し、下半は無文、41は底面が磨かれていた。40は中期後半加曾利E III~IV式に相当しよう。

42~61は土製品である。42~55は上縫で完形が多い。形状も方形・楕円形・円形とさまざま見られた。56~61は十製円盤である。56・60は隅丸方形、他は円形である。

第1次調査遺構外出土土製品観察表

No	名称	残存 大きさ (cm)	重量 (g)	整形	文様・その他	時期
42	土縫 完形	5.5×4.5	43.2	全周割り	手下・蛇行沈線文、深い切り目1対、方形	加曾利E田式
43	土縫 完形	5.8×3.6	31.5	全周割り	口縁部、沈線文、切り目1対、方形	中期後半
44	土縫 一部欠	6.2×3.1	(22.6)	全周割り	0段多条LR、切り目1対	不明
45	土縫 2/3	(5.7)×4.4	(27.8)	全周割り	附加帶? 切り目1ヶ	不明
46	土縫 一部欠	5.2×4.1	(25.5)	全周割り	0段多条RL、鈍消沈線文、切り目1対	加曾利E田式
47	土縫 完形	4.4×4.8	31.2	一部割り	0段多条RL、切り目1対、方形	不明
48	土縫 完形	3.6×3.6	16.0	全周割り	地文模文、3条の沈線文、切り目1対、円形	中期後半
49	土縫 完形	3.7×3.6	14.7	全周割り	平頭RL、切り目1対	不明
50	土縫 完形	3.2×3.4	13.9	全周割り	地文模文LR、沈線文、切り目1対	加曾利E田式
51	土縫 1/4	(3.7)×2.9	(6.1)	全周割り	平頭LR、切り目1ヶ、両手	不明
52	土縫 完形	3.8×3.1	10.4	一部割り	単部RL、切り目1対	不明
53	土縫 完形	3.6×2.2	10.3	全周割り	平頭RL、切り目1対	不明
54	土縫 完形	3.0×2.8	9.5	全周割り	浅い条線文、切り目1対	中期後半
55	土縫 完形	2.8×2.8	6.8	全周割り	条線文、切り目1対、円形	中期後半
56	十製円盤 完形	6.0×5.3	58.3	全周割り	口縁部、微隆起線文、0段多条RL、方形	加曾利E IV式
57	土製円盤 一部欠	5.1×(4.7)	(29.4)	全周割り	0段多条RL、羽状、鈍消沈線文	加曾利E IV式
58	十製円盤 3/4	(1.6)×5.2	(22.4)	全周割り	丁寧な割り、0段多条LR、沈線文	加曾利E IV式
59	土製円盤 完形	3.3×3.1	12.0	全周割り	条線文	中期後半
60	十製円盤 完形	3.2×2.8	10.0	一部割り	地文押す? 繊維混入	中期前半
61	土製円盤 完形	2.5×2.5	7.8	全周割り	0段多条LR	不明

②第1次調査区出土の石器 [第52図]

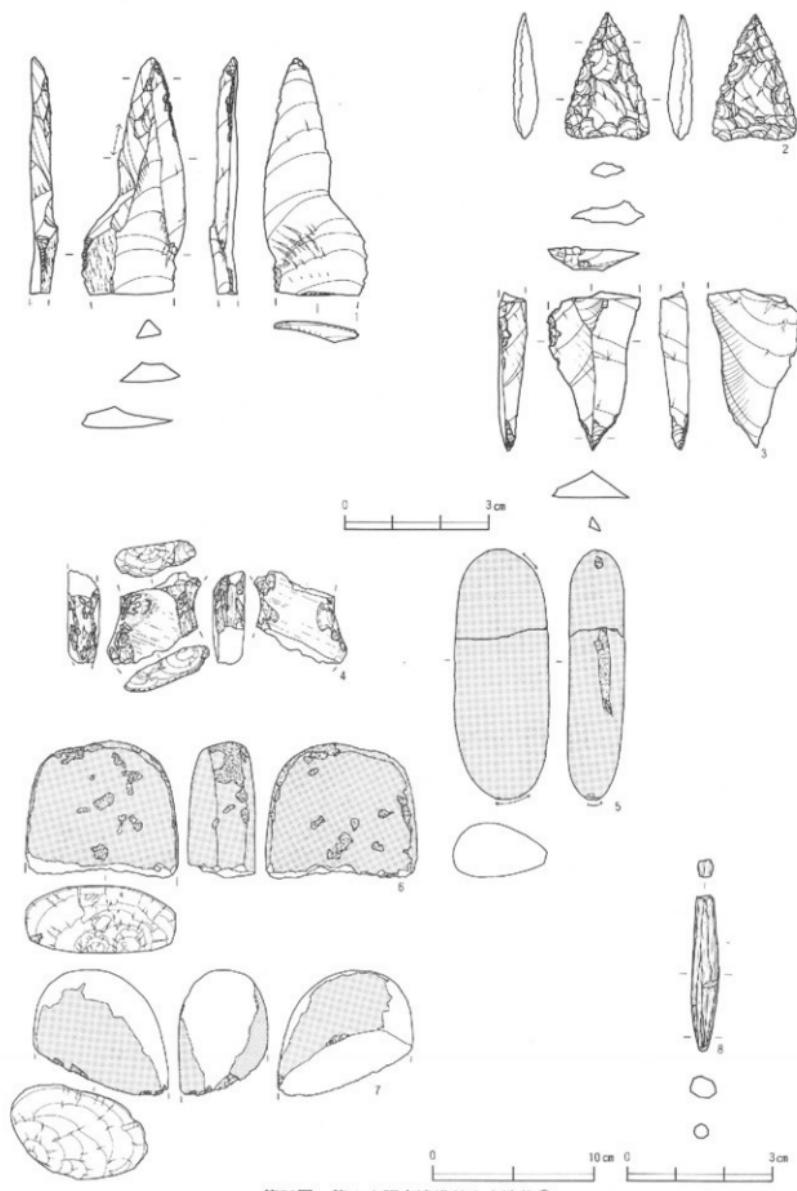
表採・グリッド・擾乱中より出土した石器・石製品を遺構外として扱う。総数23点で器種構成はナイフ形石器ー1点、石鎚ー1点、石錐ー1点、打製石斧ー1点、磨石類ー6点、砥石ー3点、剥片ー9点、石製品ー1点でうち8点を図示した。

1はナイフ形石器である。褐色の硬質頁岩製で縦長剥片を素材とする。両側縁の一部に短い範囲で急斜度削離による調整加工を施してはいるが、全体に素材形状保持型の成形となっている。刃部の一部に微細削離が点在している。打面を基部側に用いたが、その基部側は背面側からの方により折損している。

2は石鎚である。器体中央の両面に旧素材剥離面を残す程度に周縁部に調整加工を施している。基部内側の抉り加工は浅く、全体として二等辺三角形の形状である。旧素材剥離面の剥離方向からみると、打面は固定していない。

3は石錐である。 180° の打面転移を経過した石核から生じた縦長剥片を素材とする。末端部に調整加工を施し錐部を形成している。右側縁の一部に調整削離を施し、方珪石の結晶部から折損している。

4は打製石斧である。両側縁から抉り加工を施し、分銅形とする。両面とも線状痕を残す研磨面により平坦化し、抉り部を中心として調整削離面の「研ぎ残し」が認められる。上下刃部は折損。



第52図 第1次調査遺構外出土遺物③

5～7は磨石類である。5は異なる溝から出土した接合資料で扁平な棒状砾を使用している。両端部に敲打痕を有し、側縁の一部には線状痕と敲打痕が重複する細長い範囲が認められた。6は表面が山形、裏面は扁平となり、両面とも研磨されている。側縁全体は敲打され、両面にも集中敲打が認められる。器体中央付近でネガティブバルブを生じる折損を起こしている。7は両面を研磨に使用、側縁は大半が剥落している。

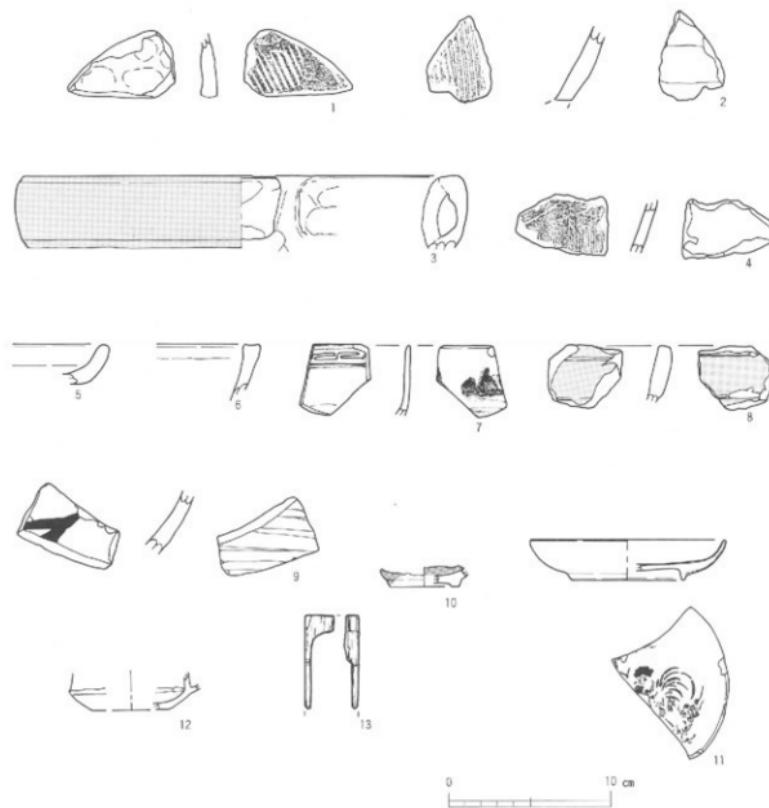
8は針状石製品である。全体を長軸方向に平行する研磨面で覆い、一端をさらに細く、もう一端は平坦に研磨している。「石筆」に類似する。灰白色の蛇紋岩製。

第1次調査遺構外出土石器観察表

No	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	ナイフ 形石器	(4.88)	2.09	0.46	(3.6)	珪質頁岩	2ヶ所にリタッチ。打面側を折損(背・櫛)。
2	石礫	2.62	1.74	0.49	1.9	黒色安山岩	無柄、敲打跡。
3	石錐	(3.27)	1.90	0.59	(2.3)	黒曜石	打面側は同時に丸。
4	打製石 斧	(6.48)	(5.35)	(1.92)	(69.0)	角閃石安山岩	分銅形。扁平面を素材に両端に二次加工。刃部折損。
5	磨石類	15.47	5.85	3.38	503.0	角閃石安山岩	接合資料。片側縁に平坦面。
6	磨石類	(7.94)	(9.36)	(4.20)	(540.0)	角閃石安山岩	両面研磨。側縁敲打。一部赤化。
7	磨石類	(8.31)	(8.29)	(5.48)	(382.0)	砂岩	両面研磨。側縁剥落。
8	針状石 製品	3.24	0.55	0.47	1.3	蛇紋岩	長軸方向に研磨。縫が残る。片側丸る。

③第1次調査区出土のその他の遺物 [第53図]

表土中または攪乱中で出土した遺物のうち、主なものを図・観察表化して以下に挙げる。時代的には江戸時代以降の陶磁器が散出する。



第53図 第1次調査遺構外出土遺物④

第1次調査遺構外出土遺物観察表

No	種類 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 土	色 調	器形・技法の特徴	備 考
1	陶器 甕	C (3.9)	擾乱中 5%	良好	石英微量	極暗赤褐色 灰白色	肩部寄りの体部片。外面に条縞群の叩き 口をもつ。内面指痕。	常滑窯産 中世
2	陶器 すり鉢	C (3.8)	擾乱中 5%	良好	長石・石英 少量	明赤褐色	底部との接合部に当たる体部片。5条以 上を1単位とする御目を内側にもつ。	近世
3	土師質 土器 内耳鍋	A (27.0) C (4.4)	擾乱中 5%	良好	長石多量 石英少量 雲母微量	橙色	耳をもつ口縁部片。外面媒付着。耳は5 ~7"右に傾く。接合部は、指痕痕が重 複する。	中世
4	土師質 土器 すり鉢	C (3.2)	表土 5%	良好	長石・石英 少量 赤色 粒微量	橙色	体部片。内側に7条以上を1単位にした 御目。外面ナデ。	中世
5	土師質 土器 焰格	C (2.4)	擾乱中 5%	良好	長石・赤色 粒少量	にほい赤褐色	ゆるやかに立ち上がる口縁部片。内外面 ナデ。	近世
6	土師質 土器 内耳鍋	C (2.8)	擾乱中 5%	良好	長石・雲母 微量	にほい赤褐色	LH斜上端にへこみをもつ口縁部片。内外 面ナデ。	中世
7	染付 碗	C (4.3)	表土 20%	良好	釉良	明緑灰色 白色	額高形碗。外面に山状の文様、内面口縁 寄りに露文を施す。	肥前系 近世
8	陶器 すり鉢	C (3.5)	表土 5%	良好	良土	にほい赤褐色	内外面に精耕を施した口縁部片。内外面 口沿部寄りに1条の沈線を持つ。	瀬戸美濃系
9	陶器 鏡頭頸	C (3.6)	表土 5%	良好	褐色粒微量	灰白色 浅青色	クロコ成形。内外面施釉。内面に褐鉄顔 料による文様(不明)あり。	瀬戸美濃系
10	陶器 大皿	B (4.5) C (0.8)	擾乱中 30%	良好	良土	黒褐色 淡青色	輪高台をもつ底部片。盤は内面と外向、 一部高台にも付着。体部と高台間に沈線。	瀬戸美濃系
11	磁器 高台付皿	A (12.2) B 2.4 C (7.2)	表土 30%	精良	良土	綠色 灰白色	口縁部は緩やかに立ち上がる。内面見込 みにニワトリと梅がプリント印刷される。	肥前系 明治以降
12	陶器 灯明皿	B (4.8) C (2.3)	表土 10%	良好	良土	暗赤色 灰褐色	平底の底部から低く立上り、張出し部か ら直立する。内面と外周張出し部に褐色 釉。	

No	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	備 考
13	鏡	(5.67)	(8.1)	(17.7)	(5.4)	粘 板 石	擾乱中から出土。1号溝出土の破片と検合。

④第2次調査区出土の縄文土器 [第54図]

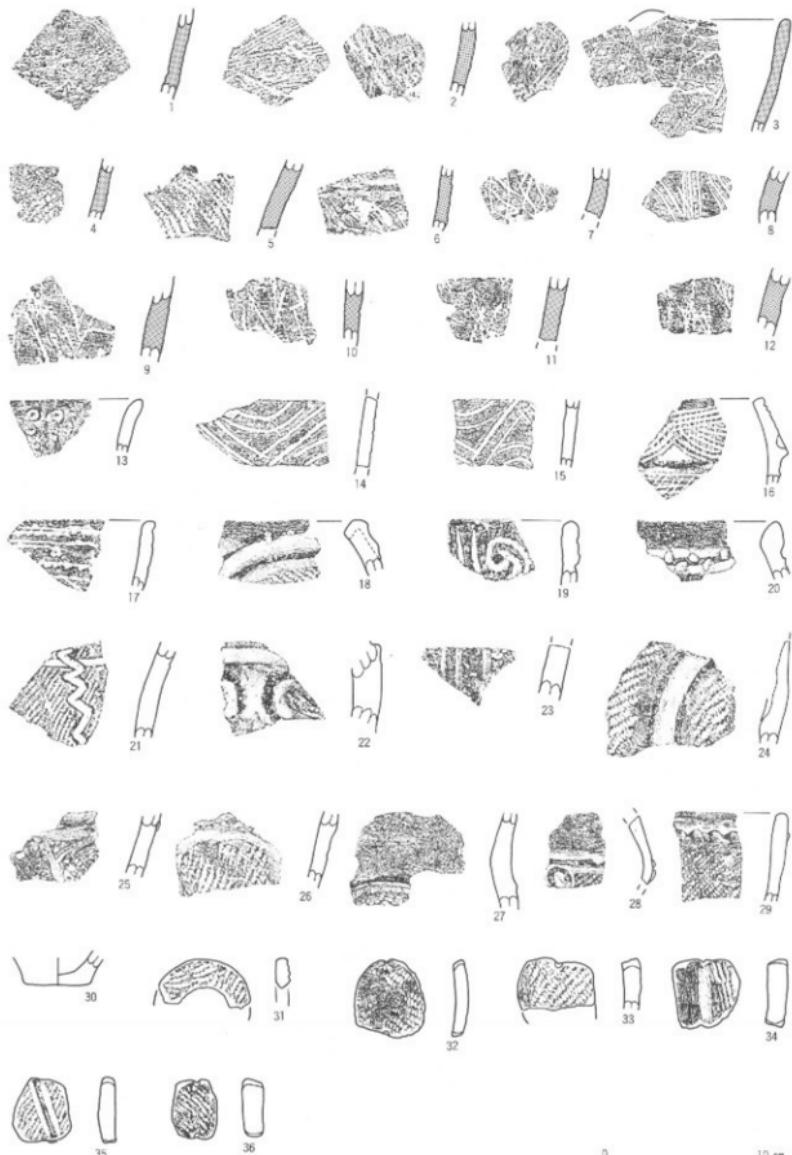
ここでは表採、グリッド中及び他時期の遺構覆土中より出土した縄文土器をまとめて遺構外遺物として扱うこととする。27・28を除き全て深鉢であった。1・2は内外面ともに斜位条痕文が施文される。胎土中には纖維を混入し、1は石英も多量に見られた。早期後半に相当しよう。3~12は胎土中に纖維の混入が見られる。3は波状線で波頂部は欠損している。無節L Tを一部回転、格子目状に押圧している。4は異節縄文か。5・6は0段多条RLと思われる。7はTの押圧か。不規則な格子目状を呈している。8は半截竹管状工具による垂下・斜位沈線文。9~12はアナグラ風系貝類腹縫による波状文。これらは前期前半広義の黒浜式に相当しよう。13は平縁で巻き貝の押圧か。14・15は半截竹管状工具による斜行文と弧線文が描かれている。いずれも前期後半浮島I式に相当しよう。16は波状線で集合沈線による横線・弧線文が描かれ、縦位の集合沈線により細かな格子目状区画が作られている。屈曲部下も同様で、屈曲上部は弧線間に三角形彫刻文が見られる。前期末葉十三善塙式に相当しよう。17は平縁でおそらく区画となる平行沈線文間に刺突が連続し、一部押引沈線文が描かれ。中期前半阿玉台Ia式に相当しよう。18は平縁で微隆起線文とこれに沿う沈線文で曲線文が描かれ。單節RLが充填されていた。19は平縁で器面が荒れているが地文は無文、垂下沈線文と渦巻文が描かれる。20は波状線で口縁に沿い沈線が2条巡り、沈線上には楕円形の交差刺突が連続する。21は地文0段多条LRで横位沈線文の後、蛇行する沈線文を垂下させる。22は上方横位沈線文が巡り、降帶文による楕円形区画内に単節RLを充填している。23は数条の平行沈線文が垂下し、縄文の磨消を交互に行なうが、器面が荒れており原体不明。24は2条の微隆起線文による曲線文、0段多条RLである。25は上半両側がなでられる微隆起線文で下半は沈線による曲線文内に単節RLが施文されている。26は対向する「U」状沈線文か。区画内に0段多条LRが施文される。27・28は豪もしくは鉢形土器で27は上半無文、微隆起線文による楕円形区画文が描かれる。区画内は0段多条LRが充填されていた。28は屈曲部上半無文、境には横位降帶文が巡り、下半は単節LRで扁平な円形貼付文が付されていた。21・22は中期後半加曾利E II式、23はIII式、他はIV式に相当しよう。29は平縁で口縁下指頭押圧により小波状を呈する降帶文が1条巡り、下半は単節LRが施文される。口縁部裏面に沈線が1条巡っていた。後期前半の粗製土器に相当しよう。

30は底部である。径4.2cm、無文で外面は磨かれていた。時期不明。

31~36は土製品である。31は有孔円盤で両側より穿孔されていた。32~36は土錘である。34は口縁部片の再利用、いずれも周縁が削られ、形状が整えられていた。

第2次調査遺構外出土土製品観察表

%	名稱	残存	大きさ (cm)	重量 (g)	整形	文様・その他	時期
31	有孔円盤	1/3	(3.1) × (5.6)	(12.9)	金剛磨り	丁寧な磨り、単節RL、孔縁は残存幅の1.5倍	不明
32	土錘 完 形		4.8 × 4.4	21.4	全周磨り	単節RL、切り目1対	不明
33	土錘	1/2	(3.3) × 4.9	(20.4)	全周磨り	0段多条LR、磨酒、切り目1ヶ	加曾利E IV式
34	土錘 完 形		4.3 × 4.2	22.7	全周磨り	口縁部、沈線文、単節LR、切り目1対	加曾利E IV式
35	土錘 一部欠		3.9 × 3.6	(18.1)	全周磨り	0段多条RL、磨酒沈線文、切り目1対	加曾利E III式
36	土錘 完 形		3.7 × 2.8	17.9	全周磨り	0段多条LR	不明



第54図 第2次調査遺構外出土遺物①

⑤第2次調査区出土の石器　【第55図】

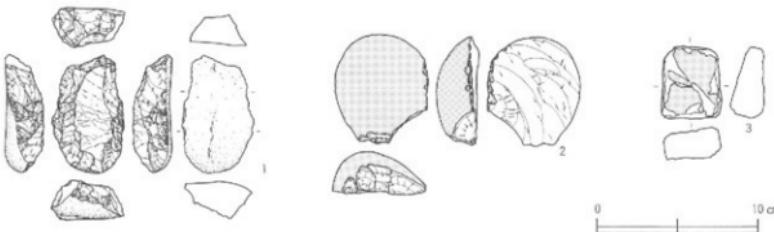
表採・擾乱中より出土した石器・石製品をここで扱う。総数14点で器種構成は二次加工石器－3点、剥片－6点、砥石－4点、硯－1点でうち3点を図示した。

1・2は二次加工石器である。1は縦長剥片を使用して片面にのみ調整加工を加えている。打製石斧の刃部に相当する位置に調整加工がなく、側縁に対して剥離角70～85°の急斜度剥離による調整加工を集中させ、「潰し」加工を施さない点から打製石斧とはしなかった。2は梢円形を呈すると思われる。正面は凸状の全面研磨面で本来は磨石類の剥片だったと考えられる。主要剥離面側の片側縁に連続する調整加工が施されるが稜線の大半は摩滅している。旧研磨面は被熱により赤化していた。

3は砥石である。砥面2面、線状痕の残る平坦面が3面認められた。

第2次調査遺構外出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	二次加工石器	7.26	4.43	2.20	75.0	流紋岩	片面のみ周縁加工。芯理面で分割した剥片
2	二次加工石器	6.69	5.67	2.44	112.0	砂岩	稜片の一部に調整加工。後赤済減。被熱による赤化。
3	砥石	4.43	3.70	2.16	51.0	凝灰岩	砥面2面、折削面3面。



第55図 第2次調査遺構外出土遺物②

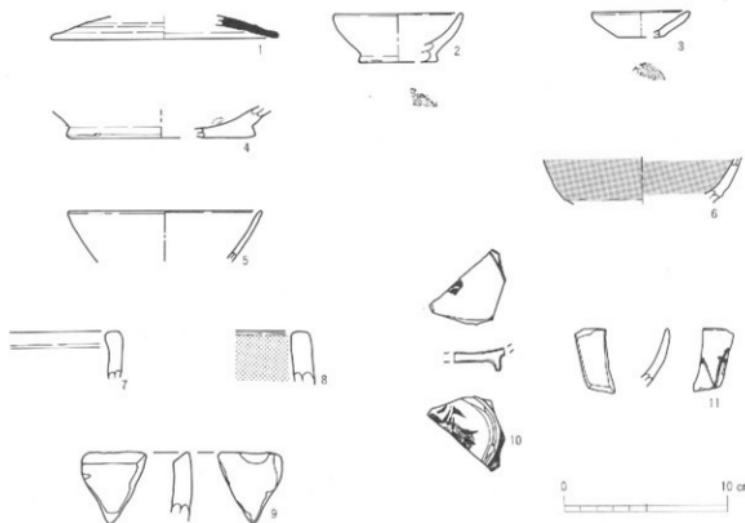
⑥第2次調査区出土のその他の遺物　【第56図】

表土中または擾乱中で出土した遺物のうち、主なものを図・観察表化して以下に挙げる。

第2次調査遺構外出土遺物観察表

版No.	器種 形態	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	粘土	色調	型形・技法の特徴	備考
1	須志器 差?	A [14.0] C [1.0]	表土 5%	不良	雲母多量 長石微量	において褐色	ロクロ成形による口縁部。内外面ココナチ。端部はやや肥厚する。	技法から須志器と判斷
2	土師質 上器 小皿	A [8.0] B [4.6] C 3.0	表土 10%	普通	長石微量	において黄褐色	底部回転糸切り瓶。わずかに直立した後、湯斗状に大きく立ち上がる。	近世か
3	土師質 上器 小皿	A [6.1] B [2.8] C 1.55	擾乱 10%	普通	真土	において橙色	底部回転糸切り瓶。斜め上方に立ち上がる。破片後に被熱して赤色变成する。	
4	磁器 碗皿類	B [11.7] C [1.65]	表土 10%	良好	暗良	青灰色 灰褐色	底部底ノ目凹型高台。内面に砂目底あり。	

5	土師器 壠?	A (12.1) C (3.1)	擾乱 5 %	普通	長石・石英 多量	に赤い赤褐色	立上りは直立気味の口縁部片。内外面赤 彩。口縁部の一部黒色化。	
6	陶器 天目	C (2.8)	表土 10%	良好	良土	黒色 に赤 い黄褐色	底部寄りの全体部。外面の僅は接部まで 施される。	瀬戸美濃系
7	土師質 上器 焰燒?	C (3.1)	表土 5 %	良好	長石微量 雲母少量	に赤い褐色	内外面ナテ。口縁部内面はやや肥厚する。	
8	瓦質土器 火合?	C (3.3)	表土 5 %	普通	長石・赤色 粘微量	黒色 に赤 い褐色	表面は赤。いぶしをかけられる。直立し て、端部は削取られる口縁部片。	
9	土師質 土器 火合?	C (3.3)	表土 5 %	普通	良土	に赤い赤褐色	やや直立気味に立上り、端部は削取られ る口縁部片。内外面ナテ。	
10	染付 碗型類	C (1.4)	擾亂 25%	良好	精良	明青灰色 白色	見込みに印判文をもつ。蓋付け以外は皆 施釉される。外底面に花状の支焼を認ぐ。	肥前系 18世紀代
11	染付 碗	C (3.5)	表土 5 %	良好	精良	灰白色	直立気味に立ち上がる口縁部片。外面に 文様(不明)あり。	肥前系 18~19世紀



第56図 第2次調査造構外出土遺物③

第4章 結語

今年度の常名台の発掘調査は、縄文時代の造構が主体を占める。縄文時代中期後半の加曾利式期を中心とするムラが、台地中央を中心にして営まれていたのだろう。過去の常名台全体の傾向を省みると、縄文期の造構の検出例は少なく、主体的な位置を占めるものではない。

今回の調査では、溝が合計12条発見された。これらの溝は、そのほとんどが縄文時代と具体的な用途を明らかにしえない。溝は、水はけのよいローム層中に掘り込まれているため、排水の機能はあつたかもしれないが、取水とその維持は不可能に近い。台地上では水稻栽培よりも畑作が主体であることから、用水堀的な可能性は低いと思われる。また、集落を囲う「堀」的なものである場合、5号・1号以外の溝は、毛抜き彫りのような非常に浅いものばかりで、とても防御に役立つものではない。溝の中には、途切れたり、屈曲したり、形状が一定しないものさえある。

現在、強いてこの溝群を解釈すると、何かを区画する境界的な目的で掘られたものではないかと考える。溝の深度が浅いという点からは、個人または小規模な集団の手によるものかもしれない。しかしその根拠は、他の目的や規模には該当し難いという点だけであり、消極的な理由でしかない。

土坑群も、出土遺物に乏しいため時期不明のものが大半で、用途も分からぬものが多い。

造構の密度については、北西原遺跡第1・2次調査の如く、台地の縁辺部に従って、豊穴住居の数が増加する可能性が高い。その反面では当調査のように、台地中央部にゆくに従って、土坑・溝が主体となる。遺跡全体からすると、居住的な造構は縁辺部が多く、それ以外の用途をもつ造構は台地中央に多い傾向が想定できるだろう。

最後に、この発掘調査と整理作業には、とても多くの方の御協力や励ましを頂きました。一人一人芳名を記すことはかないませんが、御厚意を賜った方々に衷心より御礼を申し上げます。(橋場君男)

参考文献 (敬称略、50音順)

- | | |
|------------------------|---|
| 茨城大学人文学部史学第6研究室 (茂木雅博) | 1984 「土浦の遺跡－埋蔵文化財包蔵地－」 土浦市教育委員会 |
| 通商産業省工業技術院地質調査所 | 1988 「特殊地質図 23-2 筑波研究学園都市及び周辺地域の環境地質図」 |
| 筑波古地域研究グループ (代表 増田精一) | 1982 「筑波古代地域史の研究 昭和54～56年度 文部省特定研究費による調査研究概要」 筑波大学 |
| 土浦市遺跡調査会 (黒澤春彦) | 1991 「土浦市八幡下遺跡発掘調査報告書」 土浦市教育委員会 |
| 土浦市史編さん委員会 | 1991 「図説 土浦の歴史」 土浦市教育委員会 |
| 土浦市文化財保護審議会 | 1978 「土浦市の文化財」 土浦市教育委員会 |
| 永井 久美男 | 1996 「日本出土銭一覧」 兵庫理藏銭調査会 |
| 増田精一・岩崎卓也ほか | 1986 「武者塚古墳 武者塚古墳・同2号墳・武具八幡古墳の調査」 武者塚古墳調査会 新治村教育委員会 |

報告書抄録

ふりがな	しんめい いせき だい1じ・だい2じちょうさ							
書名	神明遺跡(第1次・第2次調査)							
副書名	上浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	第5集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	橋場君男	著者名	窪田恵一 鶴町明子 本田信之 橋場君男 福田礼子					
編集機関	上浦市遺跡調査会							
発行機関	上浦市教育委員会							
所在地	〒300-0812 上浦市下高津2-7-36							
発行年月日	1998(平成10)年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
しんめい いせき 神明遺跡	いばらき ひがしうら うらら 茨城県上浦市 大字常名2774 番地他	08203 C-57	36° 6' 5"	140° 11' 10"	1997(平成9)年 7月8日～ 1997(平成9)年 9月18日	6,978m ²	市運動公園 建設事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
神明遺跡 (第1次調査)	集落跡	縄文(中期)	竪穴住居址 4軒 土坑 3基	縄文土器・石器・土製品	縄文時代中期の集落遺跡。3号住居址は炉上に砾群と土器片を発見する。			
	墓跡	不明	土壙墓(馬) 2基	馬骨				
		時代不明	土坑 6基 溝 9条 掘立柱建物址 1棟	陶器、磁器ほか				
(第2次調査)	古墳	古墳後期(終末期)	方墳 1基	須恵器細片 上師器細片				
	墓跡	近世	土壙墓 1基	寛永通寶 4枚				
		時代不明	土坑 5基 溝 2条	陶器、磁器ほか				

写 真 図 版

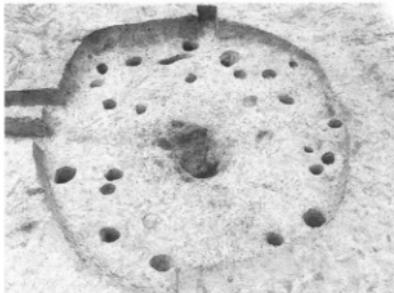


調査区上空より



調査風景(3号住居址)

P L 2 1号・2号住居址



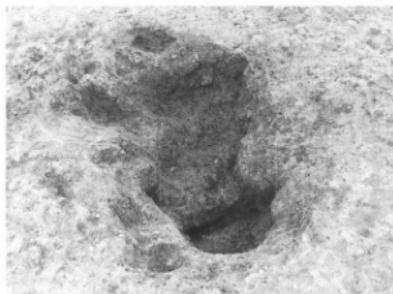
1号住居址検出状況



1号住居址遺物出土状況



1号住居址遺物出土状況



1号住居炉址検出状況



2号住居址検出状況



2号住居炉址検出状況



3号居址検出状況



3号居址礫出土状況



3号居址礫出土状況



3号居址炉址検出状況



3号居址覆土堆積状況



4号居址検出状況

P L 4 1号～5号土坑



1号土坑馬骨出土状况



2号土坑検出状况



3号土坑検出状况



3号土坑遺物出土状况



4号土坑検出状况



5号土坑検出状况

P L 5 7号～9号土坑、1号掘立柱建物址



7号土坑検出状況



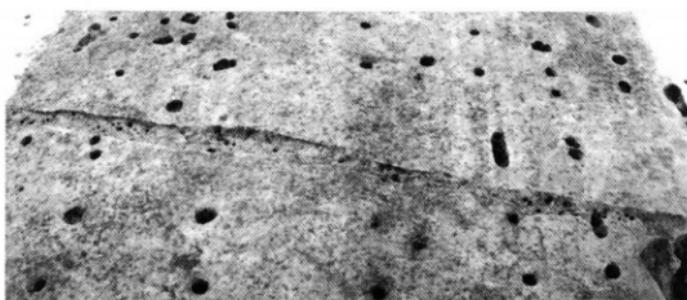
8号土坑検出状況



9号土坑検出状況



1号掘立柱建物址柱穴覆土



1号掘立柱建物址検出状況

P L 6 1号～4号溝



1号溝検出状況



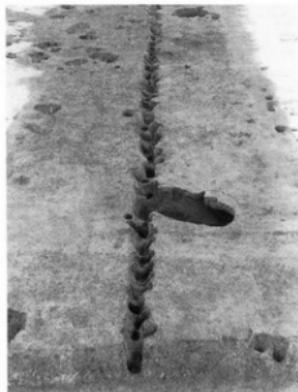
1号溝遺物出土状況



2号溝遺物出土状況



2号溝検出状況



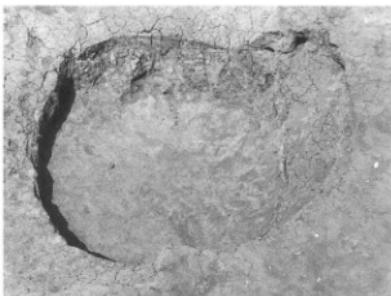
3号溝検出状況



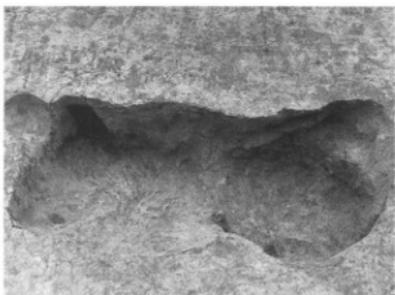
4号溝検出状況



10号土坑検出状況



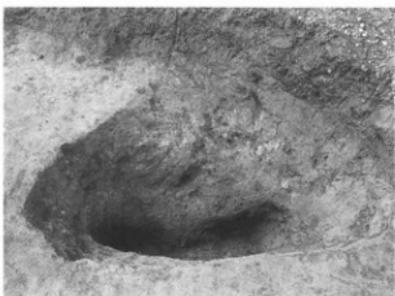
11号土坑検出状況



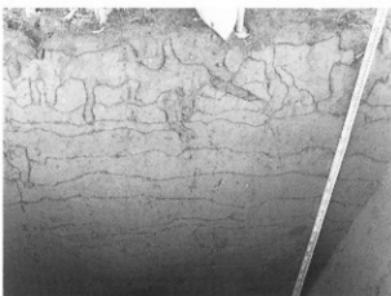
12号土坑検出状況



13号土坑検出状況

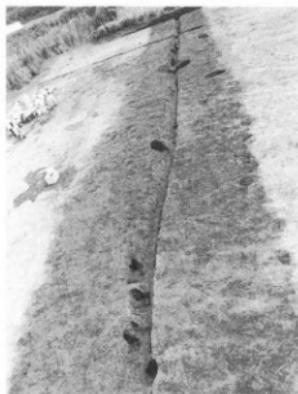


14号土坑検出状況



基本層序

P L 8 10 • 11 • 13号溝、2号墳



10号溝検出状況



10号溝遺物出土状況



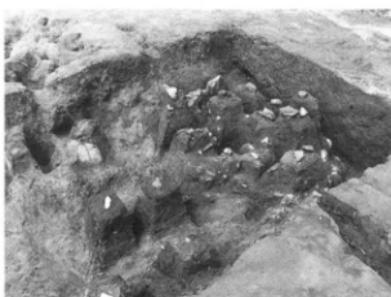
11号溝検出状況



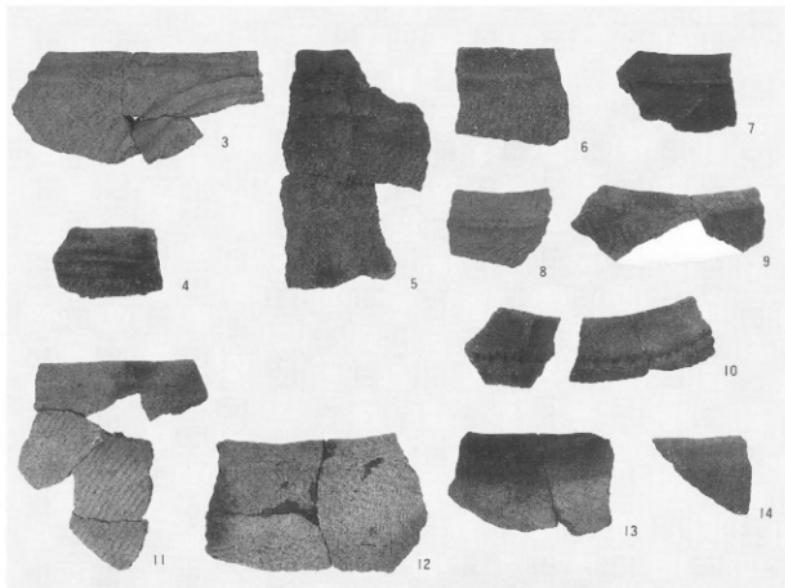
13号溝検出状況



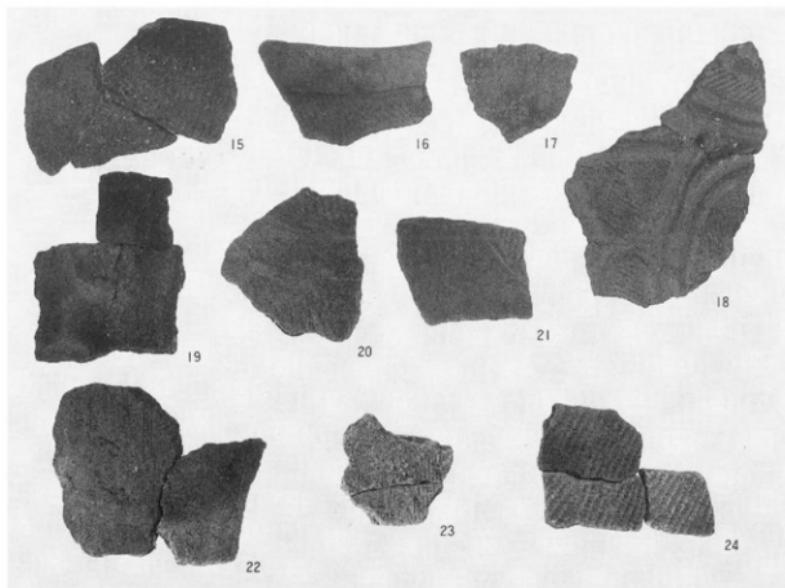
2号墳検出状況



2号墳玄室部分



1号住居址出土土器①



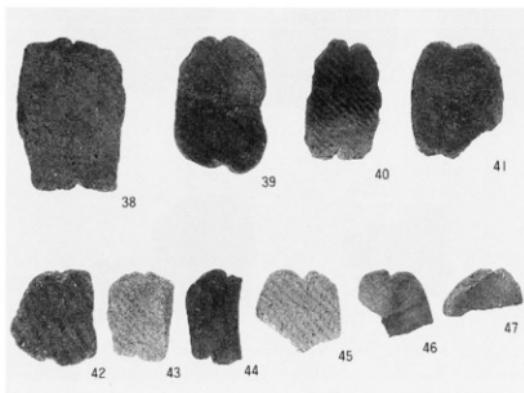
1号住居址出土土器②



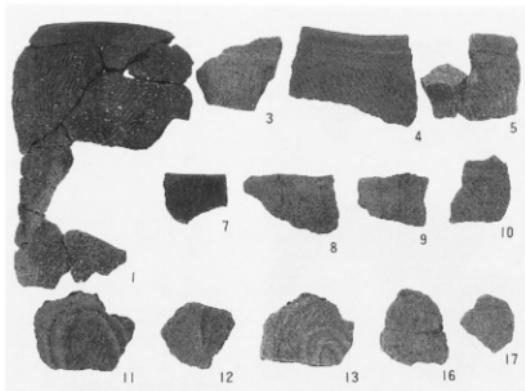
1号住居址出土土器③



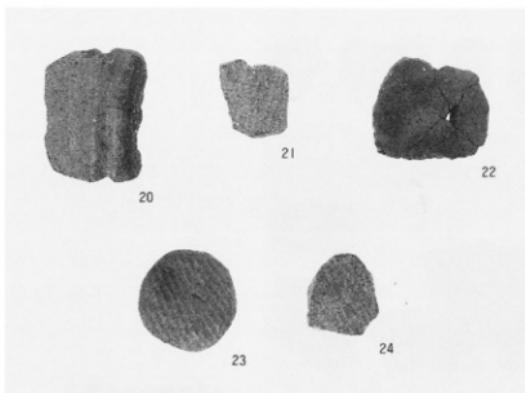
1号住居址出土土器④



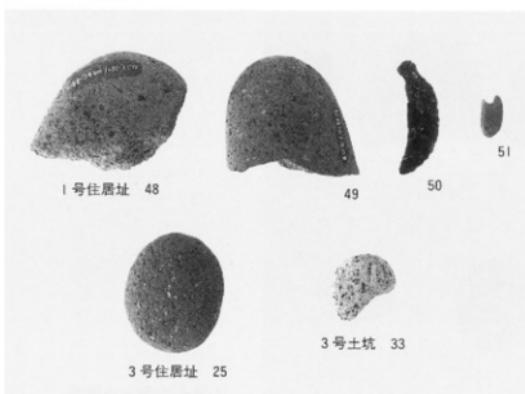
1号住居址出土土製品



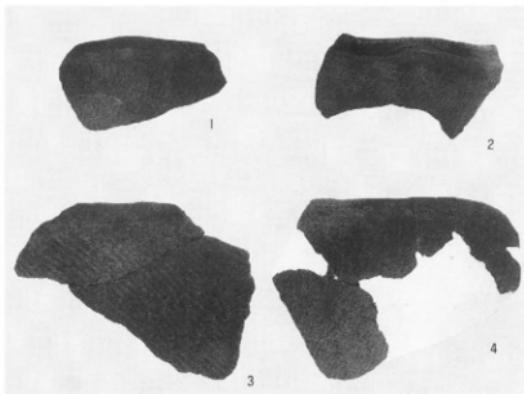
3号住居址出土土器



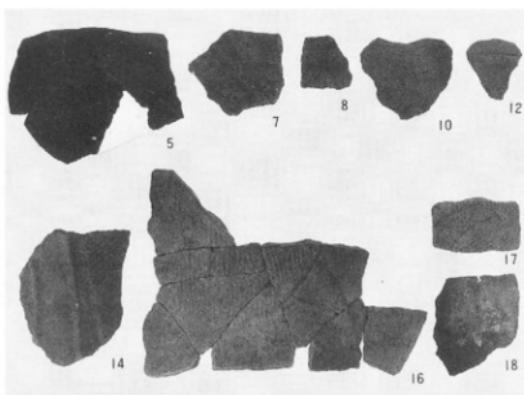
3号住居址出土土製品



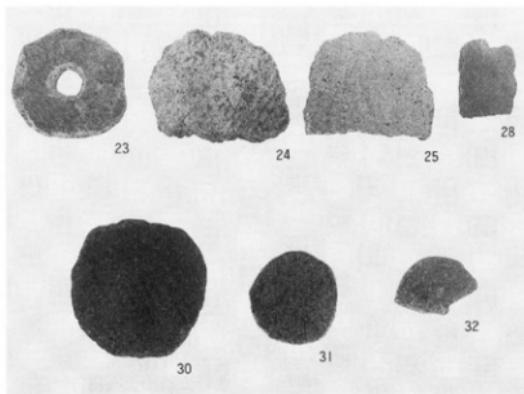
1・3号住居址、
3号土坑出土石器



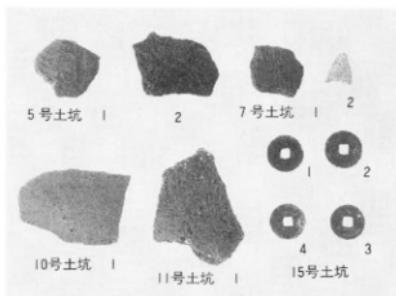
3号土坑出土土器①



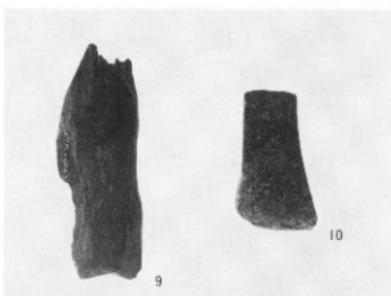
3号土坑出土土器②



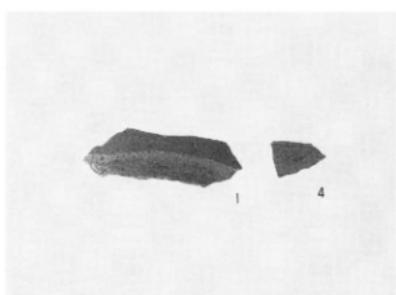
3号土坑出土土製品



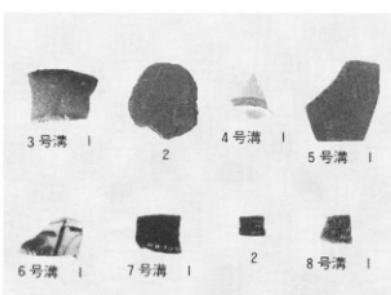
土坑出土遺物



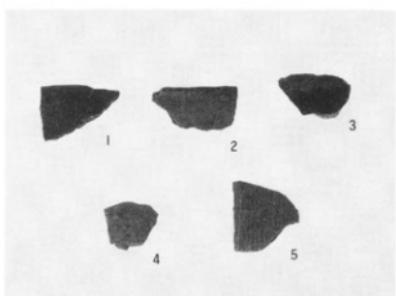
1号溝出土石器



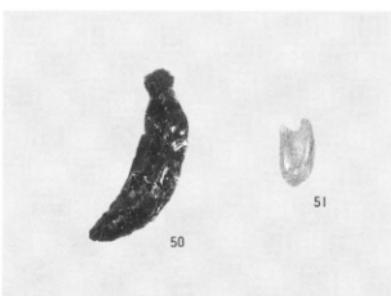
11号溝出土遺物



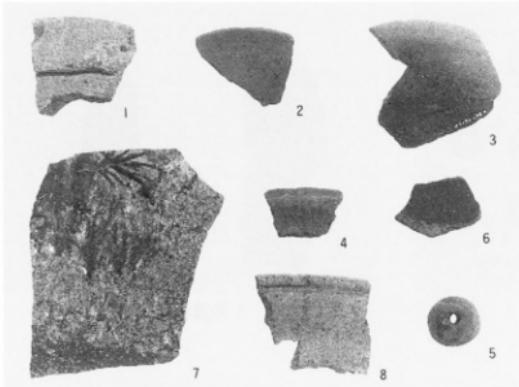
溝出土遺物



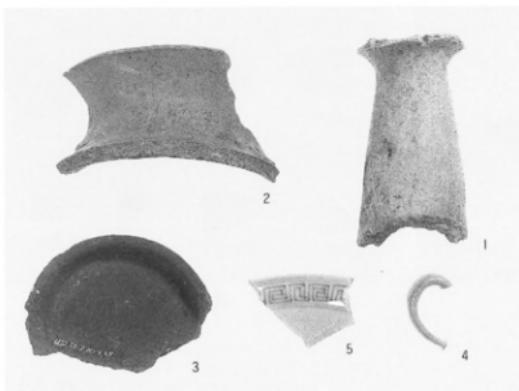
2号墳出土遺物



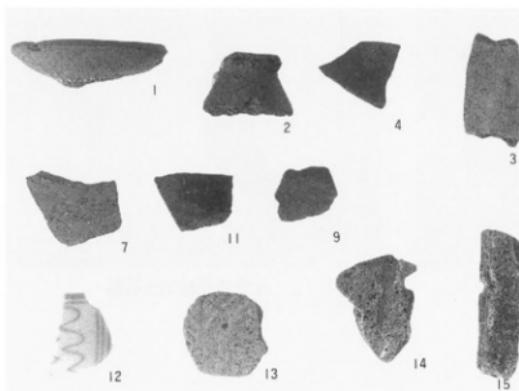
1号住居址出土石器



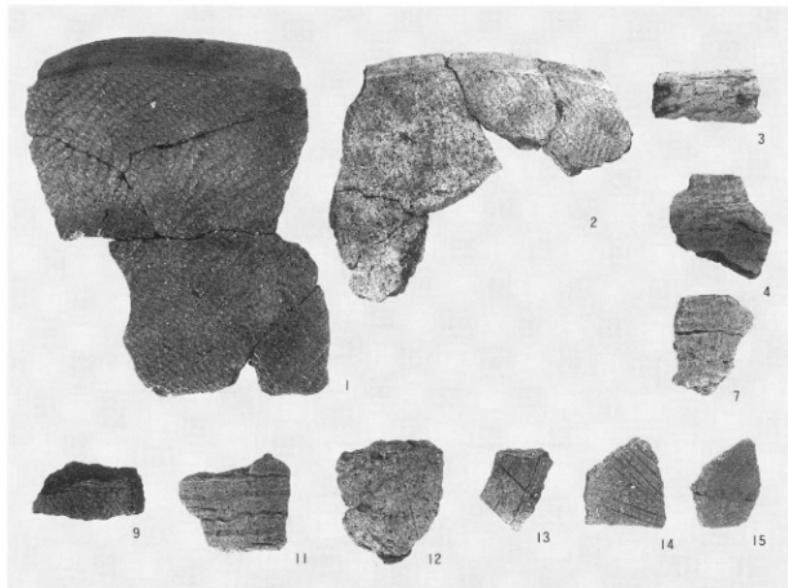
1号溝出土遺物



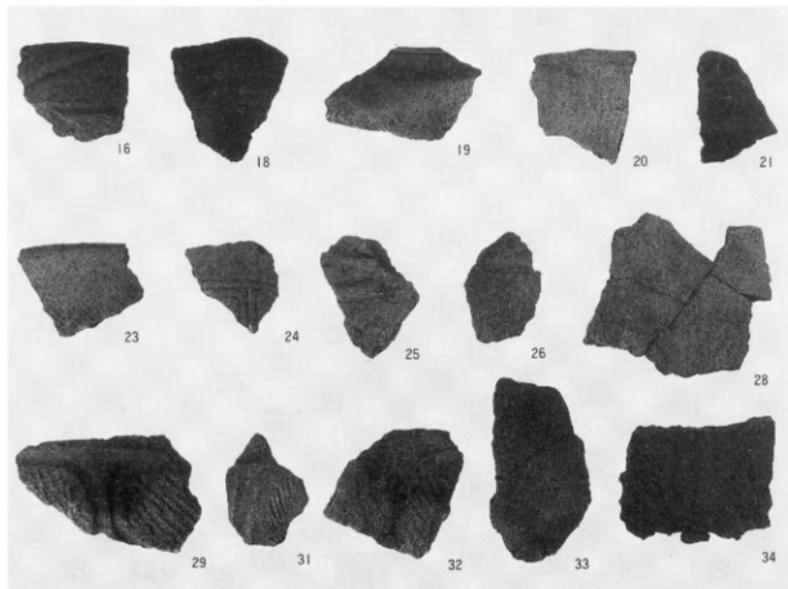
2号溝出土遺物



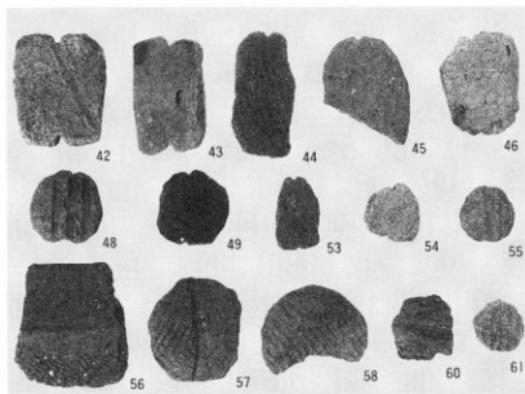
10号溝出土遺物



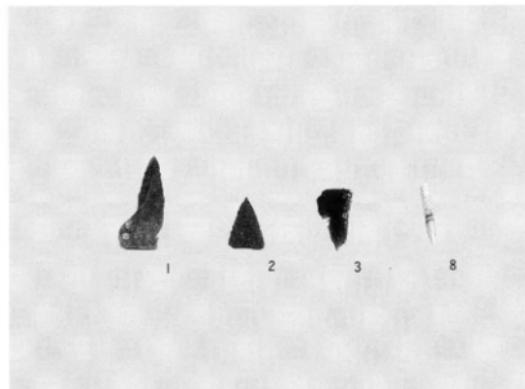
第1次調査区遺構外出土土器①



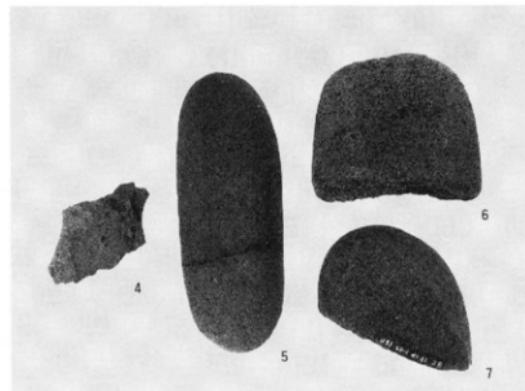
第1次調査区遺構外出土土器②



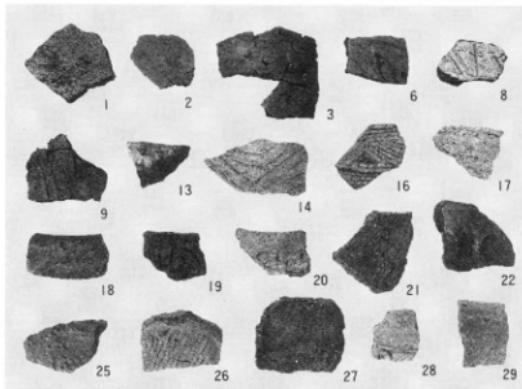
第1次調査区遺構外
出土土製品



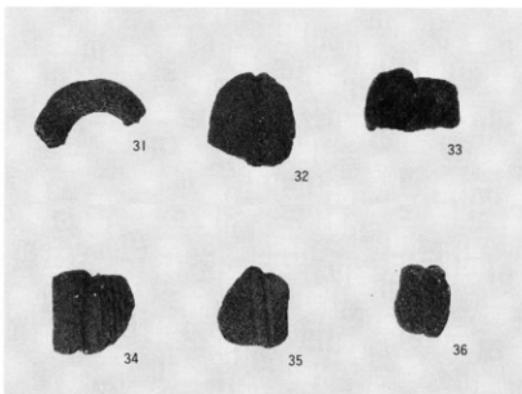
第1次調査区遺構外
出土石器①



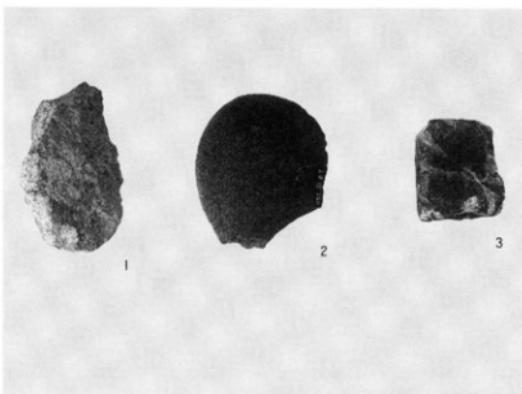
第1次調査区遺構外
出土石器②



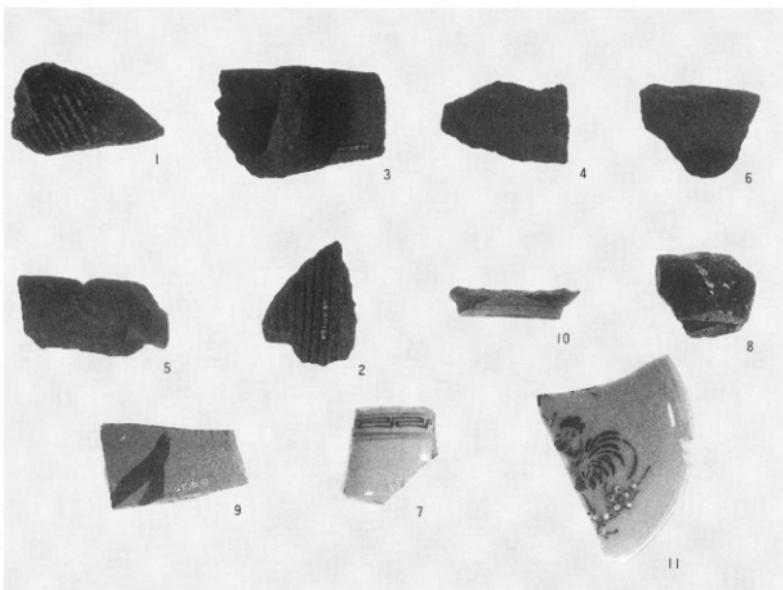
第2次調査区遺構外
出土土器



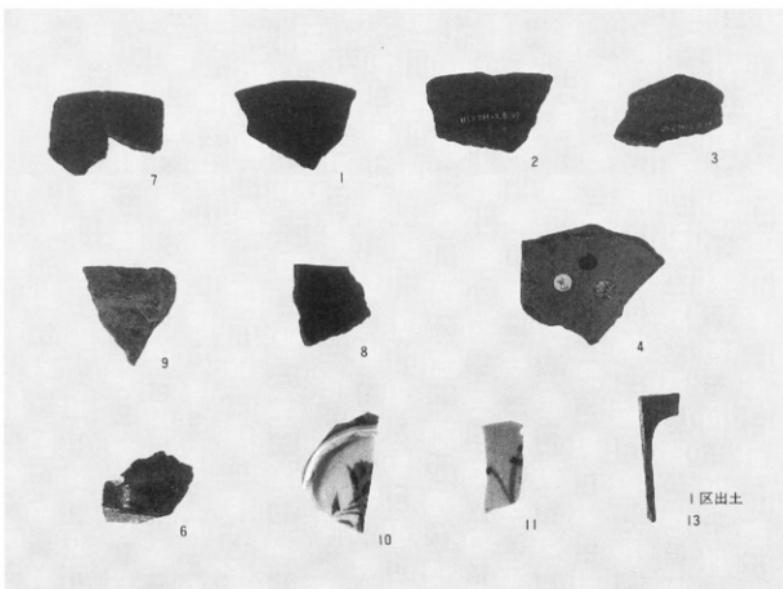
第2次調査区遺構外
出土土製品



第2次調査区遺構外
出土石器



第1次調査区遺構外出土陶磁器



第2次調査区遺構外出土陶磁器

神明遺跡

(第1次・第2次調査)

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集

編 集：土浦市遺跡調査会
発 行：土浦市教育委員会
問い合わせ先：上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811 上浦市上高津1843
TEL 0298(26)7111(代)
発 行 日：平成10年9月30日
印 刷：(株)エリート印刷